鳥羽離宮跡発掘調査概報

平成元年度

京　都　市　文　化　観　光　局

序

京都市は、あと４年後に建都1200年という輝かしい節目の年を迎えようとしております。

ひとくちに1200年といっても、幾多の歴史がこの都市を変貌させてゆきました。

我々が学ぶ日本史の教科書には、必ずいくつかの大きな事変がこの京都で発生し、そして全国に影響を与えたことが記されています。

京都市内は、遙か平安建都以前より多くの人々が定住し、永々として生活を営み続け、それを礎にして都が造営されたといっても過言ではありません。

平安京跡など市内に存在する数多くの遺跡は、京都の持つ永い歴史の一端を明らかにする重要な埋蔵文化財であるばかりではなく、日本の歴史を正確に伝えてくれる国民的な文化遺産でもあります。

これらの遺跡を考古学的に調査し、その成果を紐解くことによって、過去の史実を具体的な形で解明してゆくことが可能となるのではないでしょうか。

この報告書は、京都市が昭和63年度及び平成元年度に、文化庁国庫補助を得て(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託し実施いたしました京都市内埋蔵文化財の調査報告書であります。

調査を担当された方々やご指導いただいた先生方、そして協力いただきました方々に心より厚く感謝するとともに、本書が少しでも京都の歴史を知るための資料として皆様のお役にたてれば幸と存じます。

平成２年３月

京都市文化観光局

例　　言

1　本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託した文化庁国庫補助に伴う平成元年度の鳥羽離宮跡発掘調査概要報告である。

2　発掘調査は4箇所で実施した。調査次数は第130次、131次、133次、134次である。調査地は以下のとおりである。

　Ⅰ　第130次調査　京都市伏見区竹田内畑町86-2

　Ⅱ　第131次調査　京都市伏見区中島御所ノ内町9－1

　Ⅲ　第133次調査　京都市伏見区竹田浄菩提院町26・26-1

　Ⅳ　第134次調査　京都市伏見区竹田浄菩提院町60-1

3　本書の執筆はⅠ章を網　伸也、Ⅱ章を鈴木久男、Ⅲ章を山本雅和、Ⅳ章を前田義明・山本雅和、Ⅴ章を岡田文男が分担した。

4　今回の整理には東洋一・清藤玲子・桜井みどり・真喜志悦子・南出俊彦が参加した。

5　写真撮影は一部を除き牛嶋　茂・村井伸也が担当した。

6　図中に使用した座標値は新平面直角座標系第6による。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）を使用した。

7　本書で使用した土壌の色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準じた。

8　本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の地図（2500分の1）城南宮を、京都市の承認を得て用いた。

9　遺構の表記については次のように略記号を用いた。

　ＳＢ（建物）・ＳＤ（溝）・ＳＧ（園池）・ＳＫ（土壙）・ＳＸ（その他の遺構）

10　第134次調査出土の経石については前東京国立博物館次長三宅敏之氏に教示をうけた。謝辞を申し述べる。

本 文 目 次

I　第130次調査

1　調査経過 …… 1

2　遺　　構 …… 1

3　遺　　物 …… 3

4　ま と め …… 9

II　第131次調査

1　調査経過 …… 10

2　遺　　構 …… 11

3　遺　　物 …… 13

4　ま と め …… 13

III　第133次調査

1　調査経過 …… 16

2　遺　　構 …… 16

3　遺　　物 …… 18

4　ま と め …… 19

IV　第134次調査

1　調査経過 …… 20

2　遺　　構 …… 20

3　遺　　物 …… 21

4　ま と め …… 31

V　植物遺体の調査

1　根株の樹種の調査 …… 33

2　池跡に堆積した植物遺体の調査 …… 33

図 版 目 次

図版１　遺跡　第130次調査　１　第２遺構面全景（北から）
　　２　ＳＫ８（北から）
　　３　柱穴断ち割り（北から）
図版２　遺跡　第130次調査　１　第３遺構面全景（北から）
　　２　ＳＤ１（東から）
　　３　ＳＤ１土器出土状況（東から）
図版３　遺跡　第131次調査　１　調査地全景（北西から）
　　２　ＳＸ１全景（北から）
図版４　遺跡　第131次調査　１　ＳＸ２（西南から）
　　２　ＳＸ１景石（西南から）
図版５　遺跡　第131次調査　１　ＳＸ１全景（北から）
　　２　ＳＸ１北側断ち割り状況（北から）
図版６　遺跡　第131次調査　１　ＳＸ１西側断ち割り状況（北西から）
　　２　ＳＸ１上部地業状況（西北から）
　　３　ＳＸ４景石据え付け状況（西から）
図版７　遺跡　第131次調査　１　北殿の島跡検出状況（第95次調査　西から）
　　２　東殿の島跡検出状況（第117次調査　北から）
図版８　遺跡　第133次調査　１　調査地全景（東から）
　　２　池状遺構の底（東から）
図版９　遺跡　第134次調査　１　調査地全景（南西から）
　　２　洲浜（南から）
図版10　遺跡　第134次調査　　水をたたえた池（西から）
図版11　遺跡　第134次調査　１　池の汀（北東から）
　　２　田下駄出土状況
　　３　人物像出土状況
図版12　遺物　第130次調査　　軒丸瓦・軒平瓦
図版13　遺物　第130次調査　　ＳＤ１出土土器

図版14　遺物　第130次調査　　ＳＤ１出土土器底部
図版15　遺物　第130次調査　1　輸入陶磁器
　　2　木製品（下駄）
図版16　遺物　第130次調査　　木製品（漆器・曲物・草履芯・木球ほか）
図版17　遺物　第133次調査　1　軒丸瓦・軒平瓦
　　2　木製品（下駄・蒔絵ほか）
図版18　遺物　第134次調査　　軒丸瓦(1)
図版19　遺物　第134次調査　　軒丸瓦(2)
図版20　遺物　第134次調査　　軒平瓦
図版21　遺物　第134次調査　　建築部材（屋根板）
図版22　遺物　第134次調査　　建築部材（垂木）
図版23　遺物　第134次調査　　建築部材（屋根板・野地板・垂木ほか）
図版24　遺物　第134次調査　　建築部材（回り縁・幣軸）
図版25　遺物　第134次調査　　建築部材（柱）
図版26　遺物　第134次調査　　建築部材（床板・根太ほか）
図版27　遺物　第134次調査　　木製品（雲形木製品）
図版28　遺物　第134次調査　1　木製五輪塔参考例（第112次調査出土）
　　2　木製品（木製五輪塔）
図版29　遺物　第134次調査　　木製品（人物像・軸・田下駄ほか）
図版30　遺物　第134次調査　　経石
図版31　自然遺物　第134次調査　池埋土中の植物遺体（種実）
図版32　自然遺物　第134次調査　建築部材顕微鏡写真(1)
図版33　自然遺物　第134次調査　建築部材および根株顕微鏡写真(2)
図版34　遺跡　調査位置図
図版35　遺跡　東殿地区調査位置図
図版36　遺跡　第130次調査　　第２遺構面遺構実測図
図版37　遺跡　第130次調査　　第３遺構面遺構実測図
図版38　遺跡　第131次調査　　ＳＸ１平面・断面実測図
図版39　遺跡　第134次調査　　遺構実測図
図版40　遺物　第130次調査　　軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図

図版41　遺物　第134次調査　　軒丸瓦拓影実測図(1)
図版42　遺物　第134次調査　　軒丸瓦拓影実測図(2)
図版43　遺物　第134次調査　　軒平瓦拓影実測図
図版44　遺物　第134次調査　　建築部材実測図（屋根板・野地板・回り縁・幣軸・床板）
図版45　遺物　第134次調査　　建築部材実測図（垂木）
図版46　遺物　第134次調査　　建築部材実測図（柱）
図版47　遺物　第134次調査　　木製品実測図（雲形木製品・人物像・軸）
図版48　遺物　第134次調査　　木製品実測図（下駄・田下駄）

挿　図　目　次

図1　東壁断面図……1
2　ＳＫ８東側杭列実測図……3
3　ＳＤ１出土土器実測図……5
4　第３遺構面出土土器実測図……6
5　ＳＤ６ａ出土土器実測図……7
6　ＳＤ６ｂ出土土器実測図……7
7　漆器実測図……8
8　木製品実測図……8
9　皇宋通宝拓影……9
10　調査地位置図……10
11　景石据え付け状況……11
12　遺構実測図……12
13　土器実測図……13
14　島の構築過程復元図……14
15　北壁断面図……16
16　遺構実測図(1)……17
17　遺構実測図(2)……17
18　軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図……18
19　土器・陶器実測図……18

20　木製品実測図……19
21　東壁断面図……20
22　断ち割り断面図……21
23　土器実測図……24
24　柱復元図……28
25　木製品実測図……29
26　根株・土壌サンプル採取地点位置図……34

表　目　次

表1　建築部材観察表……26
2　経石釈文……31
3　第134次調査植物遺体学名表（木本）……35
4　第134次調査植物遺体学名表（草本）……35
5　池の汀線沿いの木本種実数……36
6　池の汀線と直角方向に分散する木本種実数……36

Ⅰ　第130次調査

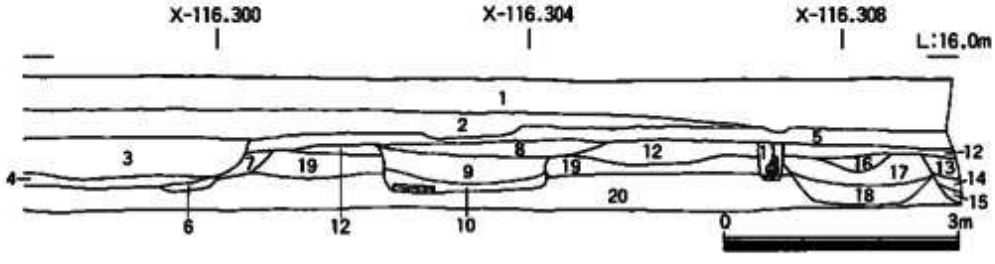
1　調査経過

当調査地は、鳥羽離宮東殿の推定地西北部に当たる。東殿の北辺の調査は、過去に小規模な試掘程度の調査しか行なっておらず、その実態は不明であった。この地にマンションの建設が計画されたため、工事に先立って試掘調査を実施した。その結果、平安時代後期から中世にかけての遺構が良好に残っていることが判明したため、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、重機によって表土を掘削した後に開始し、合計３面の遺構面を調査した。検出した遺構は、平安時代後期から室町時代末にいたる堀・溝・建物などが主なもので、それぞれ写真撮影および実測を行ない、東壁部分の断ち割り調査を終えてすべての作業を終了した。なお、排土は２回に分けて調査区外へ搬出しており、遺構面掘り下げ時の排土はできるだけ場内で処理した。

2　遺　　構（図版１・２・35・36、図１・２）

本調査区の基本的な層序は、現在の地表下0.8mが盛土および旧耕作土で、その下が第１遺構面である。オリーブ黒色泥砂層上に形成されており、流路や柱穴群を検出した。また、その下層0.2mで第２遺構面となる。宅地を区画したと考えられる堀や貯蔵用の施設・柱穴



1　盛土	6　オリーブ黒色砂泥(SD7b)	11　緑黒色砂泥	16　黒色砂泥
2　旧耕土	7　オリーブ黒色砂泥(SD7a)	12　灰オリーブ色砂泥	17　オリーブ黒色砂泥
3　オリーブ黒色砂泥	8　灰色砂泥(小石を多く含む)	13　暗緑灰色砂泥	18　オリーブ黒色粘土
4　オリーブ黒色粘土	9　オリーブ黒砂泥	14　オリーブ黒色砂泥	19　暗緑灰色砂泥
5　オリーブ黒色泥砂	10　黒色砂泥(木片を多く含む)	15　黒色砂泥	20　暗オリーブ灰色砂泥

図１　東壁断面図

群を検出した。第３遺構面は、0.2～0.3mの厚さで堆積した灰オリーブ色砂泥を除去した後、暗緑灰色砂泥層上で検出した。この暗緑灰色砂泥層の下層には暗オリーブ灰色砂泥層が厚さ0.5mで堆積している。遺物はほとんど見られないが、瓦器片が一片出土しており、平安時代後期に川の氾濫などで形成されたもののようである。その下層が、遺物をまったく包含しないオリーブ黒色砂泥である。ここでは特に、第３遺構面と第２遺構面で検出した遺構について述べておく。

第３遺構面の遺構

ＳＤ１　調査区南端で検出した東西溝である。幅２m、深さ0.6m、長さは検出しただけで7.5mである。溝底から土師器がまとまって出土し、そのなかには搬入されたと考えられる土師器が多く見られた。

ＳＤ２　ＳＤ１の北で検出した東西溝である。長さ4.5m分検出し、調査区中央で途切れている。幅１m、深さ0.3mである。出土遺物は少ないが、ＳＤ１と同型式の土師器片が出土している。

ＳＫ３　ＳＤ２の北で検出した土壙である。長辺２m、短辺1.2mの長方形を呈し、深さは約0.3mである。完形の土師器皿が４枚まとまって出土しており、墓壙である可能性が高い。

ＳＫ４　調査区中央で検出した不定形で浅い落ち込みである。規模は検出しただけで７m、深さは約0.1mである。

ＳＫ５　調査区東端で一部検出した不定形の土壙である。深さ0.6mを測る。底からは長さ１mほどの板材が多く出土し、中には「⊕」と焼き印が押されているものもあった。この土壙は第３遺構面で検出したが、東壁の断面観察から第２遺構面で検出すべき遺構であることが判明した。

第２遺構面の遺構

ＳＤ６　調査区北東で検出した南北方向の堀である。切り合い関係から２時期に分かれる。ＳＤ６ａは幅１m、深さは約0.3mで、10m分を検出したが、南で途切れている。ＳＤ６ｂは、ＳＤ６ａを掘り直した幅１m強・深さ約0.6mの断面Ｖ字の堀である。ＳＤ６ａより５m短く、この時期にはＳＤ７との間に約２mの空閑地を設けて通路状にしている。

ＳＤ７　調査区中央で検出した東西方向の堀である。長さは検出しただけで７mである。ＳＤ６に対応して２時期に分かれる。ＳＤ７ａは幅は不明であるが、深さは約0.3mである。ＳＤ７ｂはＳＤ７ａを掘り直した堀で、幅１m、深さ0.5mである。ＳＤ６ａとＳＤ７ａあるいはＳＤ６ｂとＳＤ７ｂは同時期で両堀で宅地の一部を区画していたと考えられる。

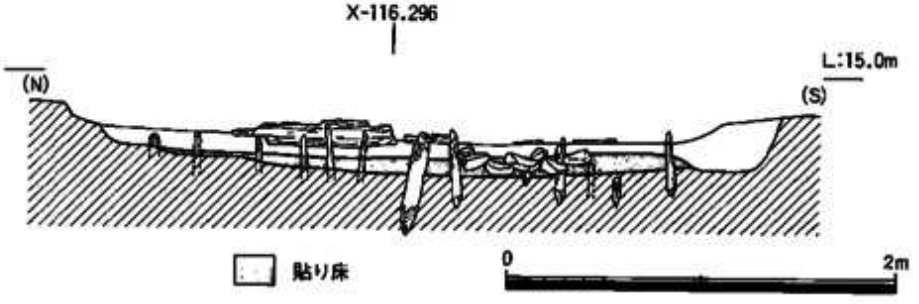


図２　ＳＫ８東側杭列実測図

ＳＫ８　堀で区画された宅地の南東隅に設けられた貯蔵用の施設である。南北４ｍ、東西2.5mの長方形で、深さ0.4m掘り込んだ後、版築状に突き固めて厚さ0.2mの貼り床を形成している。また、壁の四周には板を貼り付け、杭を打ち込んで固定していたようである。これらの板と杭は一部炭化しており、火災にあったことを示している。この施設にともなう柱穴は検出できなかった。なおＳＫ８の貼り床から出土した輸入陶磁器片とＳＤ６ａから出土した輸入陶磁器片が接合しており、ＳＤ６ａとＳＤ７ａで区画された時にＳＫ８も建てられたと考えられる。

このほか多数の柱穴を検出した。この中には礎石と礎板によって強固に作った柱穴（図版１-３）も見られるが、調査区が狭く建物としてのまとまりは把握できなかった。

３　遺　　物（図版11～15・40、図３～９）

遺物は整理箱にして45箱分出土している。そのうち土器・瓦類は35箱で、あとは木製品である。

瓦　　類

瓦の出土量は全体的に少ない。以下軒瓦について記述する。

軒丸瓦は巴文軒丸瓦だけである。１は東海地方の産である。瓦当側面と裏面はヘラケズリによって調整し、文様面と側面の一部には灰釉がかかる。焼成・胎土ともに良好で、灰白色を呈する。ＳＫ５から出土した。２・３は山城産と考えられる軒丸瓦である。瓦当裏面はユビオサエによって調整する。瓦当径は小さく、粗雑な作りで、全体に暗灰色を呈する。３では側面と裏面下端部にヘラケズリを施す。４は播磨産の軒丸瓦である。瓦当裏面と側面には丁寧なナデ調整を施す。灰白色～灰色を呈し、焼成・胎土ともに良好である。

軒平瓦は、７点ある。５は讃岐産の連巴文軒平瓦である。全体に厚く、凸面に粗い縄叩きを斜方向に施す。顎部はヘラケズリによって段を作っている。灰白色を呈し、焼成・胎

土ともに良好である。6～8はつつみ込み式に接合する播磨産の唐草文軒平瓦である。顎部や側面には丁寧なナデ調整を施す。焼成・胎土ともに良好で、特に6・7は須恵質に焼き上っている。全体に灰色を呈する。9は東海産の唐草文軒平瓦である。折り曲げによって瓦当部を作っているため、文様面に布目が残る。瓦当裏面や側面はヘラケズリによって仕上げている。焼成・胎土ともに良好、褐灰色を呈する。10は産地が不明の流麗な唐草文軒平瓦である。凸面にはやや大きめの斜格子叩きを顎の部分まで施し、顎から平瓦にかけての部分ではナデ調整で叩きを消している。青灰色～灰色を呈し、焼成・胎土ともに良好である。11は格子文軒平瓦である。顎の部分はナデによって調整している。灰白色～灰色を呈する。山城産と考えられる。

土 器 類

第3遺構面出土土器　ＳＤ１から山城産の土師器と搬入土器が共伴して出土し、良好な一括資料となっている。

山城産の土師器は、口径10cmほどの小型の皿と、口径15cmほどの大型の皿、さらにいわゆるコースター形の皿（受け皿）が出土している。小型の皿（1）は、底部内面をナデ調整、底部外面をユビオサエによって成形したのち、口縁部内外面にヨコナデを施す。口縁部はやや外反しており、調整のヨコナデも２段ぎみになるなど古い特徴を残している。胎土・焼成ともに良好で、にぶい黄橙色を呈する。大型の皿（3～6）の成形・調整は小型皿と同じで、口縁部のヨコナデも２段ぎみになる。胎土は砂粒を多く含みやや厚手なもの（3・4）と胎土は良好で薄いもの（5）、あるいはその中間的なもの（6）があり、産地の違いを示していると考えられる。コースター形の皿（2）は、口径11cmほどの皿で、口縁部と内面をナデ調整、外面をオサエによって調整する。口縁端部はやや上に持ち上げる。胎土・焼成ともに良好で、灰白色を呈する。これらの土師器のセットは、鳥羽離宮出土土器のなかでも全体的に古いものであり、皿の口縁部のヨコナデ調整が２段ナデから１段ナデに変わる過渡期のものと考えられる。

搬入されたと考えられる土師器として、口縁部が外反したロクロ成形の皿が多く出土している。これらは、色調やロクロから切り離す技法の違いによって２群に分けられる。Ⅰ群は、底部外面に回転ヘラ切り痕跡を残すやや赤味を帯びた皿（8～11）である。口径は13.5cmほどで、ヘラ切り痕跡を若干ナデ消している。胎土・焼成ともに良好である。Ⅱ群は、底部外面に回転糸切り痕跡を残す灰白色の皿である。口径9.5cmの小型の皿（7）と口径14.5cm～15cmの大型の皿（12～15）がある。回転糸切り痕跡をナデ調整によって若干消

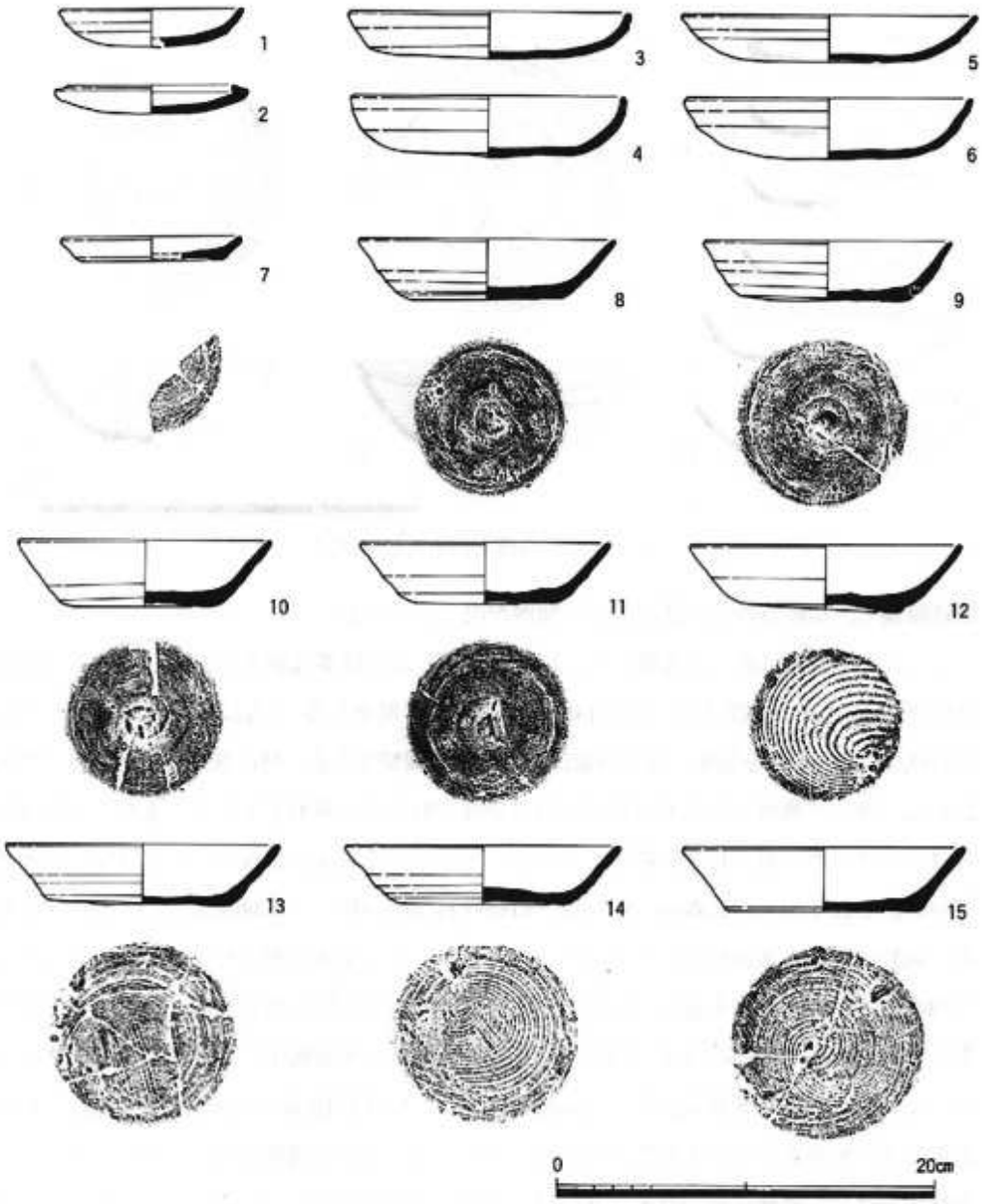


図3　SD1出土土器実測図

しているものもある。胎土は良好であるが、Ⅰ群に比べて全体的に焼成が甘い。ロクロ成形の土師器は、西国地方で多く作られており、鳥羽離宮造営時に淀川をさかのぼって搬入されたものと考えられる。

また、輸入陶磁器も一点出土している（図版15-42）。中国の泉州磁灶窯で焼成された黄

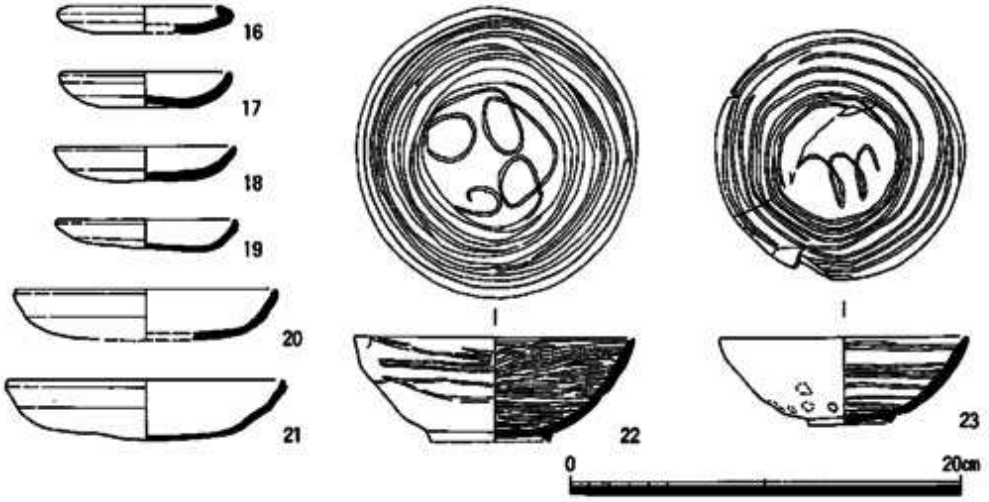


図４　第３遺構面出土土器実測図

釉鉄絵盤で、福岡市の京ノ隈経塚から類例が出土している。

このほか第３遺構面の各遺構から、口縁が内湾した土師器皿が多く出土している。皿には口径9.5cmほどの小型の皿と口径14cmほどの大型の皿がある。ともに底部内面をナデたあと口縁部にヨコナデを施す。底部外面はユビオサエ調整である。特にＳＫ３出土の皿（19・21）は、薄くて焼成・胎土も良好で、口縁端部の断面は三角形を呈する。また、ＳＫ５からコースター形の皿（16）が出土している。さらに、ＳＫ４とＳＫ５から瓦器椀が出土している。ＳＫ４出土の瓦器椀（22）は、口径約14.5cmの椀で、口縁端部内面には沈線が廻る。調整は、第１次調整として型にはめてユビオサエで全体の形を整えてから口縁部外面と内面にヨコナデ調整を施し、底部外面には断面三角形の低い高台を貼り付ける。そして、第２次調整として外面には粗く内面には丁寧なヘラミガキを施す。底部内面のヘラミガキはラセン状である。ＳＫ５出土の瓦器椀（23）は、口径約12.5cmのやや小さな椀で、口縁端部は丸く納める。第１次調整は22と同じであるが、第２次調整は内面に粗いヘラミガキを施すだけで、底部内面のラセン状ヘラミガキもかなり退化している。これらの瓦器の型式差は、ＳＫ５が第２遺構面で形成されていたと考えられることから、明らかに年代差である。輸入陶磁器は、ＳＫ３から竜泉窯の青磁皿(図版14-43)、ＳＫ４から玉縁白磁椀(図版15-44）が出土している。

第２遺構面出土土器　第２遺構面ではＳＤ６とＳＤ７から多くの土器が出土した。ＳＤ６とＳＤ７はそれぞれ対応して２時期あることは既に述べた。ここではＳＤ６ａとＳＤ６

bの出土土器について述べておく。

ＳＤ６ａでは、土師器皿と輸入陶磁器が出土している。土師器皿(25～28)は第３遺構面の各遺構から出土した土師器皿と器種構成や調整が共通しているが、全体的に作りが厚手で粗雑な感じを与える。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成も悪くなっている。なお、口縁が強く屈曲する皿(24)が下層から一点出土している。焼成・胎土ともに良好で、古色を示しており、第３遺構面の遺物が混じり込んだ可能性が高い。輸入陶磁器は、口禿白磁皿(29、図版15-29)、鎬連弁文青磁椀(30、図版15-30)、褐釉陶器壺(31、図版15-31)などが出土している。特に、口禿白磁皿は、ＳＫ８の貼り床から出土した破片と接合しており、ＳＤ６ａとＳＫ８が同時期の遺構であることがわかる。

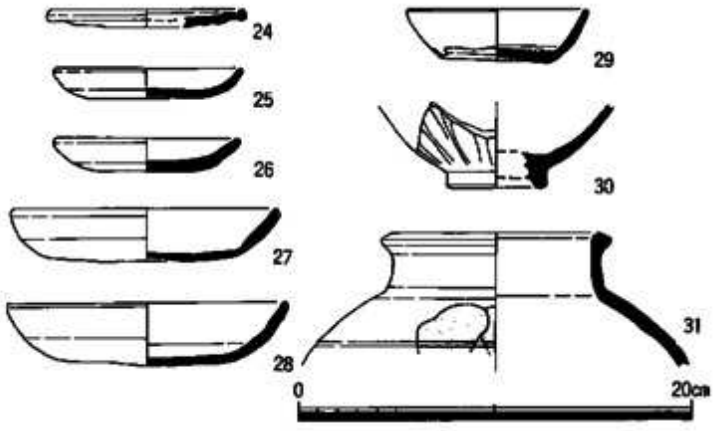


図５　SD6a出土土器実測図

ＳＤ６ｂからは、土師器皿・輸入陶磁器・瓦器・陶器が出土している。土師器皿は、基本的には口縁部外面と内面をヨコナデ、他の外面はユビオサエを施すが、調整や焼成の違いによって２群に分かれる。Ｉ群は、灰黄色を呈する粗雑な作りの一群である。口径８cmほどの小型の皿(33)と口径10.5cmほどの皿(34・35)があり、前者はへそ皿状に底部を指で若干持ちあげる。調整が粗く全体に歪んでいる。II群は、灰白色を呈する調整の丁寧な一群である。へそ皿(32)と口径11.5cmほどの器高の高い皿(36・37)がある。いわゆる白土器系統の土群である。輸入陶磁器には、青磁椀(38　図版15-38)と青白磁の合子(39)が出土している。また、瓦器は小壺(40)が、陶器は褐釉を

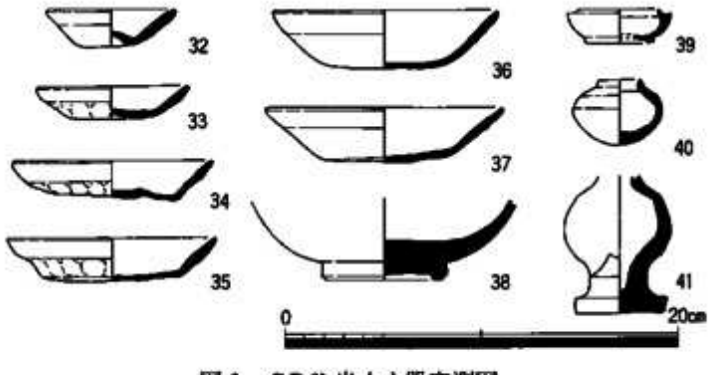


図６　SD6b出土土器実測図

施した花瓶（41）が出土している。

なお、明確な遺構に伴なわないが、玉縁白磁椀（図版15-45・46）・青磁椀（図版15-47・48）・鎬連弁文青磁椀（図版15-49・50・51・52）などの輸入陶磁器片が多く出土している。なかでも皿と考えられる輸入陶磁器片（図版15-53）は注目される。素地の胎土は緻密で内面と口縁部外面を白泥で化粧する。さらに、口縁端部に青彩を施したのち、白泥で化粧した部分に透明釉を掛けている。小破片で詳細は明らかでないが、青彩は底部内面にも見られる。第2遺構面下の灰オリーブ色砂泥から出土したもので、釉下彩陶器として古い例である。

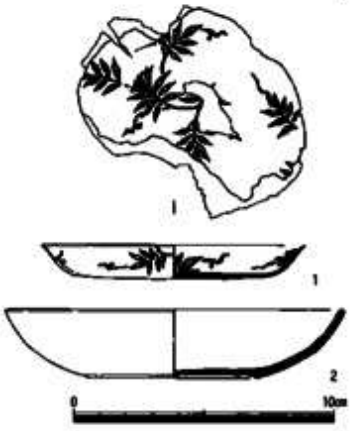


図7　漆器実測図

木製品

木製品はSD6から多く出土した。1はケヤキ材を薄く削り出した素地に黒漆を施し、そのうえから朱漆によって流麗な唐草文を描いた皿である。SD6aから出土。2はカエデ材を削り出した素地に黒漆を施した椀である。SD6bから出土。3はヒノキで作った小さな曲物である。SD6bから出土。4はスギ材を薄く削りだし、表に横方向の罫線を5本施した木製品である。SD6aから出土。5・6は草履の芯と考えられる一対の木製品である。スギ材を薄く割って作っており、割ったと

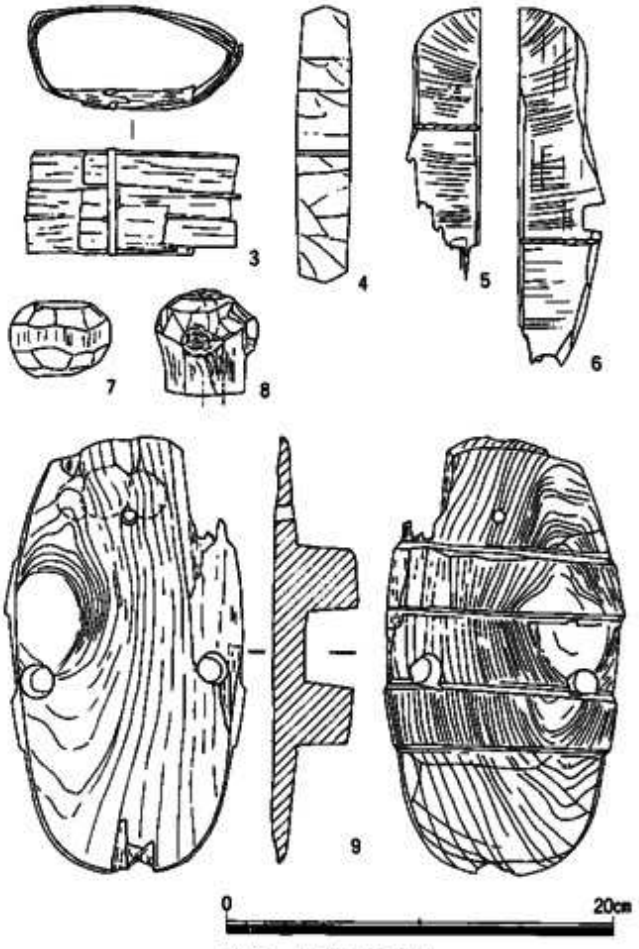


図8　木製品実測図

きの線が円弧状に走っている。ＳＤ６ｂから出土。７・８は木球である。７はネムノキ、８はマツを削って作っている。なお、８は未製品で、未加工部に棒をさし込んだような痕跡が見られる。ＳＤ６ｂから出土。９はヒノキの材を削り出した下駄である。指の痕跡が明瞭に残る。ＳＤ６ａから出土。このほか、ＳＤ７ｂから表に黒漆を塗り、朱の花文様をスタンプした内朱椀片（図版15-10）が出土した。

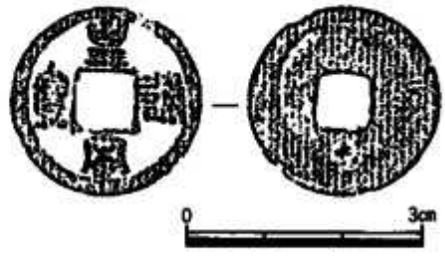


図９　皇宋通宝拓影

金属製品

第１遺構面の柱穴の中から皇宋通宝が出土している（図９）。

４　ま　と　め

今回の調査で検出したＳＤ６とＳＤ７は、敷地を区画する堀の一部である。このあたりは、中世において在地の土豪が居を構えた地域であり、ＳＤ６とＳＤ７は内側に貯蔵用の施設（ＳＫ８）をともなっていることから、在地の土豪の屋敷の東南角を検出したと考えられる。ＳＤ６・ＳＤ７は掘り直されており、平安時代後期から中世にかけての長い年月に渡って存続していたことが判明した。また、ＳＤ６が現在の油小路の西端にほぼ沿っていることは注目される。これは、平安京域から鳥羽離宮へつながる油小路の成立時期を考えるうえで重要な資料となるであろう。さらに、ＳＤ１から出土した多量の搬入土器は、鳥羽離宮造営時における地方とのつながりを考えるうえで重要な問題を提起している。調査区面積が狭く、詳しく検討を加えることはできないが、これからの調査例の増加によって鳥羽離宮周辺の景観の復元も可能となろう。

II　第131次調査

1　調査経過（図10）

調査地は、名神高速道路京都南インターチェンジと鴨川とに近接した水田に位置する。この付近一帯は、北殿跡推定地内にあたり、過去数次にわたる発掘調査を実施している。このたび当地に、倉庫建築の計画が提示されたため工事に先立って試掘調査を実施した。その結果、庭園遺構の一部と考えられる痕跡を発見した。このため、京都市埋蔵文化財調査センターと原因者とが発掘調査を実施することについて協議した結果、継続して調査を行う運びとなった。

調査は、耕土、床土を重機で除去することから開始した。地表下約0.6mまで掘り下げると、島の一部と考えられる高まりを調査地の南東部で検出した。その周囲には、池跡を示す青灰色粘土の堆積が認められた。この青灰色の粘土を掘り下げると景石が3個出土した。今回検出した遺構と第118次調査で発見した遺構との関係を明らかにするため、調査地の北側に新たに調査区を設定した。調査の最終段階で、島の一部と考えられる陸部に断ち割りトレンチを2箇所に設定した。なお、埋め戻しに際し遺構面は砂で覆った。

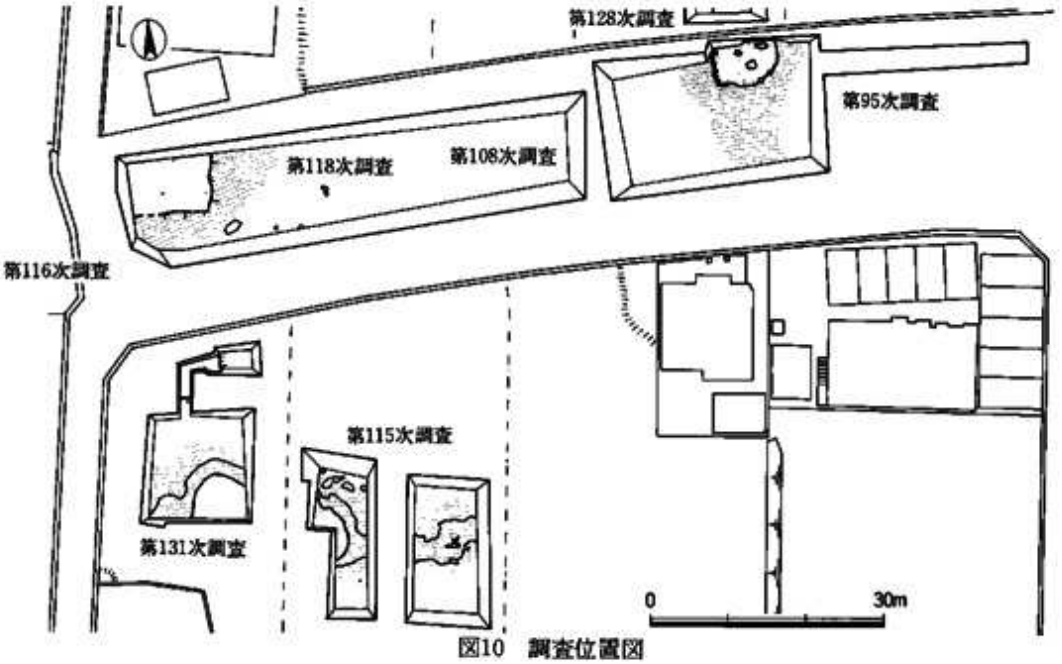


図10　調査位置図

2　遺　　構（図版3～6・38，図11・12）

検出した遺構は、ＳＸ１、ＳＸ２、ＳＧ３、ＳＸ４、ＳＸ５、ＳＸ６などである。以下、その概要についてのべる。

ＳＸ１　調査区の南半部で発見した島跡と考える陸部で、北及び西側へ傾斜する。この遺構の東半部の状態は、第115次調査で明らかにしている。今回の調査で検出した陸部で、もっとも高い部分は標高13.3mを測った。陸部と池底との高低差は約1.1m前後である。陸部西側の標高12.6～７m前後の高さは比較的平坦で傾斜も緩やかであるが、北側は急勾配である。園池跡の汀と考えられる、標高12.5m前後の高さには、景石が３個据え付けられていた。陸部を断ち割り調査した結果、第115次調査では認められなかった構築工法を確認した。すなわち、陸部の中心部（核）と推定される部分は、玉石だけを盛り上げて構築している。しかも、盛り上げられた玉石積みの裾部は、80cm前後の花崗岩を環状に並べて、玉石が崩れないようにしていた。底部に近い玉石と玉石との間や花崗岩を組み合わせた部分には空洞になった箇所がみられた。玉石積みから上部は、褐色系の土を覆いかぶせている。

ＳＸ２　園池跡（ＳＧ３）へ西から東に張り出すように造られた遺構の一部である。東辺部は、第118次調査で検出した基壇の東辺とほぼ同じ出である。汀には、洲浜や護岸の施設はいっさい認められなかった。陸部から園池にかけての傾斜は比較的急勾配である。

ＳＧ３　北殿跡の推定地に広がる園池跡である。池内の堆積土は暗緑灰色粘土層であるが、腐植土層はいっさい認められなかった。ＳＸ１とＳＸ２との間の池底は、人工的な掘り下げを示す円錐形の窪みが認められた。園池の水位は、今回検出した景石の高さや周辺部の調査成果などから標高12.5m前後と考えている。

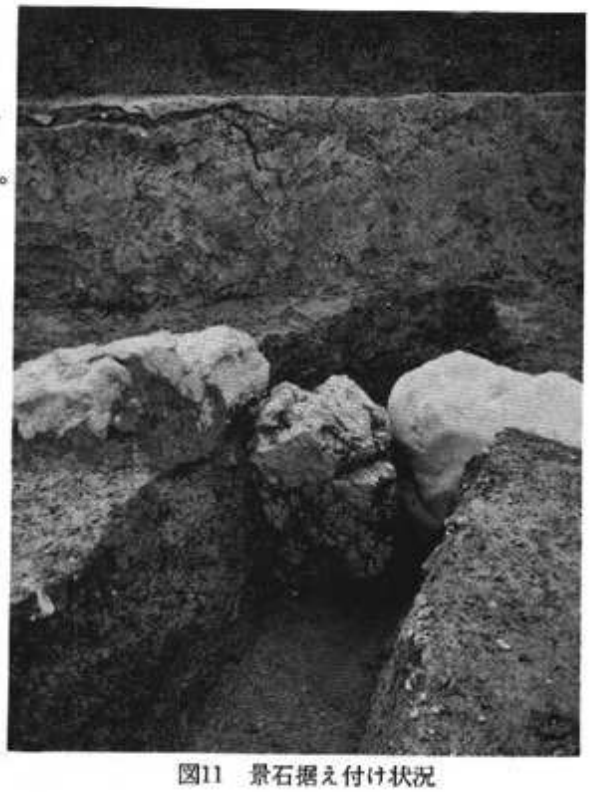


図11　景石据え付け状況

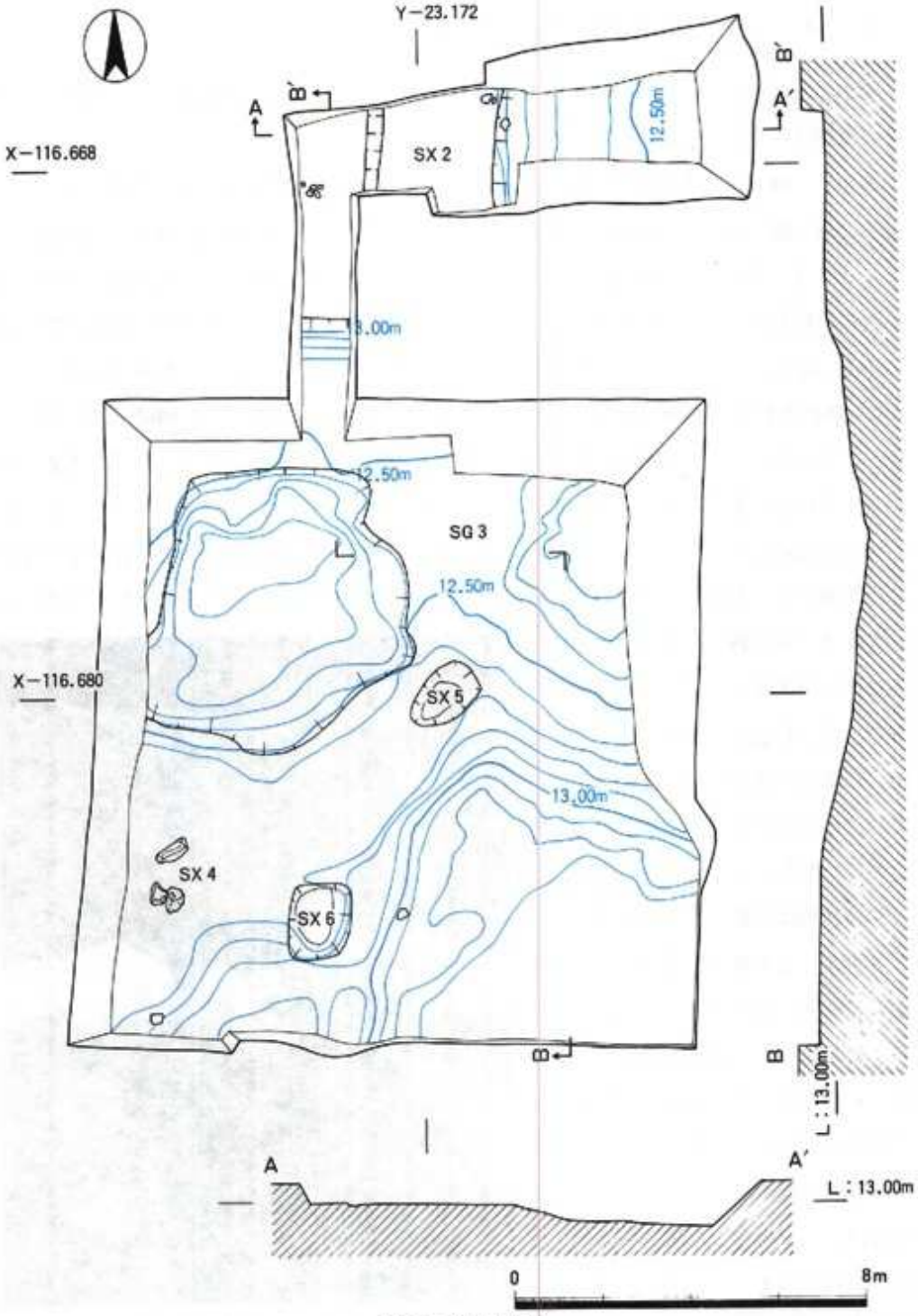

Y−23.172
X−116.668
X−116.680
A
A′
B
B′
SX 2
12.50m
13.00m
SG 3
SX 4
SX 5
SX 6
L : 13.00m
0
8m

図12　遺構実測図

ＳＸ４　ＳＸ１の北西部、標高12.5m前後の高さに３個の景石が据え付けられていた。第115次調査で検出した景石もほぼ同じ高さで発見している。当調査地の北側で実施した第118次調査で発見した景石も、同じ高さに据えられていた。景石の据え付け方法は、普通のものと若干異なっている。すなわち、図11の断面写真のように景石は掘形をもたず、しかも景石の直下には90cm程の石をベースに据え付けて、３個の景石を支えるようにしている。

ＳＸ５・ＳＸ６　標高12.6～７mの位置に見られる平坦面で検出した土壙状の遺構である。底部は船底形で、埋土には池内の堆積土が見られた。形状や発見した高さなどから、景石を抜き取った跡ではないかと考えている。

３　遺　　物（図13）

遺物はおもに、ＳＸ１の構築土やＳＸ２下層の遺物包含層から出土している。また、景石を据え付けていたベースの砂礫層からも平安時代の遺物が若干出土している。池跡内の堆積土は、余り遺物を含んでいなかった。ＳＸ１から出土した遺物は、古墳時代や平安時代の土師器や須恵器などがほとんどであるが、中に平安時代後期の丸瓦や平瓦なども若干含まれていた。図に示した土師器は、ＳＸ１の構築土内から出土したものである。構築年代を知る手がかりとなる遺物である。

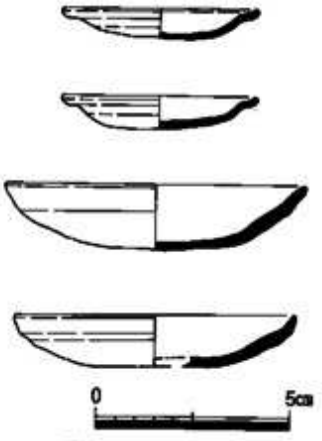


図13　土器実測図

４　ま　と　め（図版７、図14）

今回の調査によって、以下の２点を明らかにすることができた。

まず第１に、第115次調査と今回の調査によって検出したＳＸ１の北半部をほぼ明らかにすることができたし、この遺構が島あるいは出島であることも判明した。更に、その構築工法はきわめてまれなものであることがわかった。

第２点として、ＳＧ３へ張り出すように造られているＳＸ２の東辺部と第118次調査で検出した基壇の出とが、同じであることを明らかにした。このことは、２箇所で検出した遺構を考えるうえで重要な手がかりとなろう。

次に、ＳＸ１の構築工程にいて復元的にみてみよう（図14）。

1　園池の中に、造ろうとする島の位置を決定する。

2　中心部分（核）を造るために花崗岩を環状に並べる。

3　環状に並べた石列内へ、玉石を無造作に詰め込み島の核を造る。

4　花崗岩列や玉石が崩れないように、石列の外回りに褐色土を積み上げて固定する。

5　その後更に、石列内に玉石を積み上げてゆくが核の部分と違って土と玉石をあらく交互に積む。また、粘質土と砂礫で裾部を少しずつ固めてゆく。調査区の西側で発見した景石の一部は、この段階で据え付けている。

6　陸部の表面は砂泥層で覆い、裾部は再度礫混じりの土で固めて仕上げている。

こうした、陸部の構築法は鳥羽離宮跡に於いても始めてであるし、その他の遺跡においてもほとんど発見されていない。ただし、玉石と粘土を交互に盛り上げていく工法は鳥羽離宮跡では東殿や田中殿においてみることができる。

２回にわたって調査したこの陸部は、東西に細長く造られた島跡あるいは出島ではないかと考えている。鳥羽離宮跡の調査において島跡の発見は、今回で３例目であるがそれぞれに形態や構築方法にはちがいがみられる。

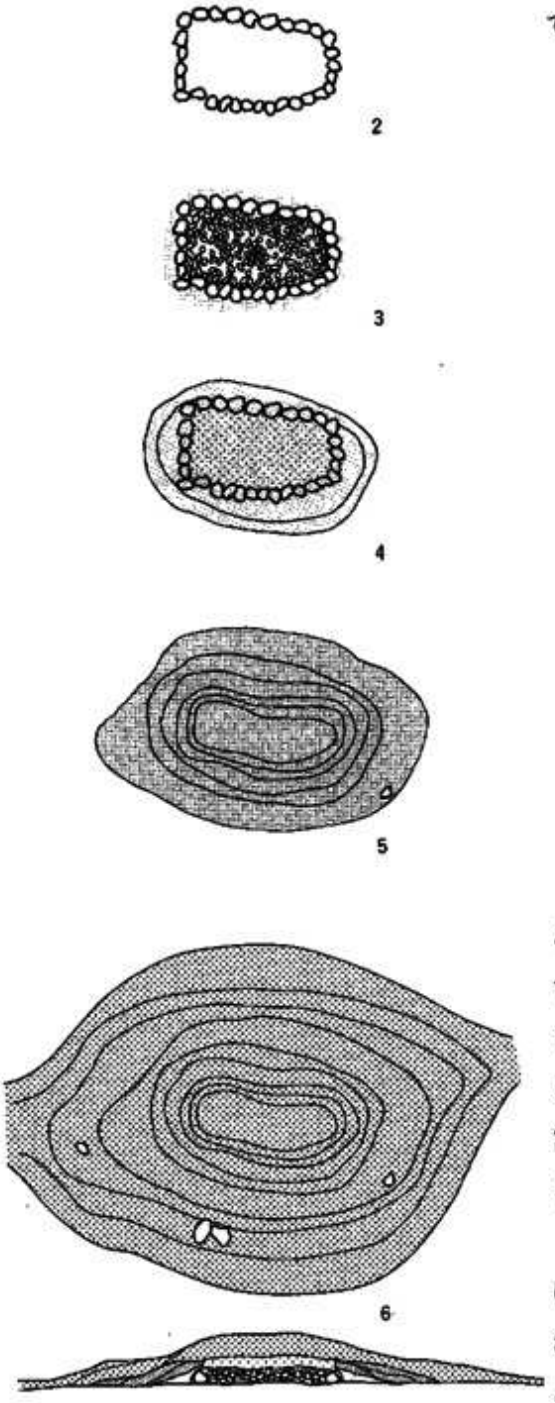


図14　島の構築過程復元図

次に、過去の調査で発見した２例の島跡の構築方法をもう少し詳しくみてみよう。

東殿跡で調査した出島跡の例は、池を掘り下げる際に島の部分を輪郭にそって掘り残して島の基底部を造る。更に池の掘り下げで出た土砂を、島の基底部上に盛り上げて陸部を高く構築している。その後、景石の据え付けや洲浜の玉石敷きを施して島の景観を造りだしている。

一方、第95次と121次（北殿跡）の調査で検出した島跡は、島の底部で人工的に掘り下げた溝跡を検出した。すなわち、島を構築しようとする場所に幅３ｍの溝を掘り、その中を版築する。しかも、島の中央部となる下方には溝を方形に巡らし溝内を同様に版築している。その後は、版築しながら徐々に盛り上げて島を形造ってゆく。最後に景石の据え付け、洲浜敷きを行なって島を仕上げる。なお、この島の底部には、いっさい腐植土層や青灰色の泥土層は認められなかった。このことは、島の構築時にはこの周辺部は池あるいは湿地帯でなく陸部であったことがわかる。すなわち、島は池を埋め立てて造ったものでなく、陸部を新たに掘り下げて池を造るのと同時に構築していることがわかる。

今回検出したＳＸ１に見られた基本的な構築工程の過法の中に、島の中央下方に核を造る点では第95次の調査例に共通するが、実際の構築法にはかなりの隔たりがある。今回発見した構築工法は、低湿地あるいは従来からある池を埋め立てて島あるいは出島状の陸部を造成する際に用いた方法の一つである。

Ⅲ　第133次調査

1　調査経過

当調査は、鳥羽離宮東殿の東への広がりを明らかにすることを目的とした試掘調査である。調査地は、近衛天皇陵と近鉄京都線に挟まれたところに位置する。道を挟んだ調査地の西側、近衛天皇陵の東周部分では、第32次調査・第59次調査を行ない、中・近世の遺構とともに、平安時代後期の北東から南西方向に流れる大きな溝を検出している。[注(1)]

まず、1989年２月に事前の調査を行なったところ、平安時代の遺物を含む腐植土層と洲浜状の礫の広がりを認めたため、調査ではその成果をもとに東西方向に長い調査区を設定し、腐植土の上面まで重機で掘削した。以下、手掘りで腐植土を取り除いた段階で調査区全域にわたって礫が広がっていることを確認した。その後、調査区の北壁、南壁沿いに断ち割りを入れ、下層の堆積状況を調べ、調査を終了した。

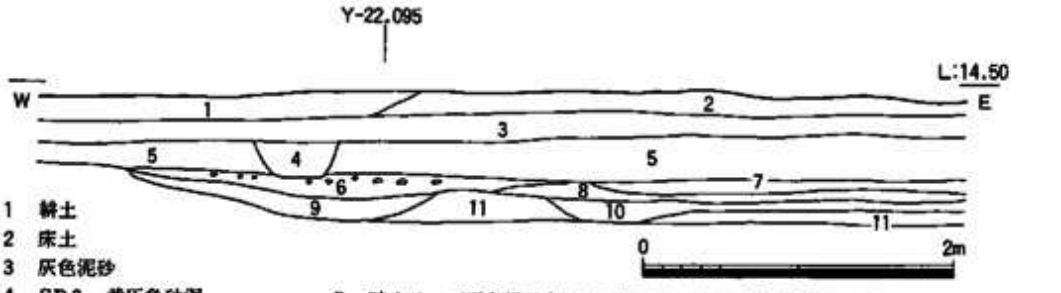
2　遺　　構（図版８、図15～17）

検出した遺構には溝・池状遺構がある。

ＳＤ２は室町時代の溝で腐植土（暗灰黄色砂泥）層の上面を切り込んでいた。幅約0.6m、深さ約0.2mのやや北から西にふる小さな溝である。

ＳＤ１は断ち割りを入れた部分で池状の遺構の下層で検出した。幅約2.0m、深さ約0.3mと浅く、西側の肩に段をもつ。遺物はまったく出土していない。

池状の遺構は、調査区全域に西から東にむかって緩やかな傾斜面をなす。底には数cmか



1　耕土
2　床土
3　灰色泥砂
4　SD２　黄灰色砂泥
5　暗灰黄色砂泥(腐植土混入)
6　暗オリーブ灰色泥砂(小石混入)
7　暗オリーブ灰色泥砂(６より小石がまばら)
8　褐色砂礫(鉄分・マンガンが沈着)
9　SD１　暗オリーブ灰色泥砂
10　灰色シルト
11　にぶい黄褐色砂礫(鉄分が沈着)

図15　北壁断面図

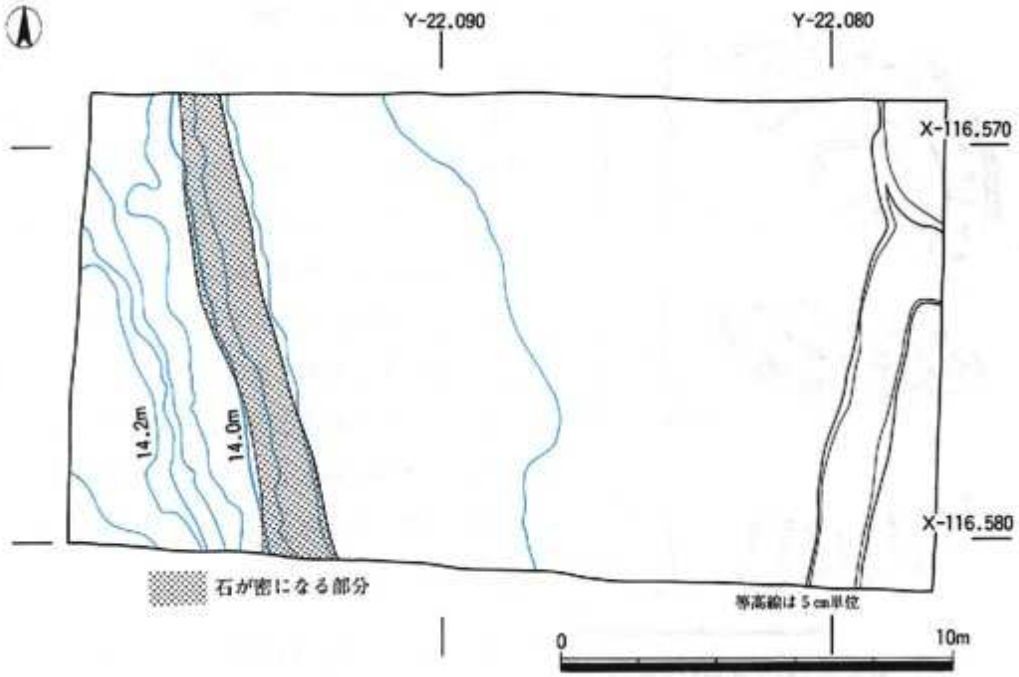


図16　遺構実測図(1)

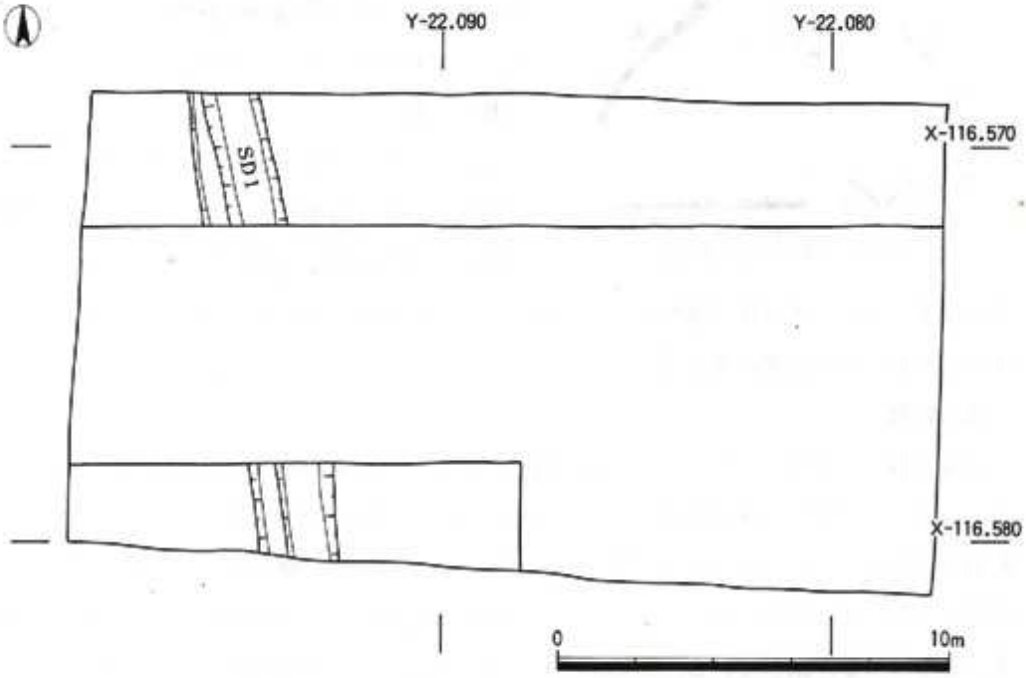


図17　遺構実測図(2)

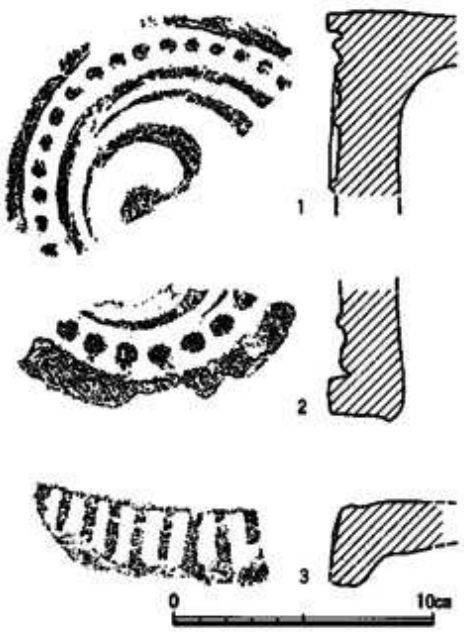


図18　軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図

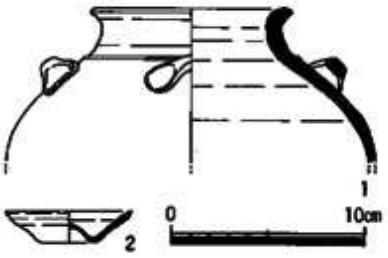


図19　土器・陶器実測図

らこぶし大の大きさの礫がひろがり、標高13.9mから14.0mにかけての幅1.5mぐらいの部分で帯状にやや密となっている。礫の上面や暗灰黄色砂泥層中からは平安時代後期の遺物が出土しており、また、礫のなかには京都盆地では産しない緑泥片岩（塩基性結晶片岩）が含まれており、この時期に人為的な行為が加えられていることは確実である。仮に礫が集まる部分を汀とすると、鳥羽離宮東殿に営まれた池の汀の標高に比べて約0.5m高くなり、第59次調査などで検出した溝により隔てられた別のものであることがわかる。

3　遺　　物（図版17、図18～20）

今回の調査で出土した遺物は整理箱で７箱になる。大半が暗灰黄色砂泥層から出土した瓦、土器・陶磁器類、および木製品である。

瓦　類

１は巴が大きく巻き込む三巴文軒丸瓦。外区には細かい珠文が密にめぐる。播磨産。２も三巴文軒丸瓦で珠文が大粒である。瓦当裏面の一部に釉薬が残る。東海産で播磨産のものに比べて、調整がやや粗い。３は剣頭文軒平瓦。焼成は軟質。京都北郊の幡枝産であろう。他に丸瓦・平瓦が出土している。

土 器 類

２はＳＤ１より出土したいわゆる土師器ヘソ皿で、口径6.4cm・高さ1.6cmを測る。端部はヨコナデで調整し、底部外面には爪の圧痕が残る。室町時代のものである。暗灰黄色砂泥層と礫の上面からは平安時代後期の土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。土師器片が多くを占める。１の褐釉陶器は肩の張る体部から口縁部がゆるやかに外反して開き、端部はつまみ出している。頸部には低い突帯がめぐり、肩部の四方に耳を張り付ける。釉薬は黄褐色を呈し、内外面に丁寧に施している。胎土はきめが細かく、焼成は堅緻。中

国南部の窯の製品である。

木製品

1は一辺約4.7cmの方形の台に木釘でつまみをつけたもので、ヒノキ材で作る。用途は分からない。2は差し歯下駄の歯の残欠である。枘が一つ残る。一方、3は一木から作り出す連歯下駄である。いずれもヒノキ材で作る。4は金蒔絵を施した器物の破片である。蒔絵は端のほうにわずかに残る。蒔絵技術の変遷を知るうえで貴重な資料といえる。

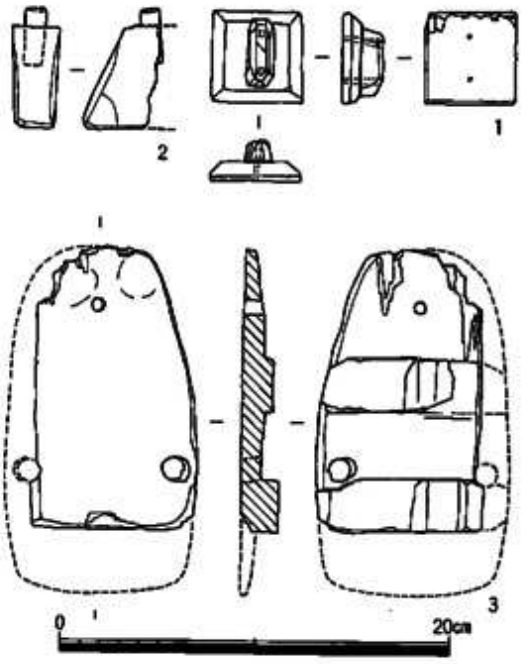


図20　木製品実測図

4　まとめ

今回の調査は、鳥羽離宮の調査では最も東側になる。今までの調査で、近衛天皇陵の西・南側に東殿の池がひろがることが明らかとなっており、今回、東側にも池状の遺構を確認したことで、鳥羽離宮に関係する遺構がさらに東方へひろがっていることがわかった。

池状の遺構は、東殿に営まれた池とは様相を異にするが、鳥羽離宮が造営された平安時代後期に整備されたことは確実である。ところが、下層の堆積はＳＤ１の東側の部分まで砂礫・泥砂・シルトの互層となっており、当時東側を流れていた鴨川の水が、あるときは澱み、あるときは押し寄せていたことを推測させる。おそらくこのあたりは一面の湿地帯となっていたのだろう。ＳＤ１もこうした環境に対応して造られた施設であった可能性がある。

今回の調査では、池状の遺構が、自然地形のままなのか、人為的に造作されたのか、確定できなかったが、これまで行なってきた調査からすれば後者であったと考えられる。[注(2)]

注

(1)　京都市埋蔵文化財調査センター・㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和55年度　鳥羽離宮跡調査概要』1981年

(2)　㈶京都市埋蔵文化財研究所『増補改訂　鳥羽離宮　1984』1984年

Ⅳ　第134次調査

1　調査経過

当調査は、駐車場設営にともなうものである。調査地は、西・北・東をそれぞれ北向山不動院・鳥羽天皇陵・近衛天皇陵に囲まれたところに位置する。

当調査地の東隣りで実施した第112次・117次調査では、中島をもち、緩やかに湾曲する洲浜を造る園池を検出している[注(1)]。その成果から当調査地内に池が広がってくることは確実で、試掘調査でもそれが裏付けられた。したがって、調査区は池が残る敷地南東側に寄せて設け、西側を土置き場と搬出用車両の進入路として残した。

調査は、陸部上面で池の輪郭があらわれる深さまで重機で掘削した後、池を中心に手掘りにより掘り下げて進めた。その後、池の全容が明らかになった段階で建物跡を探して北西部分を拡張した。なお、調査終了にあたっては、洲浜の保護のために砂をかぶせた後、調査区全面を埋め戻した。

2　遺　　構（図版9～11・39、図21・22）

遺構には、池・土壙と後世の耕作用の溝がある。地表下約0.6mで灰色泥土層を取り除いた段階で検出した。

池は予想どおり調査区の南東部で検出し、汀線は北西から南東に向かって緩やかな曲線を描いている。肩は2段に落ち、直径数cmの小石が広がる平坦面の下段の斜面に砂を置い

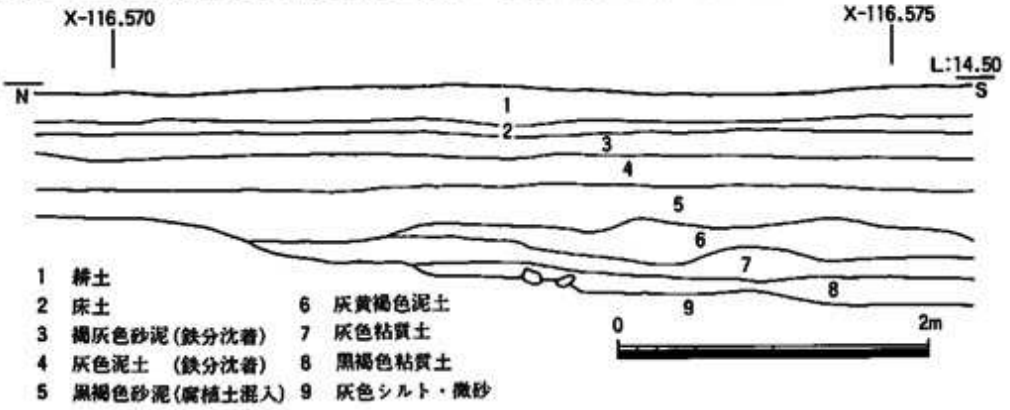


図21　東壁断面図

た上にこぶし大の河原石を敷き洲浜を造っている。洲浜は幅1.0～1.5m、一部で石が流失し、池の中央よりのほうまで河原石が散在していた。また、洲浜の上部には5箇所に植栽の木の根株が残っていたが、景石は一点もない。洲浜の高さから池の水位を測ると、標高13.2～13.4mになる。池の埋土は底から黒褐色粘質土・灰色粘質土（池第3層）・灰黄褐色泥土（池第2層）・黒褐色砂泥（池第1層）が順に堆積しており、これらはいずれも腐植土を多く含んでいる。遺物がもっとも多く出土したのは、黒褐色粘質土・灰色粘質土層で平安時代後期の遺物を含む、また、黒褐色砂泥層は少量ながら室町時代後期の土器を含んでいることから、この頃まで池が埋まらずに残っていたことがわかった。

陸部は堅く締まった灰色砂土で整地している。この整地層は北東から南西に流れる流路を覆う大がかりなものである。しかし、調査区を拡張したにもかかわらず建物の痕跡を認めることはできなかった。

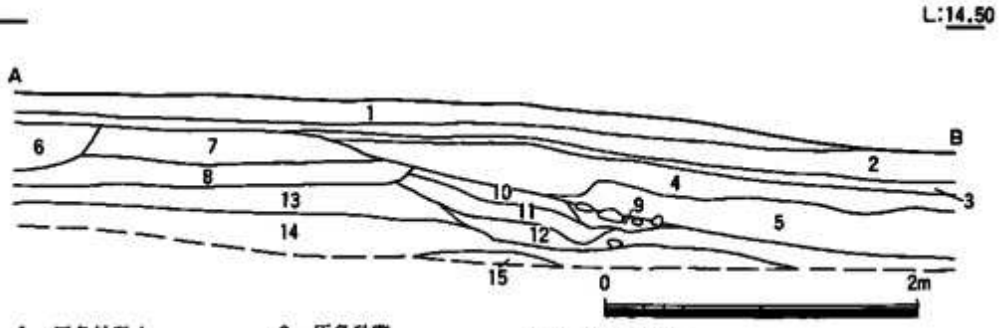
ＳＫ１は調査区の西部で検出した。直径約1.5mの円形で深さは約0.3mの断面すり鉢状を呈する。埋土からは多量の瓦が出土した。

3　遺　　物（図版18～30・41～48、図23～25）

調査で出土した遺物は、整理箱で41箱を数える。時期は平安時代後期から室町時代にわたる。その中でも平安時代後期の遺物が大部分を占めている。

瓦　類

瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦に分けられる。軒丸瓦が26種70点、軒平瓦が25種61点で、軒瓦の総数131点を数える。今回は、軒丸瓦20種、軒平瓦17種について述べる



1　灰色粘質土
2　灰黄褐色泥土
3　灰色粘質土（礫を含む）
4　灰色粘質土
5　黒褐色粘質土
6　灰色砂礫
7　灰色粘土
8　灰色粘土
9　暗オリーブ灰色微砂
10　暗オリーブ灰色砂泥
11　暗緑灰色砂泥
12　暗緑灰色砂泥
13　緑黒色粘土
14　暗緑灰色粘土
15　灰色砂

図22　断ち割り断面図〔A.B〕

ことにする。軒丸瓦11・13・15がＳＫ１からで、他はすべて池の埋土からの出土である。

複弁蓮華文軒丸瓦（1・2）　1は瓦当笵が浅く、また笵ずれを起こしているため、文様が不鮮明である。瓦当はやや横に広い楕円形を呈している。中房に１＋６の連子、外区に小粒な珠文を配している。山城系。2は外縁に唐草文をめぐらす特徴的な軒丸瓦である。弁と界線は細い凸線で表わし、小粒な珠文を配している。瓦当裏面をヘラ削り、外周をヨコナデ調整、黒灰色を呈し、焼成良好。

単弁蓮華文軒丸瓦（3～8）　単弁蓮華文軒丸瓦には各種の文様がある。3は単弁八弁蓮華文で、丸みのある弁と先端の尖った棒状の子葉をもつ。中房の連子は１＋４で、中心に十字形を凸線で表わす。離れ砂を使用。瓦当外周は縄叩きである。4は弁と子葉を長方形に表わす単弁八弁蓮華文である。中房に１＋５の連子、棒状の間弁、外区に一条の界線をもつ。外縁の内側には弁と対応してかすかに凸線がみられ、瓦当笵の弁の割り付け印と思われる。笵の傷みが激しい。瓦当の断面形は三日月状を呈する。5は弁を剣頭文風に表わした単弁蓮華文である。6は小破片のため文様の細部は不明であるが、外区に大つぶの珠文を配している。7は中房に蕊（しべ）をめぐらしている。8は弁を凸線で輪郭線のみ表わす簡略化した播磨系の軒丸瓦である。

羯磨（かつま）文軒丸瓦（9）　三鈷杵を十字に組み合わせた羯磨を文様化している。中心に⊕を置き、その回りに放射線、そして三鈷杵を描く。三鈷杵の先端は外縁に接する。笵傷が認められる。瓦当裏面と外周はていねいなナデ調整。丸瓦部外面は縄叩きの後、ナデで叩きを消している。東寺境内[注(2)]から9とは異笵であるが、羯磨文軒丸瓦の出土例がある。

二巴文軒丸瓦（10～12）　10と11は右巻き、12は左巻きの二巴文で、いずれも外区に珠文を配している。10は巴の尾が一周してのび、隣の尾と接続して界線状になる。珠文は大粒で12個ある。瓦当外周に叩き目がつく。11と12の珠文は10に比べ小粒である。11と12は丸瓦と瓦当の接合部ではずれている。いずれも山城系。

三巴文軒丸瓦（13～15）　外区に珠文を配するもの（14・15）と、珠文がなく二重の界線をめぐらすもの（15）とがある。13・14は巴の尾が隣の巴と接し、界線状になる。13は巴の頭と頭の間隔が広い。明瞭な笵傷がある。いずれも二巴文と同様に瓦当の接合部ではずれている。山城系。

三巴文軒丸瓦（16～19）　16の巴は左巻き、17～19は右巻きで、16と17には外区に珠文がつく。17と19の巴の頭部は互いに接続し、巴の断面は角張っているが、16と18は丸みがある。焼成はいずれも堅緻で、16には灰釉がかかるが、釉が溶け白くなっている。東海系。

複弁蓮華文軒丸瓦（20） 複弁に輪郭線がめぐり、外区に一条の界線と珠文が配される。一見平安時代前期のようにみえるが、東寺境内[注(3)]などから出土する鎌倉時代のいわゆる復古瓦である。

唐草文軒平瓦（21～26） 21は唐草を細い線で表わし、茨状である。瓦当笵よりも瓦当幅がかなり広い。22～24は瓦当面に布目がついている。22は唐草の主葉が左から右へゆるやかに反転し、太めの枝葉が派生する。23は下外区のみ界線がめぐる。26は唐草の文様を陰で表現している。いずれも瓦当は折り曲げ式で、山城系。

幾何学文軒平瓦（27・28） いずれも斜格子文で、28は斜格子の中に菱形文を入れたものである。外縁の上部は横にヘラ削り、いずれも折り曲げ式で、山城系。

剣頭文軒平瓦（29） 剣頭を横に並べたもの。剣頭のシノギの先端は尖る。瓦当面まで布目がつく。折り曲げ式の瓦当成形で、山城系。

三銛杵文軒平瓦（30） 三銛杵の先端を陰で表わし、横に連続して配置する。顎部には縄叩きが残る。瓦当は折り曲げ式。10の軒丸瓦とセット関係と思われる。六波羅密寺[注(4)]や法住寺殿跡[注(5)]から同文の出土例がある。

唐草文軒平瓦（31～33） 31は灰釉のかかった軒平瓦である。唐草は非対称で、中心の一本の茎から左右に展開する。外区には外縁に接近して、一条の界線がめぐる。瓦当は折り曲げてから粘土を補充している。32は左右非対称の軒平瓦で、枝葉が多く派生する。瓦当は折り曲げ式。平瓦凹面には布目が残るが、凸面には叩き目がみられず、糸切り痕を残している。33は簡略な唐草文である。いずれも東海系の軒平瓦である。

唐草文軒平瓦（34・35） 34の唐草はゆるやかに反転する主葉の間に、花状の枝葉を配する。瓦当の成形は折り曲げ式で、顎部に縄叩き痕がつく。焼成は軟質。35は中心で分離し左右に展開する唐草文である。外区には界線が一条めぐり、小粒な珠文を配する。瓦当笵の打ち込みは浅い。暗灰色を呈し、焼成良好。35は讃岐系の軒平瓦。

唐草文軒平瓦（36） 瓦当中心下部から左右に3反転する均整唐草文で、鳥羽離宮跡金剛心院地区から多く出土する軒平瓦である。瓦当の接合は包み込み式。播磨系。

剣頭文軒平瓦（37） 剣頭を凸線で表わし、剣頭の先端は丸い。瓦当は包み込み式である。胎土は緻密。灰色を呈し、焼成良好。播磨系の軒平瓦。

土 器 類

土器類には土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器（白磁）がある。大半が池の埋土より出土し、また、その多くを土師器が占める。

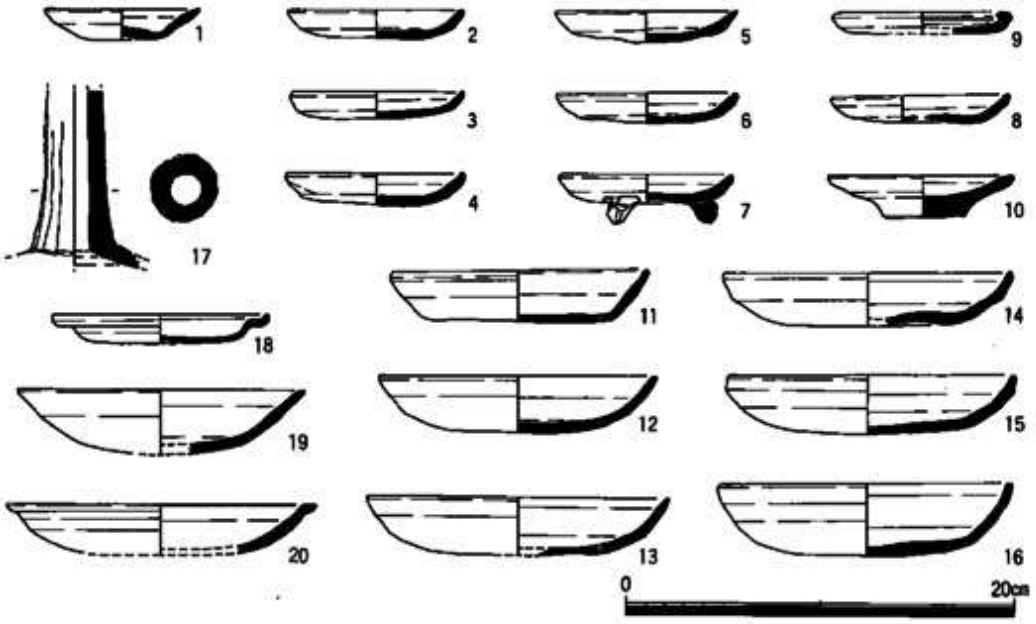


図23　土器実測図

池第２層出土の土師器（１）　この層からの出土量は少ない。口縁部がまっすぐに開く小皿である。端部はヨコナデにより丸くおさめ、底部は上げ底気味である。

池第３層出土の土師器（２～17）　形態と大きさから小皿（２～８）・受け皿（９）・大皿（11～16）・高杯（17）に分ける。小皿は、口径8.6～9.3cm、高さ1.5～1.6cmにまとまる。口縁部は体部からゆるやかに立ち上がる。口縁部のヨコナデの調整は１段のもの（２・４・５・８）と２段のもの（３・６）とがある。また、７は脚をつけたものである。残存していた足は一箇所だけだったが３足に復元した。８は焼成後底部中央に一ケ所穿孔したものである。受け皿は、平たい底部から口縁部が内側に強く屈曲する。大皿は口径13.2～15.3、高さ2.7～3.7cmを測る。11は底部と口縁部が明瞭に屈曲するが、他はいずれも口縁部はゆるやかに立ち上がる。口縁部のヨコナデの調整は１段のもの（12～14）と２段のもの（11・15・16）がある。高杯は脚部が一点のみ出土した。裾部は柱状部から強く屈曲して開く。柱状部外面は細かく14面にケズる。そのほか土師質土器の皿がある(10)。きめの細かい胎土で白色を呈し、突出した小さな底部には糸切り痕を残す。

褐色砂礫層出土の土師器（18～20）　陸部の断ち割りで検出した旧流路の中より出土した。18は小皿で口縁部が屈曲して段をつくる。19・20は大皿で、20は端部をつまみ出す。

以上の土器の年代は、1が15世紀、2～17が12世紀前半、18～20が11世紀後半に位置付けることができる。

建築部材

建築部材はすべて池の埋土中より出土している。鳥羽離宮跡の調査でこれだけの建築部材が出土したのは初めてのことで、後の転用や腐蝕により一点として本来の形を完全にとどめているものはないものの、それでもなお、当時の建築様式を知る上での好資料である。ここでは、主な27点について報告する。これらについては観察表（表1）を作成した。

屋根板（1～9）は、残存長がもっとも長いもので101cm、幅は6.5～12.5cm、厚さは1.0～1.8cmを測る。一端を斜めに切り落としたもの（4・5・6）は、屋根の隅の部分にあたる。すべての個体で片側の面が腐蝕している。これは屋根に葺かれていたときに表側に露出していた部分で、風化のため傷んだことによる。逆に裏面はムレによる若干の損傷をうけるが、ヤリガンナで粗く調整した痕跡が残るものもある。調整が残るものはヒノキに限られ、スギでは割ったままで何ら調整が行なわれることがない。樹種による技法の違いを看取できる。

屋根板と同様の形状で、ほとんど腐蝕をうけていない板材がある（10・11・12）。樹種はスギに限られる。野地板(6)と考えた。

垂木は5点（13～17）。13～15は一つの型にまとめることができる。断面約8cm×7cmの面取材でそのうち14は上面が強く反ることから先端に近い部分であることがわかる。他はまっすぐで、地垂木(7)の反りのない部分である。14・15では上面の一部が水の浸蝕をうける。垂木も端に近いところであるとみれば、木負(8)の痕跡かもしれない。16は断片ながら13～15と同様の面取りが施されているが、断面でその一辺が少なくとも10cmを越えていることから、異なる建物の部材と考えられる。また、17は面取りをつけていないところから、屋根裏などで使う野材(9)であろう。樹種はコウヤマキである。

18は角材の一辺に板がかり(10)を作り、その下の角を面取りする。天井の回り縁(11)となるものである。そこには固定したときの釘穴が見られる。

19は丸面をもつ部材である。扉の弊軸(12)の榻(13)に組む部材で、その大きさからすれば厨子に使われていたものであろう。

20は面取角柱の上部分である。桁行方向に頭貫(14)を通した痕跡と梁行方向に繋ぎ梁(15)を大入れにとりつけた痕跡がある。加えて、頭貫の若干下に、一面のみ桁行方向に頭貫と同じ大きさの部材（榻？）を大入れにとりつけ、そのせいの半ばあたりに長押(16)でもとりつけたよ

表1　建築部材観察表

種　類	番号	寸　法	内　容	樹　種	備　考
屋根板	1	長67 幅7～7.5 厚1.5	外面は腐蝕が激しい。調整痕は残らない。裏面はヤリガンナによる調整を認める。	ヒノキ	池第2層
	2	長64.1 幅8.6 厚1.8	外面は腐蝕がすすむ。調整痕は残らない。裏面はヤリガンナによる調整を認める。	ヒノキ	池第1層 実測図
	3	長62.6 幅7.8 厚1.7	外面は腐蝕がすすむ。調整痕は残らない。裏面はヤリガンナによる調整をかすかに認める。	ヒノキ	池第1層
	4	長75 幅8 厚1.0～1.8	外面は腐蝕がすすむ。裏面はヤリガンナによる粗い調整を認める。一端を斜めに切り落とす。	ヒノキ	池第3層 屋根の隅の部分
	5	長72 幅8～9 厚1.5	外面は腐蝕がすすむ。調整痕は残らない。裏面はヤリガンナによる調整をかすかに認める。一端を斜めに切り落とす。	ヒノキ	池第3層 屋根の隅の部分
	6	長101 幅6.5 厚1.0	外面は腐蝕がすすむ。裏面は割ったままで調整痕を認めないが先端部の一部が腐食する。耳あしの関係か。	スギ	池第2層
	7	長69 幅8～8.5 厚1.2	両面とも腐蝕がすすむ。割ったままで調整痕を認めない。	スギ	池第2層
	8	長46.3 幅7.7 厚1.1	外面は腐蝕がすすむ。両面とも割ったままで調整痕を認めない。一端を斜めに切り落とす。	スギ	池第3層 屋根の隅の部分 実測図
	9	長93 幅12.5 厚約1.5	幅が広い。片面はヤリガンナによる調整痕が全面に残る。もう一方の面は2／3が激しく腐蝕するものの、残りは腐蝕が目立たない。	ヒノキ	池第2層 屋根板か
野地板	10	長75.4 幅8.0 厚1.8	両面とも割ったままで調整痕を認めない。まったく腐蝕しておらず屋根板とは考え難い。	スギ	池第3層 野地板は屋根瓦を支える部分の板　実測図
	11	長68 幅7～9 厚1.5～2.0	両面とも割ったままで調整痕を認めない。	スギ	池第2層
	12	長64 幅8.5 厚1.5～2.0	両面とも割ったままで調整痕を認めない。両面の一部にムレがあるが腐蝕はない。	スギ	池第2層
垂　木	13	長159.3 8.0×6.0	片側の側面がそぎ落される。ほとんど反りを持たない。面取りをする。2か所に釘が残るが用途は不明	ヒノキ	池第2層 地垂木 実測図
	14	長111.0 5.0×6.5	下半分は割れて欠損。上面は強く反り先端に近い部分であることがわかる。面取りをする。上面の一部は水の浸蝕をうける。棟側に釘が残るが用途は不明。先端を削り杭に転用。	ヒノキ	池第3層 地垂木・飛裔垂木かは不明 実測図
	15	長66.3 8.0×7.0	まっすぐで反りを持たない。面取りをする。上面の一部は水の浸蝕をうける。隅端は切断され片側にくりこみをいれ束柱に転用。釘もそれに伴う。	ヒノキ	池第2層 地垂木か 実測図

種類	番号	寸法	内容	樹種	備考
垂木	16	長66 幅10	垂木の側面の断片。面取りをする。ほかの垂木に比べ幅広い。	ヒノキ	池第2層 他とは別の建物の垂木か
	17	長97.6 8.4×5.1	真直で面取りをしていない。垂木の棟よりの屋根裏で外から見えない部分か。1か所に枘穴、各所に釘が残るが用途は不明。	コウヤマキ	池第2層 地垂木か。損傷が激しい。 実測図
回り縁	18	長95.7 5.9×4.7	四角い材に天井板のうけを掻き取り、下面の角を面取りして飾る。13～20cm間隔に背面の材に固定したときの釘穴があく。片側にくりこみをいれ束柱に転用。	ヒノキ	池第2層 実測図
幣軸	19	長101.8 6.1×4.7	上面から側面へかけて円の几帳面を作り飾る。残る裏の2面は割ったままか。裏面には約80cmの間隔で台形の釘彫りがある。	ヒノキ	池第2層 実測図
柱	20	長55.2 20.5×20.5	柱の上部で頭貫、繋ぎ梁を組んだ痕が残る。頭貫の下に頭貫と同じ大きさの部材を取りつけた枘穴があく。側面には首切りの痕を残す。幅広い面取りを行う。	ヒノキ	池第1層 庇の柱 実測図
床板	21	長181.2 幅5.8 厚2.6～2.9	床板を割ったもの。表面はヤリガンナによる調整を認める。裏面はムレによる損傷。釘が約44cmのほぼ等間隔に残る。根太に固定するためのものであろう。	ヒノキ	池第1層 薪にするために割ったものか 実測図
	22	長111 幅10～11 厚約2.5	表面はヤリガンナによる調整か。裏面は腐蝕する。腐蝕は屋根板に転用したことによるものか。	ヒノキ	池第2層
	23	長74 幅4.0 厚2.5	床板を割ったもの。詳細不明	ヒノキ	池第2層 薪にするために割ったものか
	24	長98 幅4.5 厚2.0～3.0	床板を割ったもの。調整痕は残らない。側面に釘穴が1か所残る。	スギ	池第2層 薪にするために割ったものか
根太	25	長78.5 幅7.1 厚3.2	端部の一方は生きている。不等間隔に床板を固定するための釘が残る。両面とも表面の調整が明瞭でないが表面にヤリガンナによる調整をわずかに認める。	スギ	池第2層 虫食い
その他	26	長65 幅5 厚2.5・	片面を丁寧に平滑にする。調整痕はわからない。	ヒノキ	池第2層 用途不明
	27	長51 幅6.5～7.0 厚1.5～2.0	両面とも表面の調整が明瞭でない。	スギ	池セクション 用途不明

寸法で長さはすべて残存長。板状のものは幅・厚さ、角材状のものは断面の縦・横を示した。
寸法の単位はすべてcm

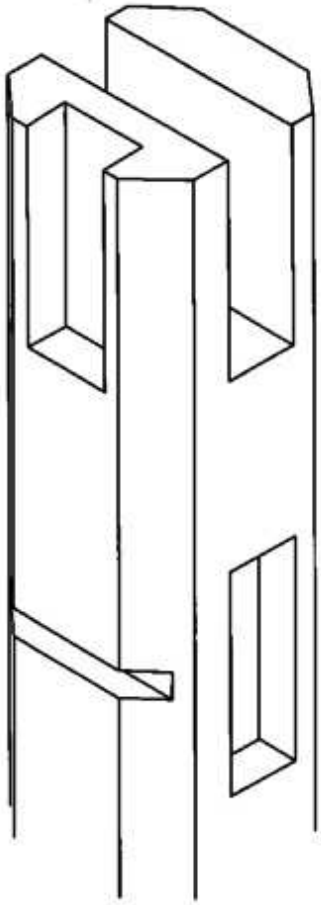


図24　柱復元図

うで、首切[注17]りの痕跡を残している。これらの痕跡を総合すると、この柱は建物の外側回りに位置し、桁行の一方は閉じているが他の一方に廂をとりつけているような位置にあったものであろう。とりついていた部材の断面の寸法を復元すると、頭貫は16.9×7.0cm、繋ぎ梁は17.0×8.5cm、榴？は17.3×7.0cm、長押は一辺2.4cmとなる。なお、桁行に向かう面打ちは広く、他の面では狭い。すなわち、面は柱に45°の角度を持っているのではないことを知る。珍しい例である。

床板（21～24）はすべて全長を残していない。また、幅も細く割られてしまっている。ヒノキ材の中には、ヤリガンナで粗く調整した痕跡を認めるものがある（21・22）。また21には根太[注18]に打ちつけた時の釘が等間隔に残っている。

25は根太で他の部材よりも分厚い。不規則な間隔で釘穴が残るが、先端は裏面まで通らない。床板を固定するためのものであることがわかる。

26・27は用途を特定できない。

部材の樹種には、ヒノキ・スギ・コウヤマキがある。コウヤマキは垂木17のみで、またスギが用いられるのは、屋根板・野地板・根太に限られており、主な建築部材はすべてヒノキを用いたと考えられる。調整痕は、屋根板の裏と床板・根太の表にヤリガンナの粗い痕を認めるにすぎない。しかし、むしろ、垂木・回り縁・弊軸・柱については、丁寧な仕上げがなされたと思われる。それがため痕が残らないのは当然であろう。

部材相互の関係では、垂木13～15と垂木16の太さが異なる。屋根板と瓦の下地板が出土していることから、すべての部材が一つの建物を構成していたとは考え難い。ただ垂木13～15と柱20は釣合が取れており、同一の建物の部材とみてよい。部材としてはいずれも華奢なので、一間四面堂のような小規模な建物に用いられたと考えられる。

木 製 品

池の埋土からは、多種多様な木製品が出土している。下駄（6）・田下駄（8）を除き、他はすべて池第3層からのものである。また、加工品のほかに自然木も出土している。

雲形木製品（1・2） 大きさは、1が縦9.7cm・横13.1cm、2が縦6.9cm・横12.1cmで1には打ち込んだ釘が2本残る。ともに断片ながら1は大きくうねる雲、2は小さく巻き込む雲を立体的に彫刻し、漆を塗って仕上げている。この彫刻の様式から宇治平等院鳳凰堂

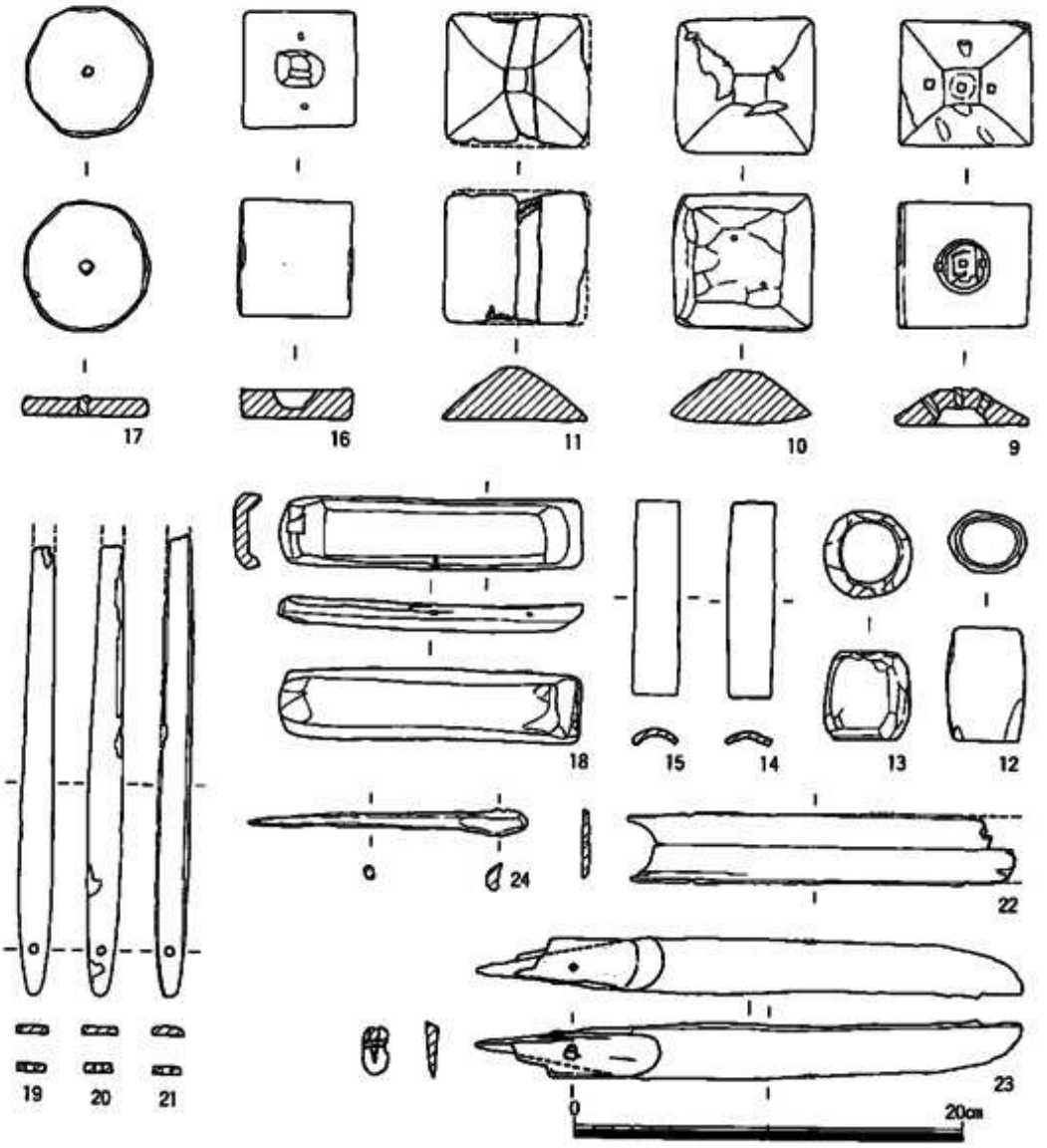


図25 木製品実測図

に現存する雲中供養菩薩像のような仏像の破片で、台の雲形と考えた。ヒノキ材を用いる。

人物像(3)　冠を付け、袖の長い上着と袴を着用し、両手を胸の前で合せている。足には沓を履いているように見える。また、背面の一部にはわずかに朱色の彩色が残っている。この服装やしぐさから、仏像ではなく俗人を表わしたことがわかる。背中中央に背面から打ち込まれた釘の痕が残っており、仏殿の内部で本尊の周りに配された供養人の彫像とも考えられる。ヒノキ材。高さ16.4cm。

軸（4・5）　直径1cmの巻物の軸である。端部は黒漆を塗る。4と5は直接接合せず、仮に同一個体としても本来は長さがもっと必要であろう。ヒノキ材。

五輪塔（9～17）　五輪塔の部品は第11次調査や第112次調査で多数出土している。[注(19)] 今回出土したのは、火輪3点（9～11）・水輪4点（12～15）・地輪1点（16）で、空・風輪はない。10・13はヒノキ材で、他はスギ材で作る。火輪は頂部が平たい四角錐を呈する。9は下側をくりぬき、組み立て用の木釘が残る。10は軒が反り、朱色の彩色が鮮明に残る。水輪は、12・13が中実中太の円柱状。14・15が細長い円筒状を呈する。形態の差が著しく後者は五輪塔の部品ではない可能性がある。地輪は上側をくりぬき、組み立て用の木釘が残る。なお、17は円盤の中央に木釘を残すもので、五輪塔に類するものの部品と考えた。

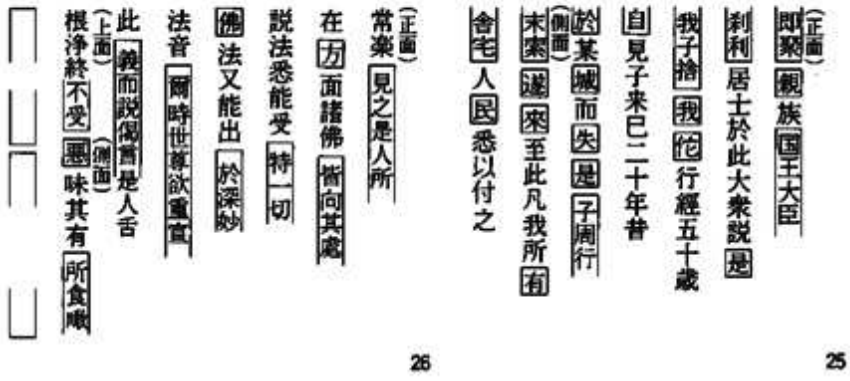
舟形木製品（18）　舟形木製品は近衛天皇陵の東側の第59次調査でも出土している。[注(20)] 今回出土のものも外面を粗く削り、内面をくりぬいて成形している。舳に2箇所、右舷に3箇所木釘が残る。ヒノキ材。長さ15.6cm・幅3.6cm。

檜扇（19～21）　同一個体でいずれも先端が欠損。21は端の部材で片面を丸く仕上げる。

下駄（6・7）　ともに一木から作り出した連歯下駄である。前の鼻緒の穴の横には左足のすれあとが残る。7は小型で右後の鼻緒の穴の一方に木栓を詰め込んでいる。6は池第2層から出土した。ヒノキ材。

田下駄（8）　池第2層上面から出土した、完形の田下駄である。後ろがやや開く井形に組んだ木枠に足台を鉄釘でとめる。すべてヒノキ材を用いる。足台は長さ54.8cm・幅12.9cm・厚さ2.5cmの厚い板を用い、つま先裏面をそぎ落す。後ろ側の釘の部分には、横方向に紐をかけたような痕が残る。木枠は縦53.1cm・横38.0cmで縦材に枘孔、横材に枘を作る。加工が粗雑で枘が組合う外側に抜けないように木釘を打ち込んだ痕跡がある。右後ろ側は打ち変えたものか。なお、足台の先端部に下駄の用途とまったく無関係の木釘が2ケ所残る。建築部材の一部を転用した可能性が高い。

表2　経石釈文



金属製品

短刀（23）は全長14.0cmを測る。柄が一部残存し、木釘で刀身をとめる。粗末な鞘（22）と鏃（24）と重なりあって出土した。鞘は片側のみで、板材をくくりつけた切り込みが残る。鏃は錆が発達し、詳細はよくわからない。池第３層出土。

経　石

池の底に散らばっていた石のなかに墨で法華経の一部を書き記したものを２点発見した（25・26）。25は上部が欠損している。経文が残るのは土中にめり込んでいた部分で、石の平坦な面を用いて、流麗な楷書で右から左側面へ書いている。経文を解読したところ、25は法華経巻２信解品第４、26は巻６法師功徳品第19の一部であることが解った。鳥羽離宮跡の調査では、第96次調査・第124次調査[注(21)]で柿経が出土しているが、石に経文を書いたものが出土したことは初めてである。法華経全巻八万四千字がすべて書き記されたとすると、池に散在する数千個の石に経文が書かれていたこととなる。

4　まとめ

今回の調査により、発掘調査地点は東殿の園池をほぼ一周することとなり、その規模と状況がさらに詳しくわかってきた。中島や南岸に景石を配し、丸い石を敷いた州浜が緩やかな大きい円弧を描いて汀をめぐる穏やかな趣の園池である。

その一方で今回の調査でも建物の跡を検出することができなかった。おそらく建物は池の西岸（現在の北向山不動院）に建っていたのであろう。出土した建築部材から、少なくとも２棟の建物が近隣に所在していたことは確実で、その発見が望まれる。

そのほかの出土遺物では、仏教色の強い遺物が注目できる。雲中供養菩薩像の破片・木製人物像・木製五輪塔などで、これらは仏堂の修築もしくは廃絶により、池中へ廃棄されたものと考えられる。鳥羽離宮跡の調査では、これまでにも多様な宗教・祭祀遺物が出土しており、当時の人々の精神生活を考えるうえでの貴重な資料である。

注

(1) 京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度　鳥羽離宮跡発掘調査概報』1986年、『昭和61年度　鳥羽離宮跡発掘調査概報』1987年

(2) 「東寺境内発掘調査概報」『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』1983年

(3) 注2に同じ

(4) 京都府教育委員会『重要文化財六波羅密寺本堂修理工事報告書』1986年

(5) ㈶古代学協会『法住寺殿跡　平安京跡研究調査報告書第13輯』1984年

(6) 屋根の下地板。垂木の上に張る。

(7) 垂木を二段に組んだ時の下のほうの垂木　上のほうは飛簷垂木

(8) 地垂木の上にあって飛簷垂木を支える横材

(9) 加工をしていない材

(10) 板の端をうけるために作った出っ張り

(11) 天井と壁の接する部分に回っている横材

(12) 扉口の周りに額縁形にとりつける部材

(13) 窓や戸口の上に渡した横材

(14) 柱の頂部を横に貫いて繋ぐ材

(15) 母屋と庇の間を繋ぐ梁

(16) 柱と柱を繋ぐ横材

(17) 柱に長押を取りつけるために作る溝

(18) 床板をうけるために渡す横材

以上の建築部材については　近藤豊『古建築の細部意匠』大河出版　1972年
彰国社『建築大辞典』1976年を参考にした。

(19) 木製五輪塔は、岩手県平泉でも出土している。
平泉町教育委員会『毛越寺庭園発掘調査報告書―第9次調査―』1987年ほか

(20) 京都市埋蔵文化財調査センター・㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和55年度　鳥羽離宮跡調査概要』1981年

(21) 京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度　鳥羽離宮跡発掘調査概報』1985年、『昭和62年度　鳥羽離宮跡発掘調査概報』1988年

V　植物遺体の調査

鳥羽離宮跡の池の土壌中には植物遺体が良好に堆積することが多い。これらの植物遺体の多くは、池の周囲に植栽されていた樹木や草本から供給されたものと考えられ、植物遺体を分析することにより、鳥羽離宮の景観を復元する基礎資料が得られるものと考える。第134次調査では、検出した池跡の汀線付近に根株が遺存していたほか、池跡に植物遺体が良好に堆積していたことから、根株の樹種同定、木本・草本種実の同定、木本種実の分散傾向の調査を行なった。

1　根株の樹種調査（図版32・33、図26）

調査区の池の汀線沿いに、南西から北東方向に５ケ所根株が遺存していた。根株の樹種を顕微鏡観察して調査したところ、A・Dの２点について現生標本との比較によりヤナギ属と判断できた。他の３点は広葉樹で、種不明である。

2　池跡に堆積した植物遺体の調査（図版31、図26）

池の汀線沿いの木本種実の分散傾向

表４は池の汀線から２mほど離れて、調査区の南端から順に２m間隔に池の底に堆積した土壌を採取（１箇所あたり５ℓ）し、植物遺体を水洗選別（１mmメッシュ）して得られた土壌中の木本種実数である。種実の出現頻度の比較的高い樹種はサクラ・センダンの花木と落葉広葉樹のカジノキである。これら３種は特に１ケ所に集中するのではなく、資料採取地点すべてにひろがる傾向がみられる。針葉樹のマツは、球果と葉が出土しており、葉がほそいことからアカマツとみられる。そのほかに花木ではウメ・モモ・スモモ・がごくわずか出土している。落葉広葉樹ではほかに10種類ほど出土しているが、いずれも量は少ない。

池の汀線に直角方向の木本種実の分散傾向

表５は同様の方法で、池の汀線から直角方向に50cm間隔で池の下層の土壌を採取し、土壌中の木本種実の分散を調べたものである。この結果から、池の肩口からなだらかに落ちて池の底が平らになるあたり（18地点付近）に最も多くの種実が堆積していることがわかる。木本のうち、サクラとセンダンでは分散にやや違いが見られ、サクラよりもセンダン

のほうが分散範囲が広い傾向が見られる。興味深い点として、カエデ属の果実の分散傾向があげられる。カエデ属は翼果で果実の分散範囲が広いことが知られているが、これまでの鳥羽離宮跡の池の土壌を水洗してもごくわずかしか果実を採取することができなかった木本のひとつである。今回の調査では他の木本種実の分散傾向と違い、池の汀線からかなり離れた地点（35地点付近）に果実が分散している事実があきらかになった。

草本の種類

池の汀線付近の分析であるため、草本中には湿地に生育する種類が多く、ヒメビシをはじめオモダカ・マツモ・タガラシ・ミクリなどが見られる。ごくわずかであるが、陸上に生育したカタバミ・イヌビユあるいはアカザの類も見られる。

参考文献

北村四郎・村田　源『原色日本植物図鑑　木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社　1977年

北村四郎・村田　源・小山鐵夫『原色日本植物図鑑　草本編上・中・下』保育社　1964年

牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』北隆館　1961年

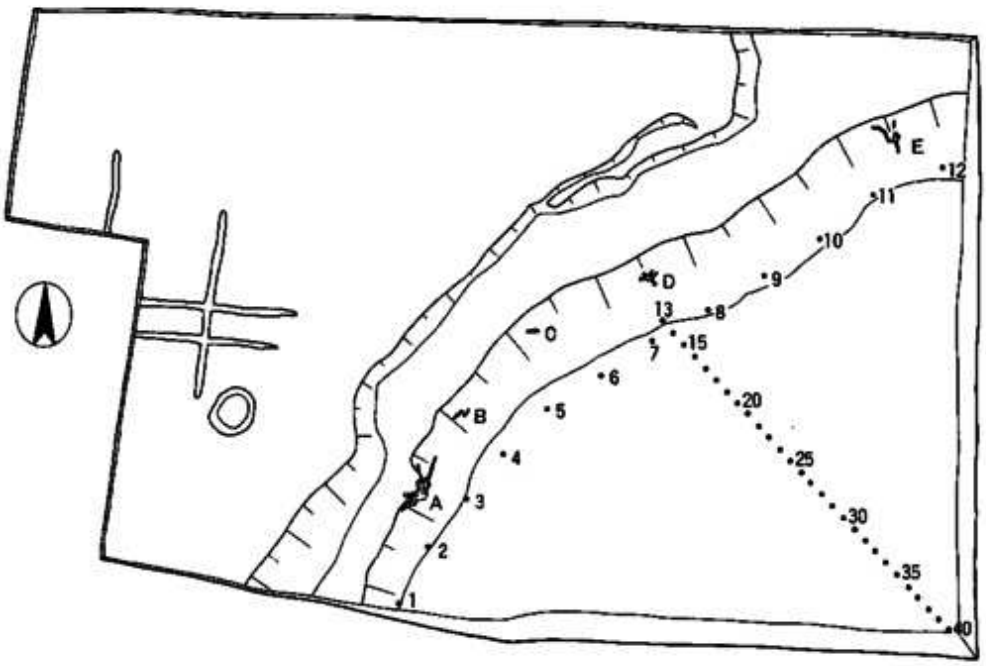


図26　根株・土壌サンプル採取地点位置図

表3　第134次調査植物遺体学名表（木本）

和名	科名	出土部位	学名
アカマツ	マツ	毬果・葉	Pinus densiflora Sieb. et Zucc.
ハンノキ	カバノキ	果実・毬果	Alnus japonica (Thunb.) Steud.
ヤナギ属	ヤナギ	根株	Salix sp.
ウメ	バラ	核	Prunus Mume Sieb. et Zucc.
スモモ	バラ	核	Prunus salicina Lindl.
モモ	バラ	核	Prunus Persica Batsch.
サクラ亜属	バラ	核	Prunus sp. (Subgen. Cerasus)
キイチゴ属	バラ	核	Rubus sp.
センダン	センダン	核	Melia Azedarach L. var. subtripinnata Miquel
ムクノキ	ニレ	核	Aphananthe aspera Planchon
エノキ	ニレ	核	Celtis sinensis Persoon
クワ属	クワ	核	Morus sp.
カジノキ	クワ	核	Broussonetia papyrifera Vent.
イヌザンショウ	ミカン	種子	Fagara mantchurica Honda
アカメガシワ	トウダイグサ	種子	Mallotus japonicus Muell. Arg.
カエデ属	カエデ	果実	Acer sp.
ブドウ属	ブドウ	種子	Vitis sp.
カキノキ	カキノキ	種子	Diospyros kaki Thunb.

学名は北村・村田（1979）、牧野（1961）による

表4　第134次調査植物遺体学名表（草本）

和名	科名	出土部位	学名
カナムグラ	クワ	種子	Humulus japonicus Sieb. et Zucc.
タデ属	タデ	果実	Polygonum sp.
アカザ科	アカザ	種子	Chenopodiaceae
ヒユ科	ヒユ	種子	Amaranthaceae
マツモ	マツモ	果実	Ceratophyllum demersum L.
タガラシ	キンポウゲ	果実	Ranunculus sceleratus L.
カタバミ	カタバミ	種子	Oxalis corniculata L.
ノブドウ	ブドウ	種子	Ampelopsis brevipedunculata Trautv.
ヒメビシ	ヒシ	果実	Trapa incisa Sieb. et Zucc.
シソ属	シソ	果実	Perilla sp.
ナス	ナス	種子	Solanum melongena L.
ウリ	ウリ	種子	Cucumis melo L.
スズメウリ	ウリ	種子	Melothria japonica Maxim.
キク科	キク	果実	Compositae
ミクリ	ミクリ	果実	Sparganium sp.
ヒルムシロ属	ヒルムシロ	果実	Potamogeton sp.
ヘラオモダカ	オモダカ	果実	Alisma canaliculatum A.
カヤツリグサ属	カヤツリグサ	果実	Cyperus sp.
イボクサ	ツユクサ	種子	Murdannia keisak Hand. -Mzt.

学名は北村・村田・小山（1964）、牧野（1961）による

表5　池の汀線沿いの木本種実数

採取地点＼和名	マツ	ウメ	モモ	スモモ	サクラ	センダン	ムクノキ	エノキ	クワ	カジノキ	イヌザンショウ	アカメガシワ	カエデ属	ブドウ属	カキノキ
	球果	核	核	核	核	核	核	核	核	核	種子	種子	果実	種子	種子
1	1	—	—	—	○	12	○	—	—	1	1	—	2	—	—
2	2	—	—	—	3	15	○	—	—	3	1	1	1	1	—
3	—	—	—	—	4	22	2	—	—	1	2	—	—	—	—
4	1	—	1	—	5	14	—	—	2	4	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	2	4	—	—	1	3	—	○	—	—	1
6	○	○	—	—	4	12	2	1	2	1	—	—	—	1	—
7	—	○	—	—	4	21	—	—	—	5	2	1	—	—	—
8	—	—	—	—	4	17	—	—	—	3	—	—	—	—	—
9	1	—	—	—	5	12	—	—	—	2	—	—	—	—	—
10	1	—	—	○	1	12	—	—	—	1	—	○	—	—	○
11	—	—	—	—	2	12	—	—	—	—	—	1	—	—	3
12	○	—	—	—	2	4	—	—	—	1	—	—	1	1	9

（○は破片をしめす）

表6　池の汀線と直角方向に分散する木本種実数

採取地点＼和名	マツ	ハンノキ	ウメ	サクラ	キイチゴ属	センダン	ムクノキ	エノキ	クワ	カジノキ	イヌザンショウ	アカメガシワ	カエデ属
	球果	果実	核	核	核	核	核	核	核	核	種子	種子	果実
13	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—
14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
15	—	—	—	1.5	—	1	—	—	—	1	—	1	—
16	2	2	—	3	—	2	—	—	—	1	—	—	—
17	1	—	—	3	—	—	—	1	1	4	—	—	—
18	—	—	—	7	—	17	—	—	—	—	—	—	—
19	—	1	—	3	1	12	—	1	—	1	—	—	—
20	—	—	—	3	—	12	—	—	—	—	1	—	—
21	—	—	—	3	—	13	—	1	1	—	—	—	—
22	1	—	—	—	—	10	—	—	—	—	1	—	—
23	—	—	—	—	—	9	1	—	—	—	—	—	—
24	—	—	○	1	—	4	○	—	—	—	—	—	1
25	—	—	—	1	—	5	—	—	1	—	1	—	1
26	—	—	—	—	—	6	—	○	—	—	—	—	—
27	○	—	—	2	—	4	—	○	—	—	—	—	—
28	○	—	—	1	—	○	—	—	—	—	—	—	—
29	—	—	—	○	—	1	—	—	—	—	—	—	—
30	—	—	—	1	—	2.5	—	—	—	—	—	—	—
31	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	1
32	○	—	—	○	—	1	—	—	—	—	—	—	—
33	○	—	—	1	—	—	—	○	—	—	—	—	1
34	—	—	—	—	—	1	○	—	—	—	—	—	2
35	○	—	—	—	—	2.5	—	—	—	—	—	—	1
36	○	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
37	○	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	2
38	○	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
39	○	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
40	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

（○は破片をしめす）

図　　版

1　第２遺構面全景（北から）

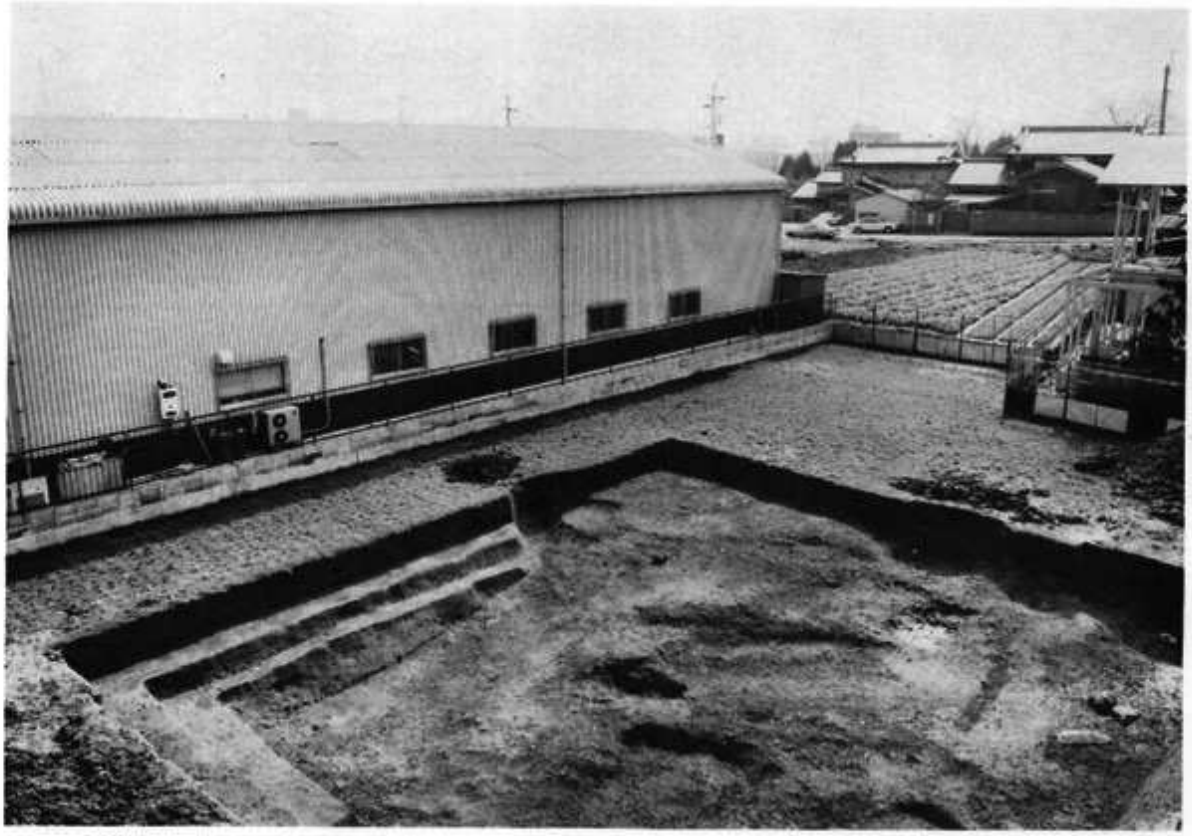
2　ＳＫ８（北から）

3　柱穴断ち断り（北から）

1　第3遺構面全景（北から）

2　SD1（東から）

3　SD1土器出土状況（東から）



1　調査地全景（北西から）

2　ＳＸ１全景（北から）

1　ＳＸ２（西南から）

2　ＳＸ１景石（西南から）

1　ＳＫ１全景（北から）

2　ＳＸ１北側断ち割り状況（北から）

1　ＳＸ１西側断ち割り状況（北西から）

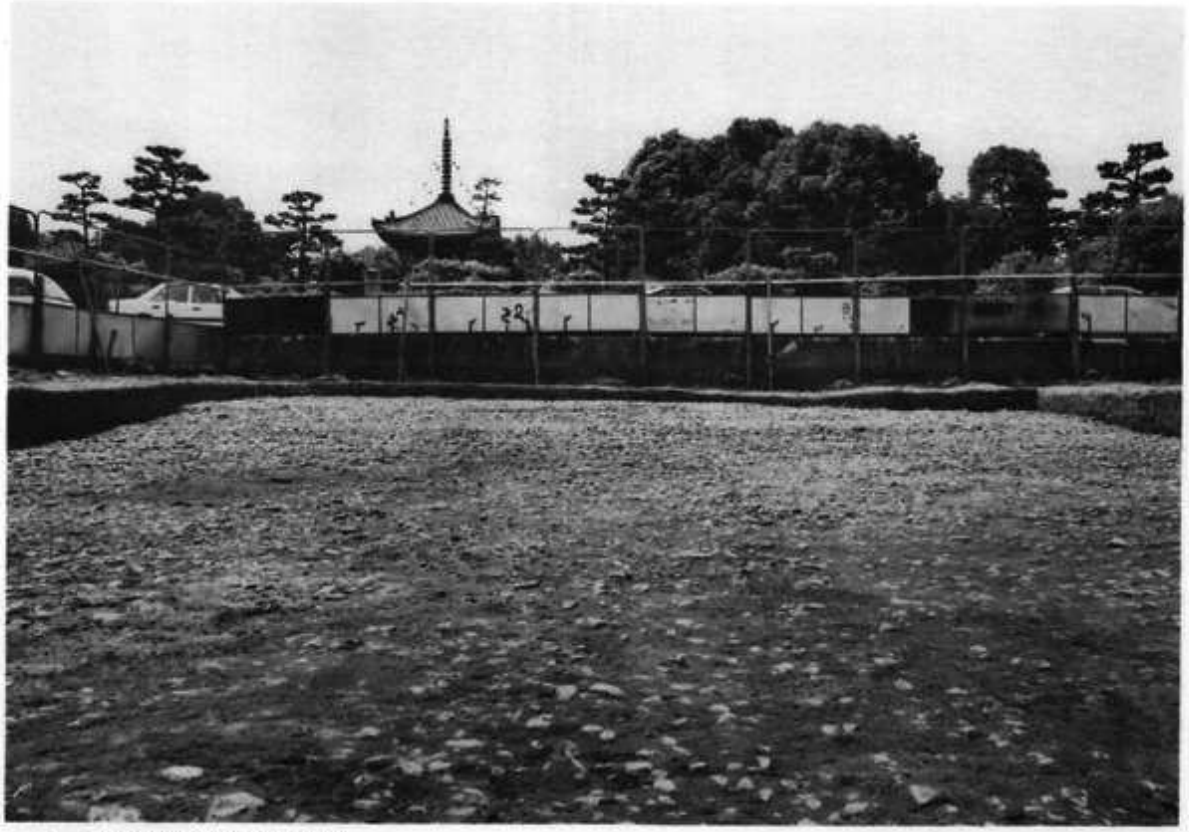
2　ＳＸ１上部地業状況（西北から）

3　ＳＸ４景石据え付け状況（西から）

1　北殿の島跡検出状況（第95次調査、西から）

2　東殿の島跡検出状況（第117次調査、北から）

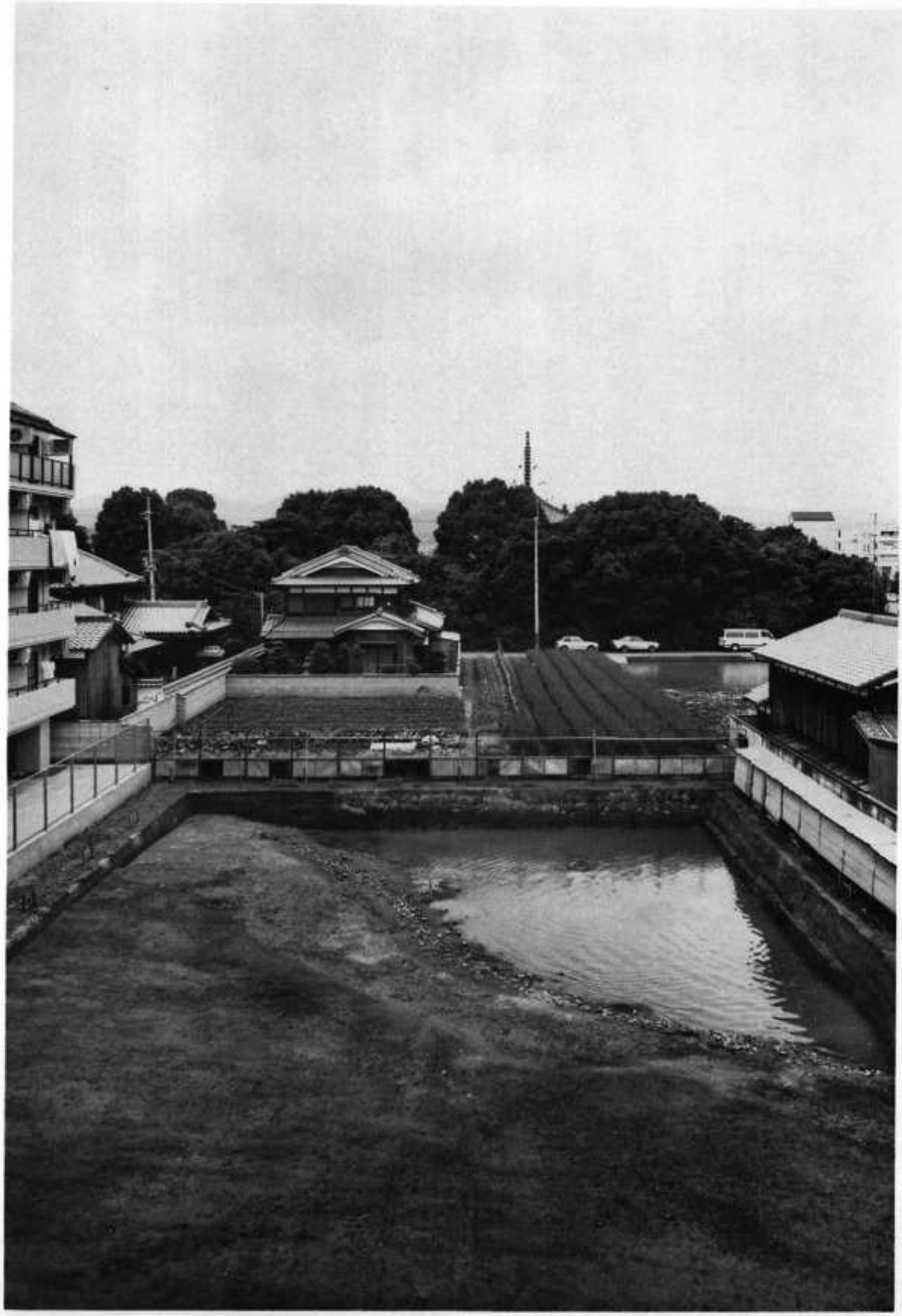
1　調査地全景（東から）



2　池状遺構の底（東から）

1　調査地全景（南西から）

2　洲浜（南から）



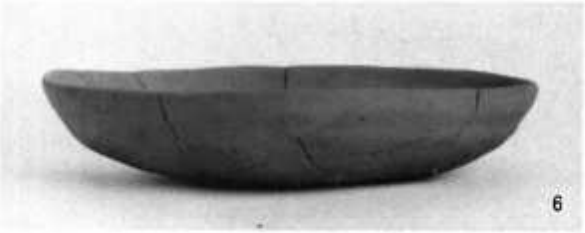
水をたたえた池（西から）

1　池の汀（北東から）

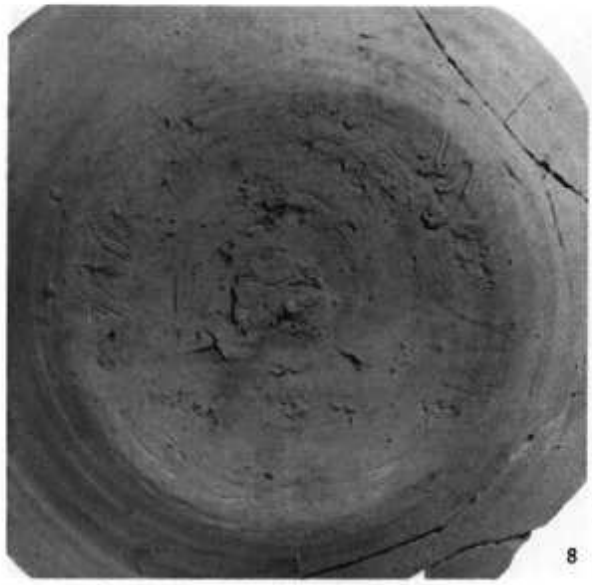
2　田下駅出土状況

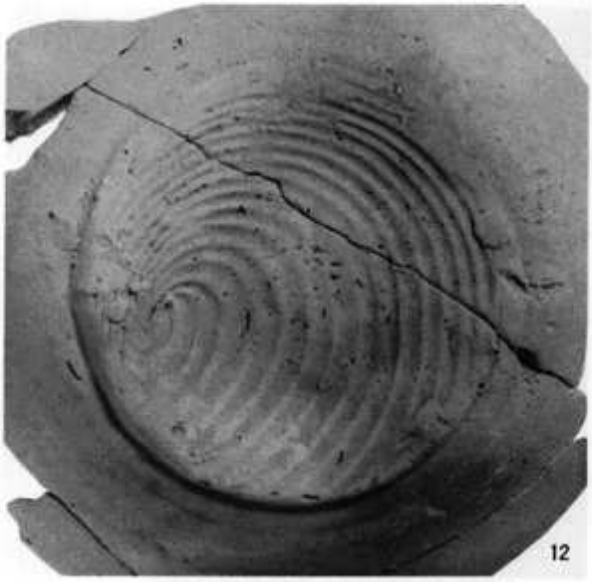
3　人物像出土状況

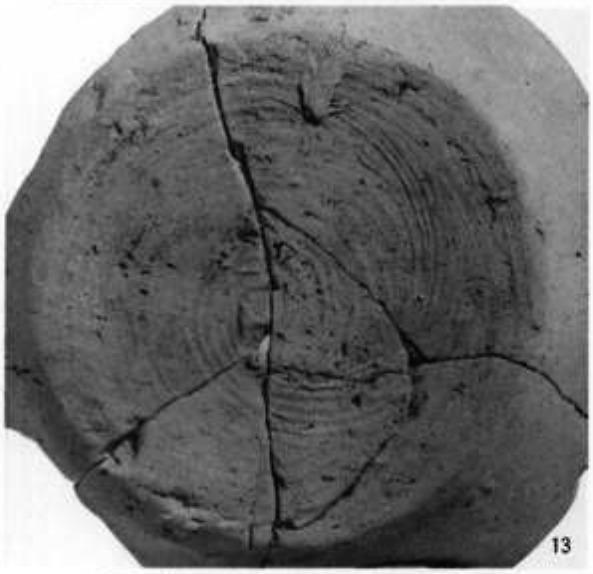
軒丸瓦・軒平瓦



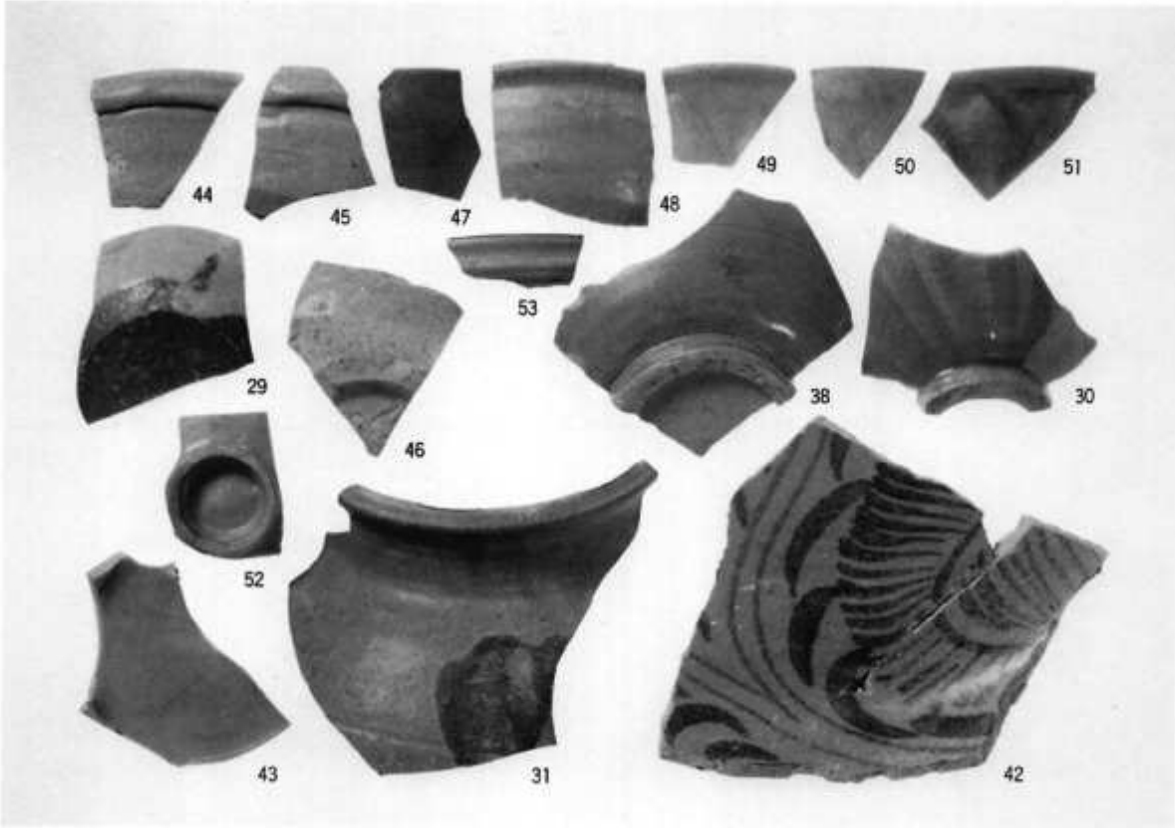
ＳＤ１出土土器



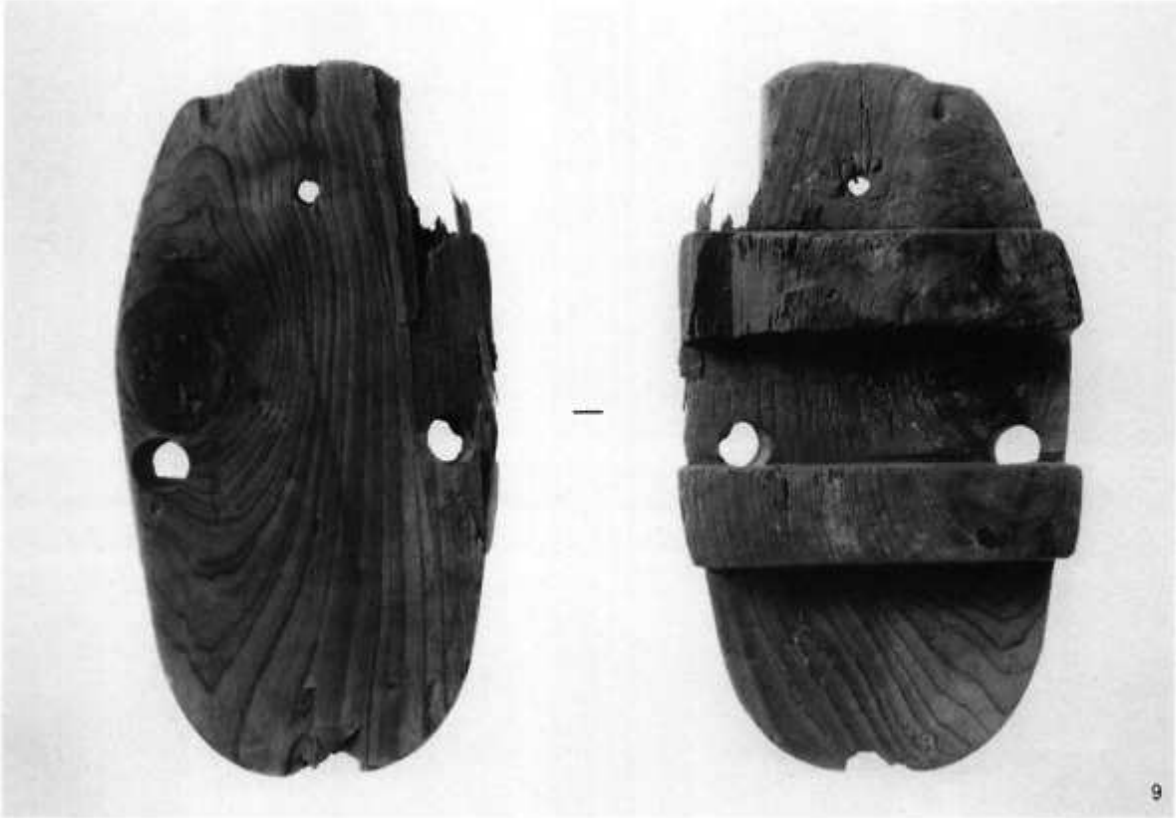




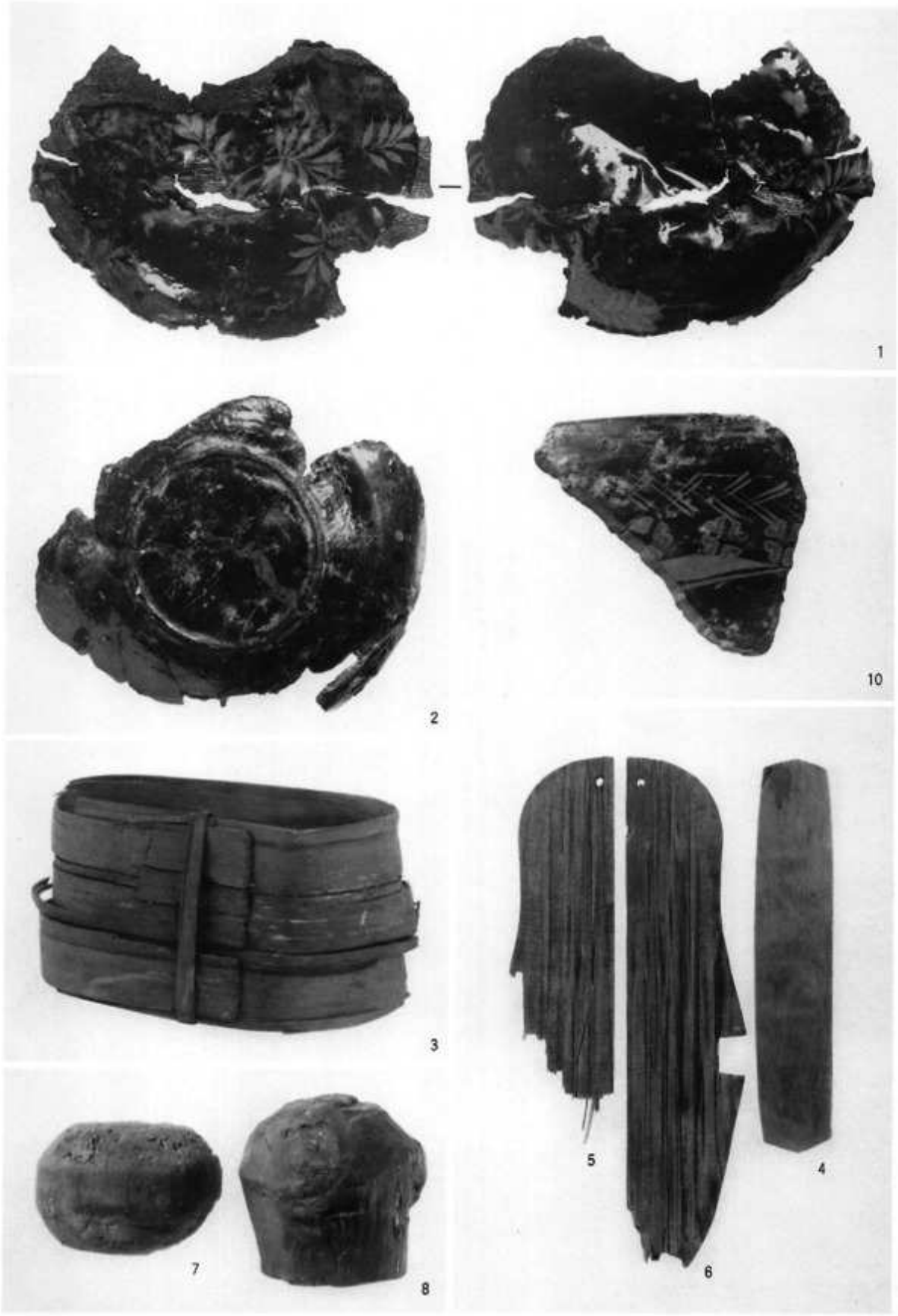
ＳＤ１出土土器底部



1　輸入陶磁器

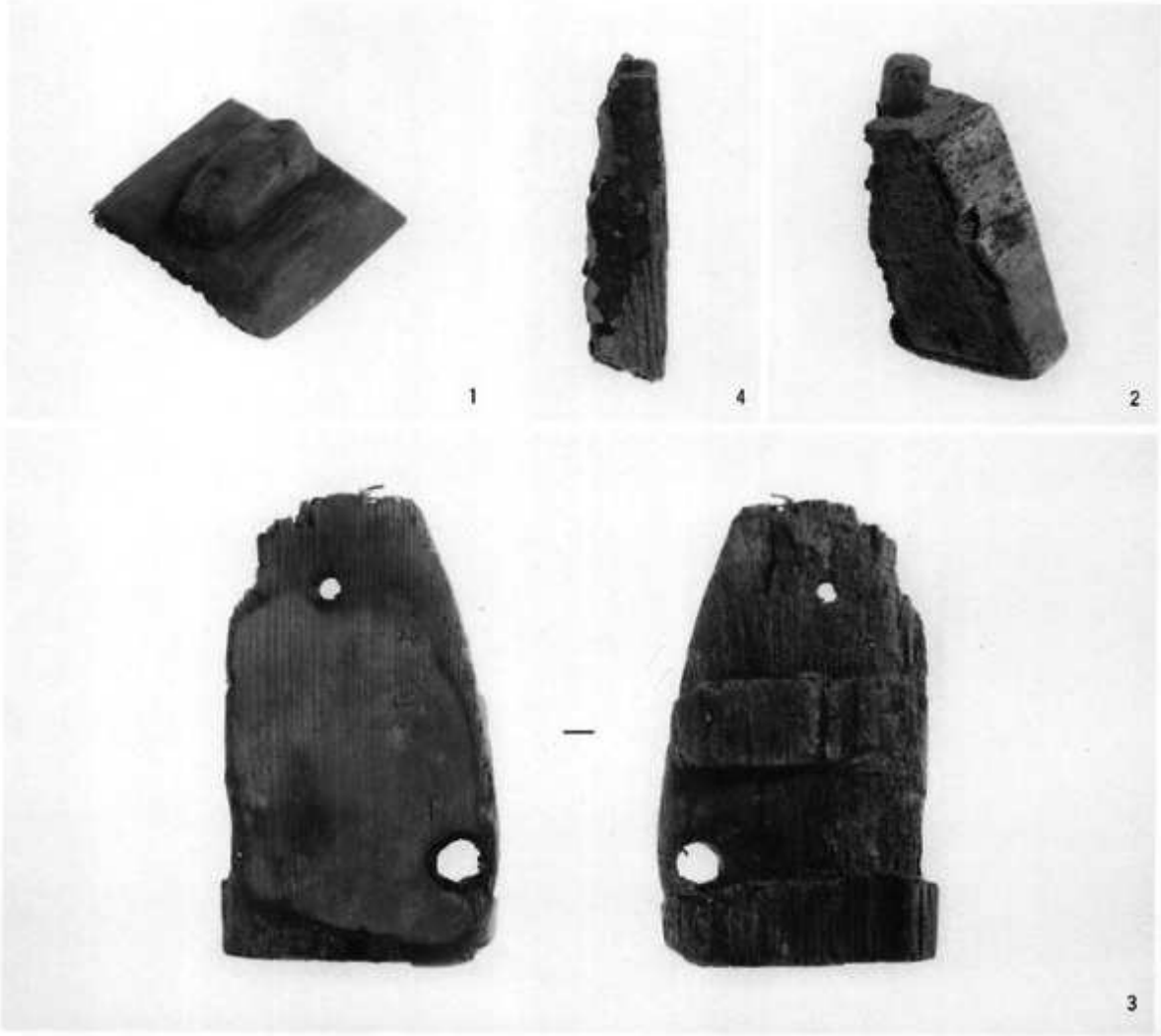


2　木製品　下駄



木製品　漆器(1, 2, 10)・曲物(3)・草履芯(5, 6)・木球(7, 8)・用途不明品(4)

1　軒丸瓦・軒平瓦



2　木製品　下駄(2, 3)・蒔絵(4)・用途不明品(1)

軒丸瓦(1)

10

13

11

14

12

15

軒丸瓦(2)

23

30

21

37

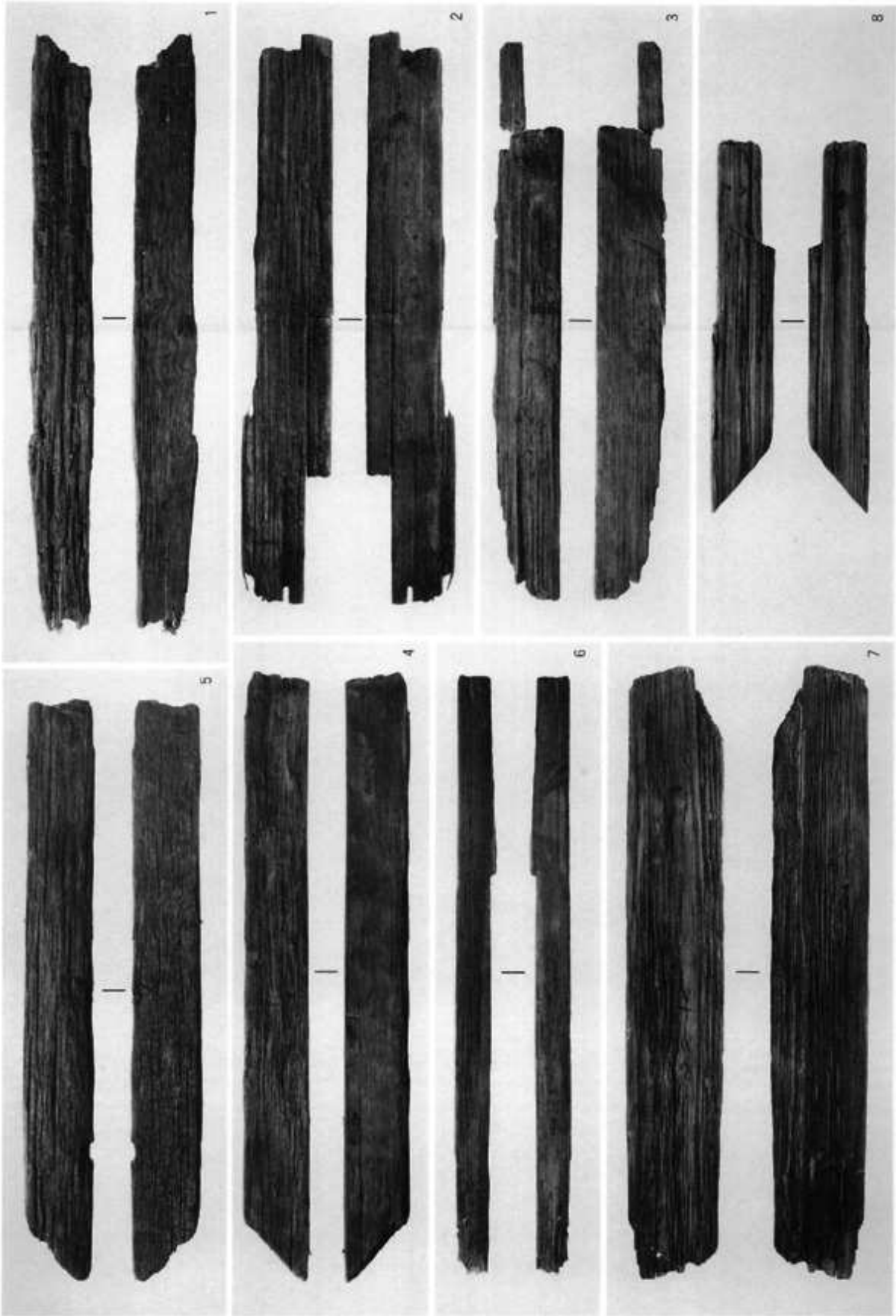
36

35

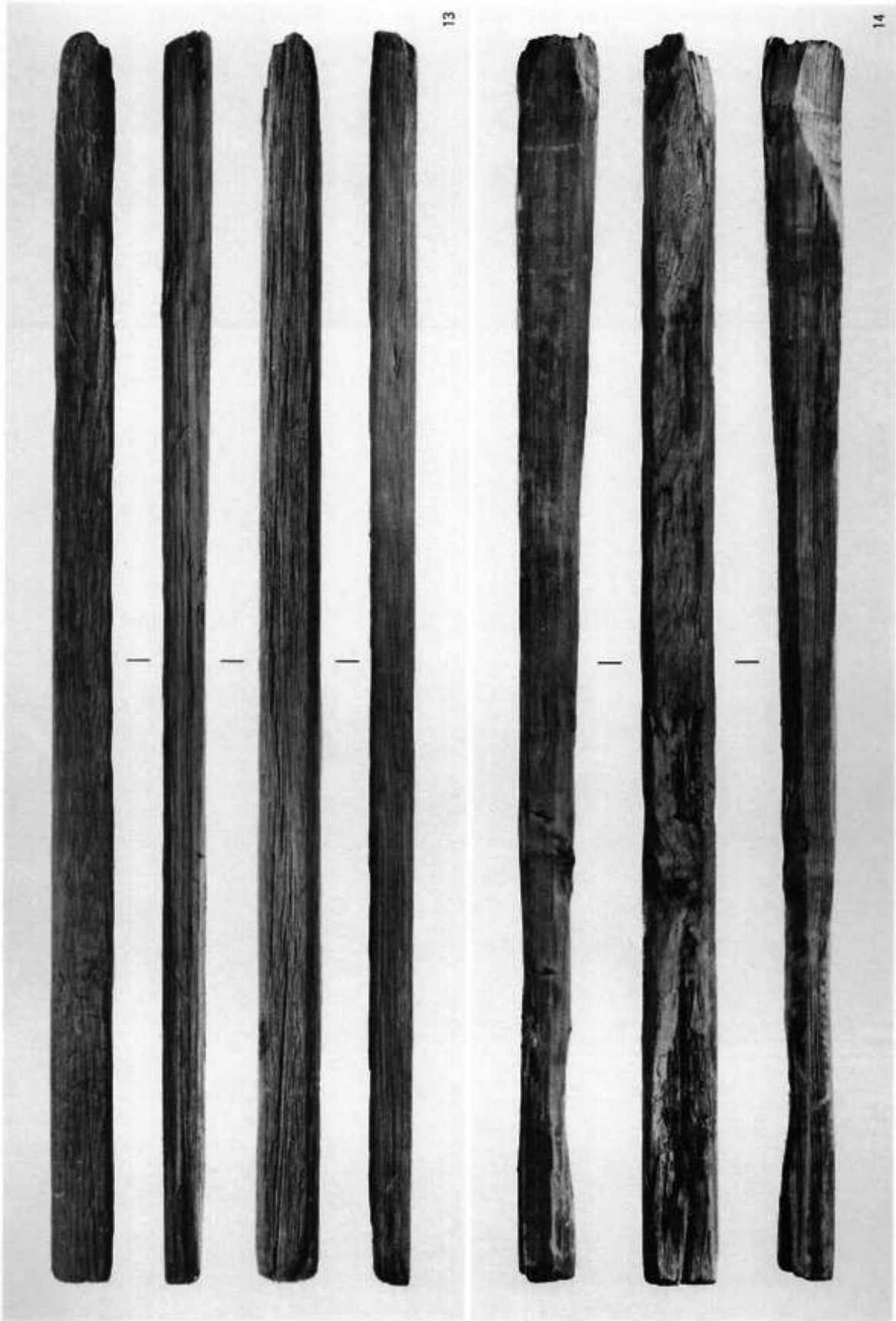
32

31

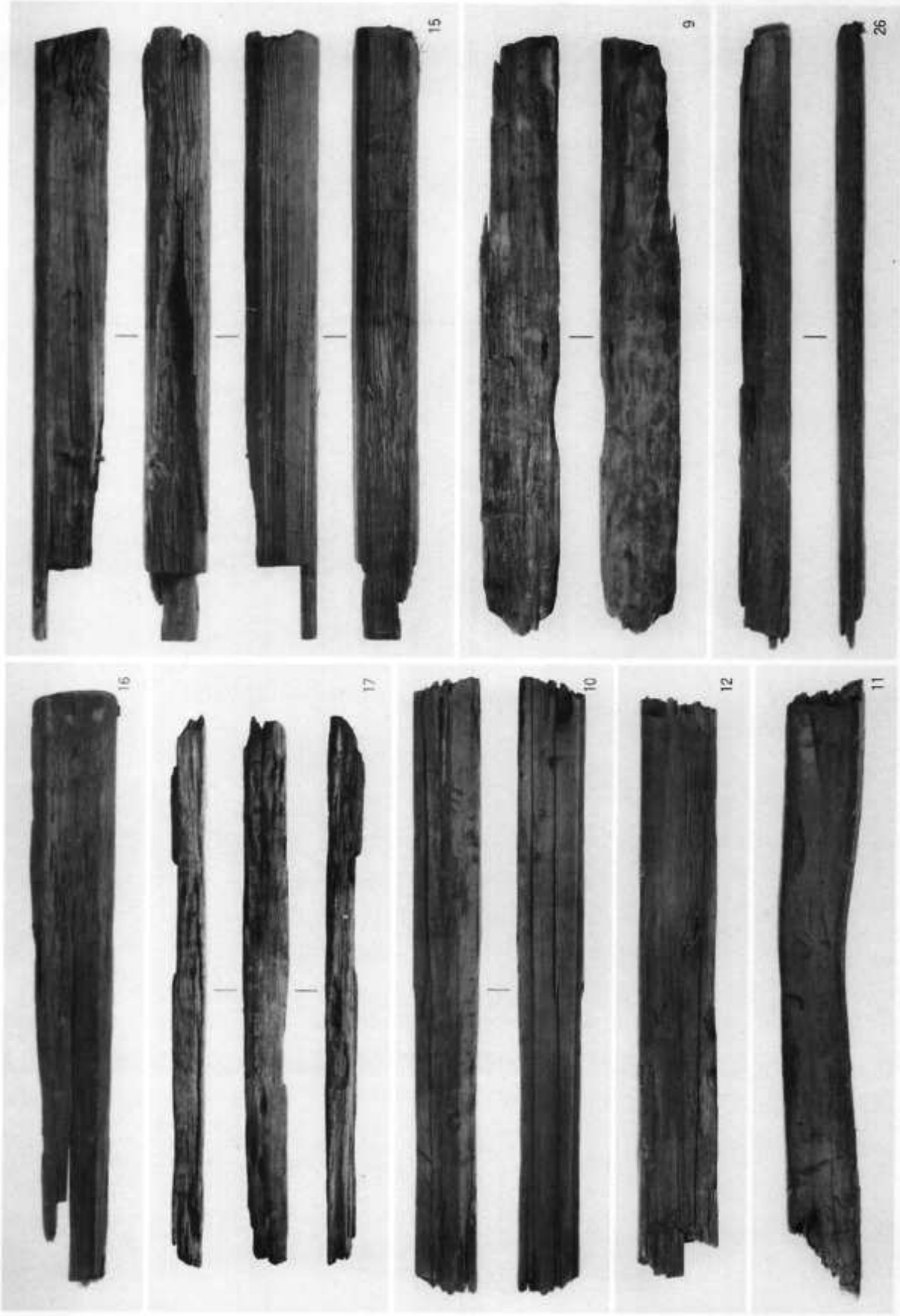
軒平瓦



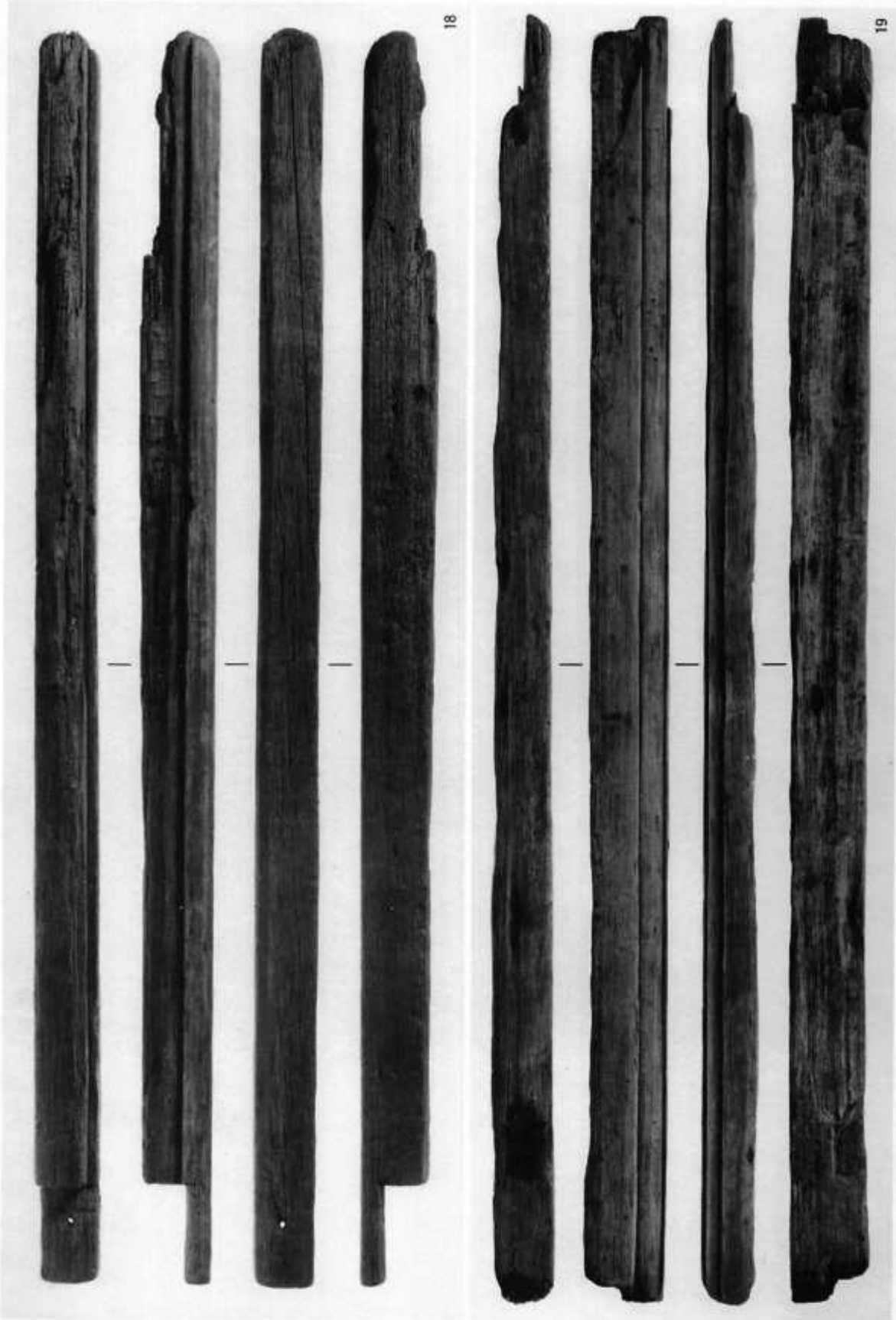
建築部材　屋根板（1～8）



建築部材　垂木（13, 14）

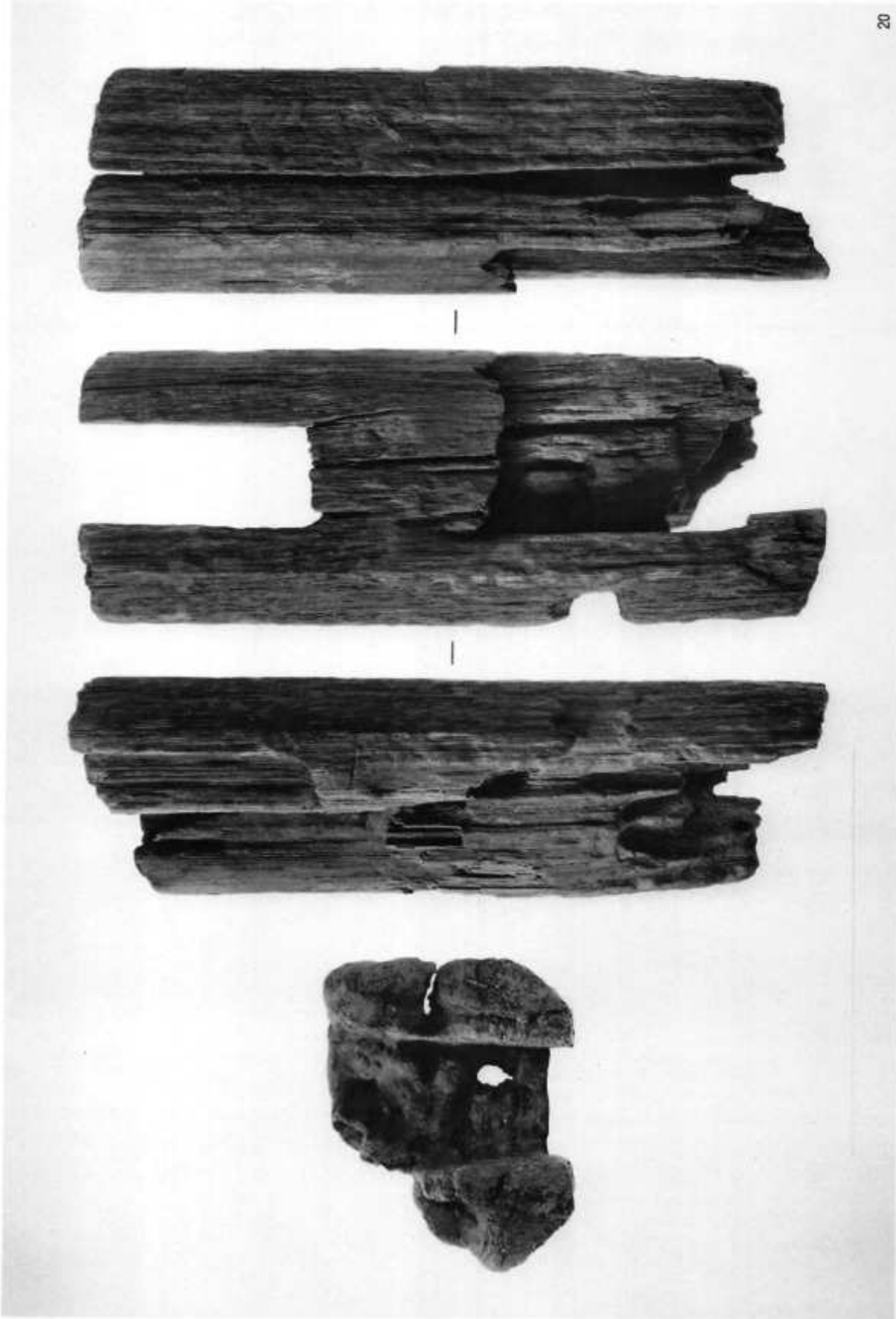


建築部材　屋根板(9)・野地板(10～12)・垂木(15～17)

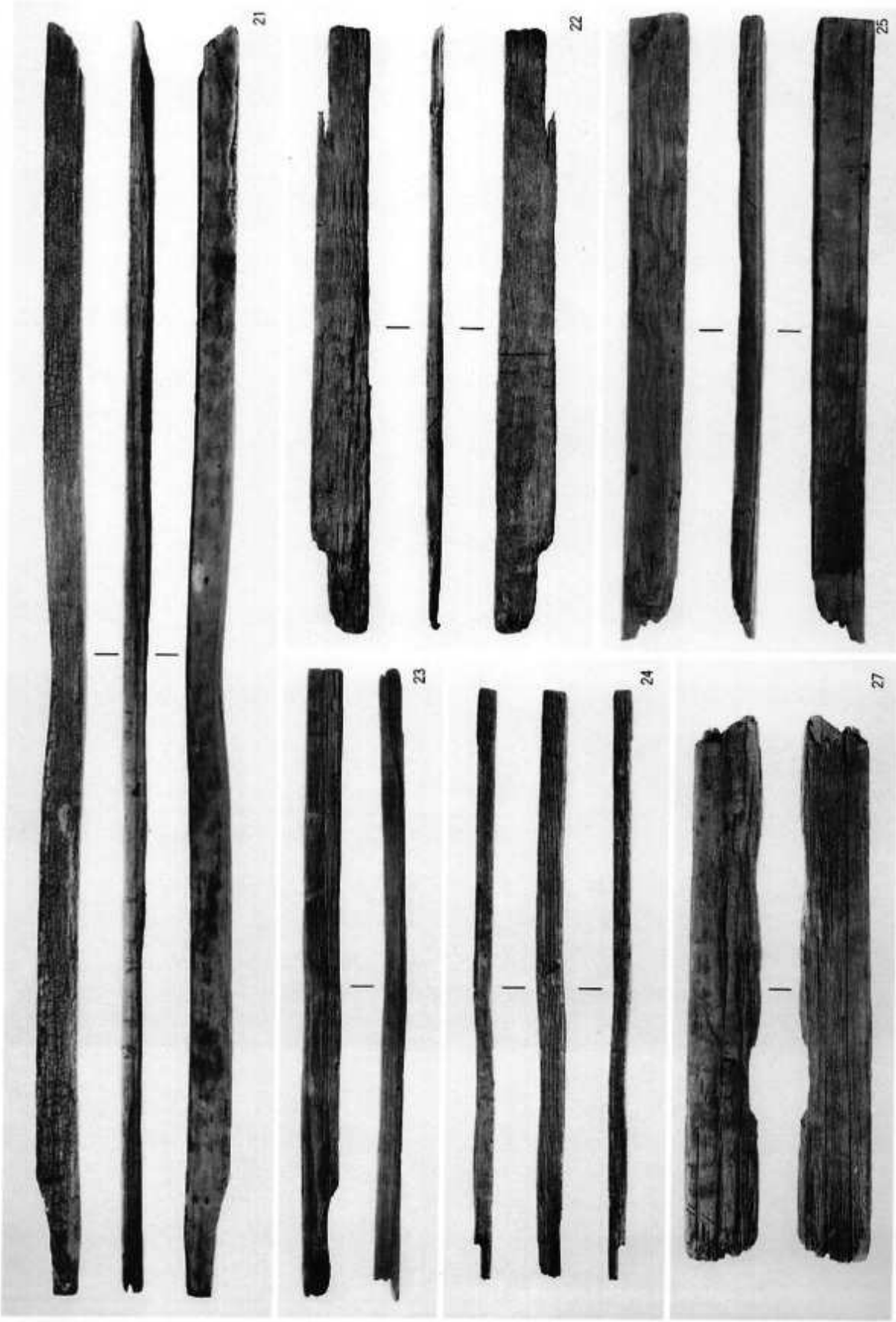


建築部材　回り縁(18)・幣軸(19)

20



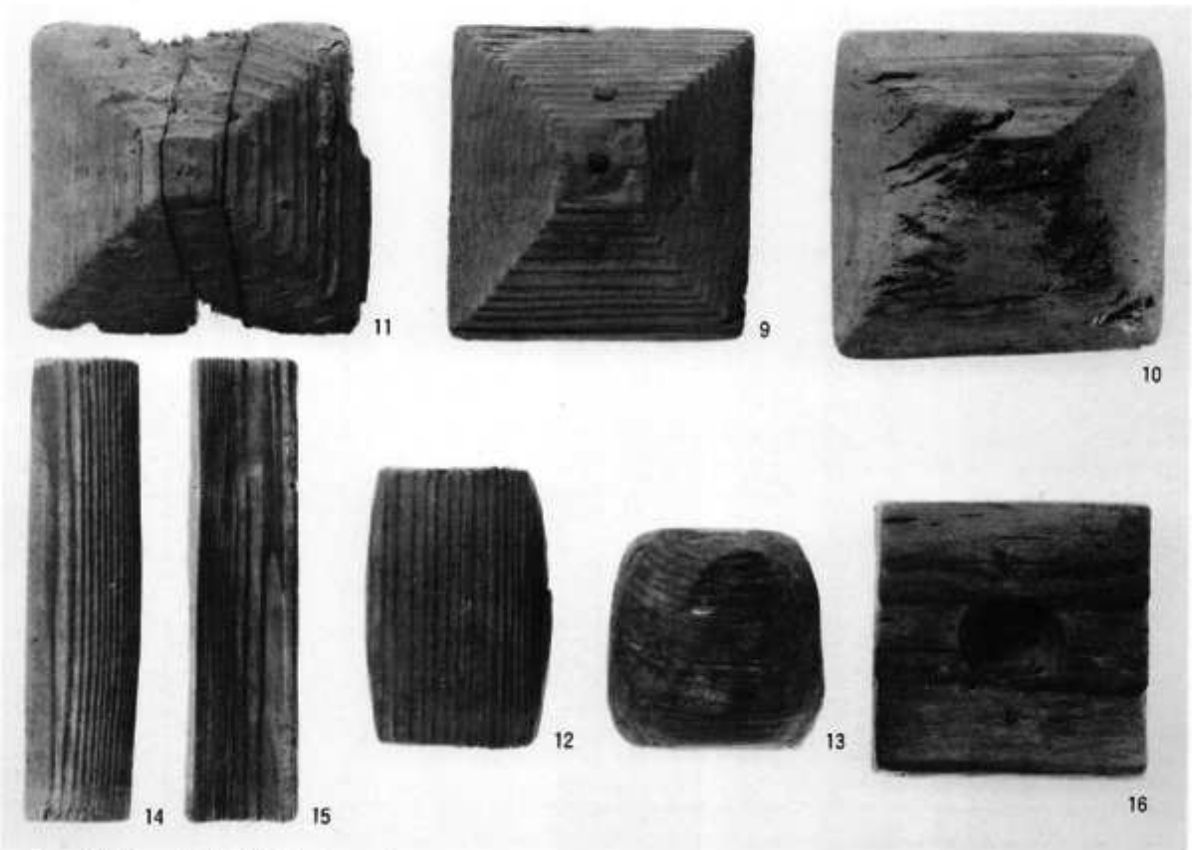
建築部材　柱（20）



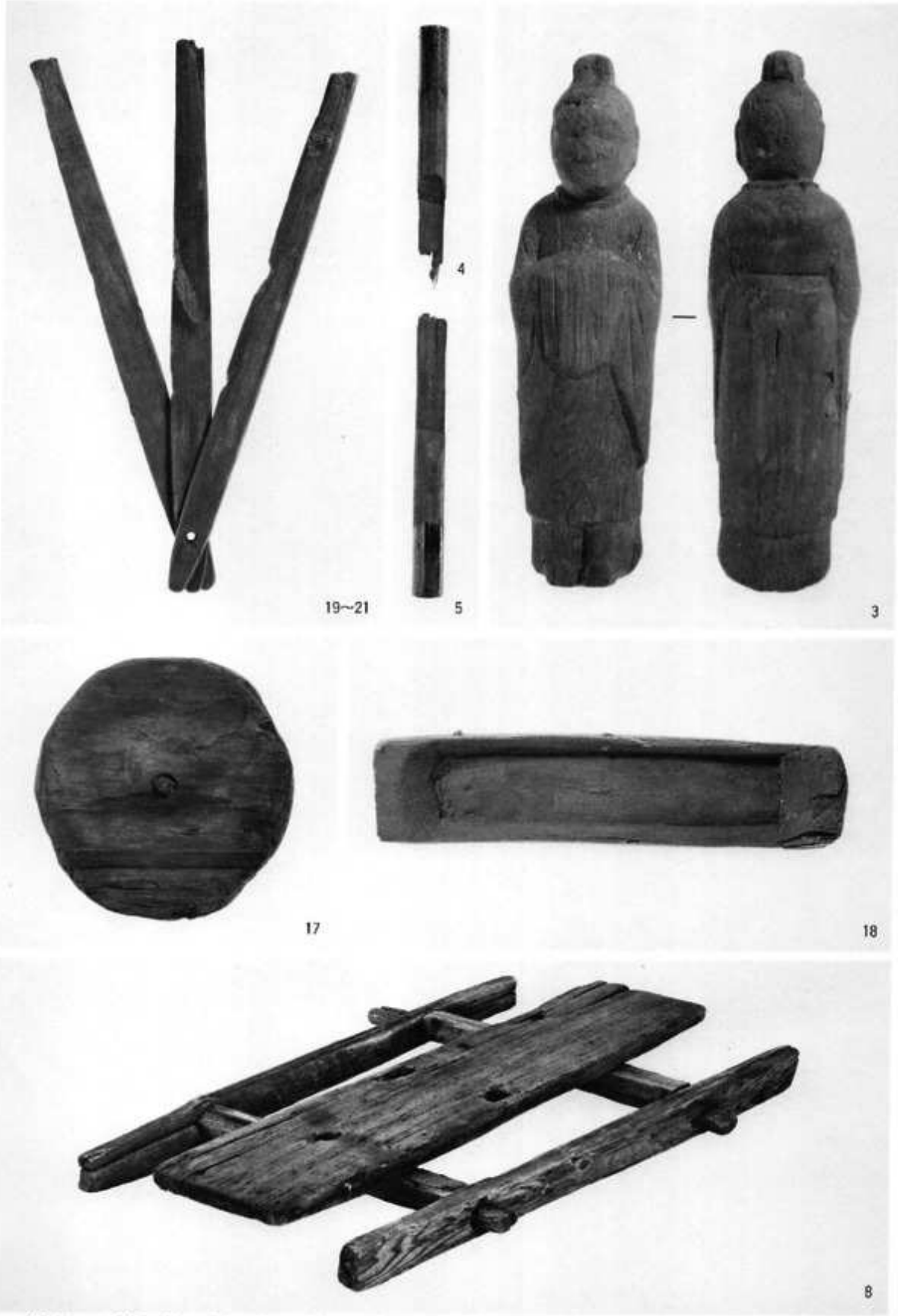
建築部材　床板(21～24)・根太(25)

木製品　雲形木製品（1, 2）

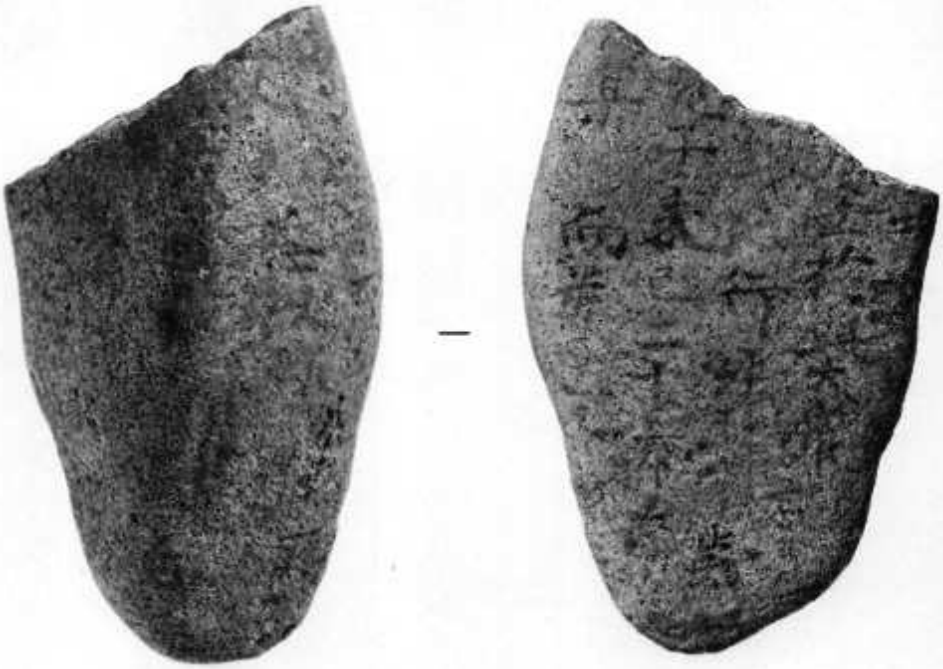
1　木製五輪塔参考例（第112次調査出土）



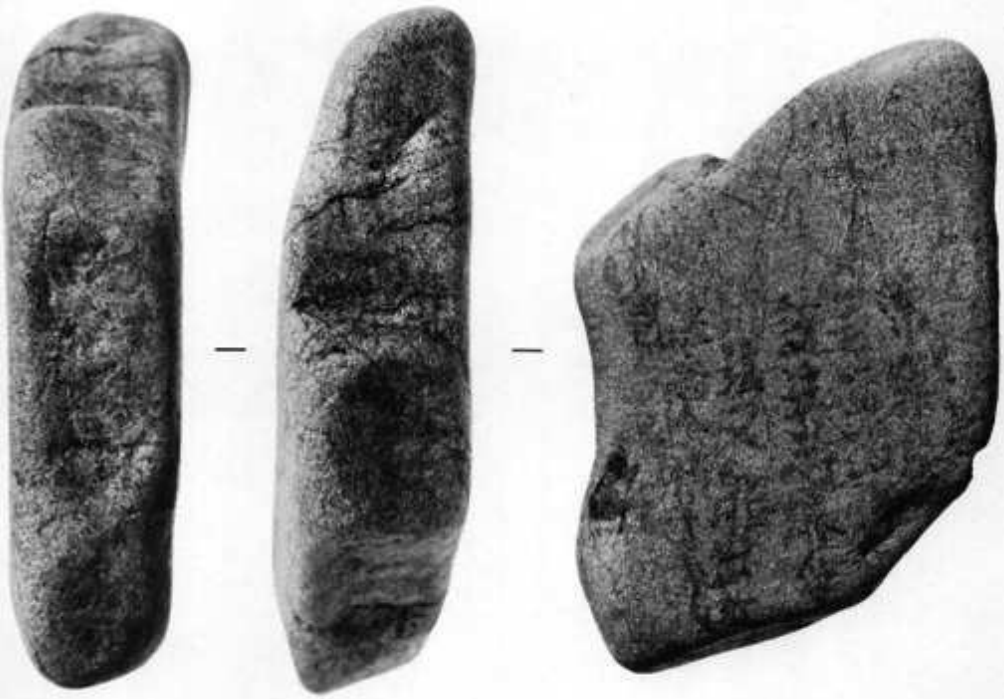
2　木製品　木製五輪塔（9～16）



木製品　人物像(3)・軸(4,5)・扇(19~21)・田下駄(8)

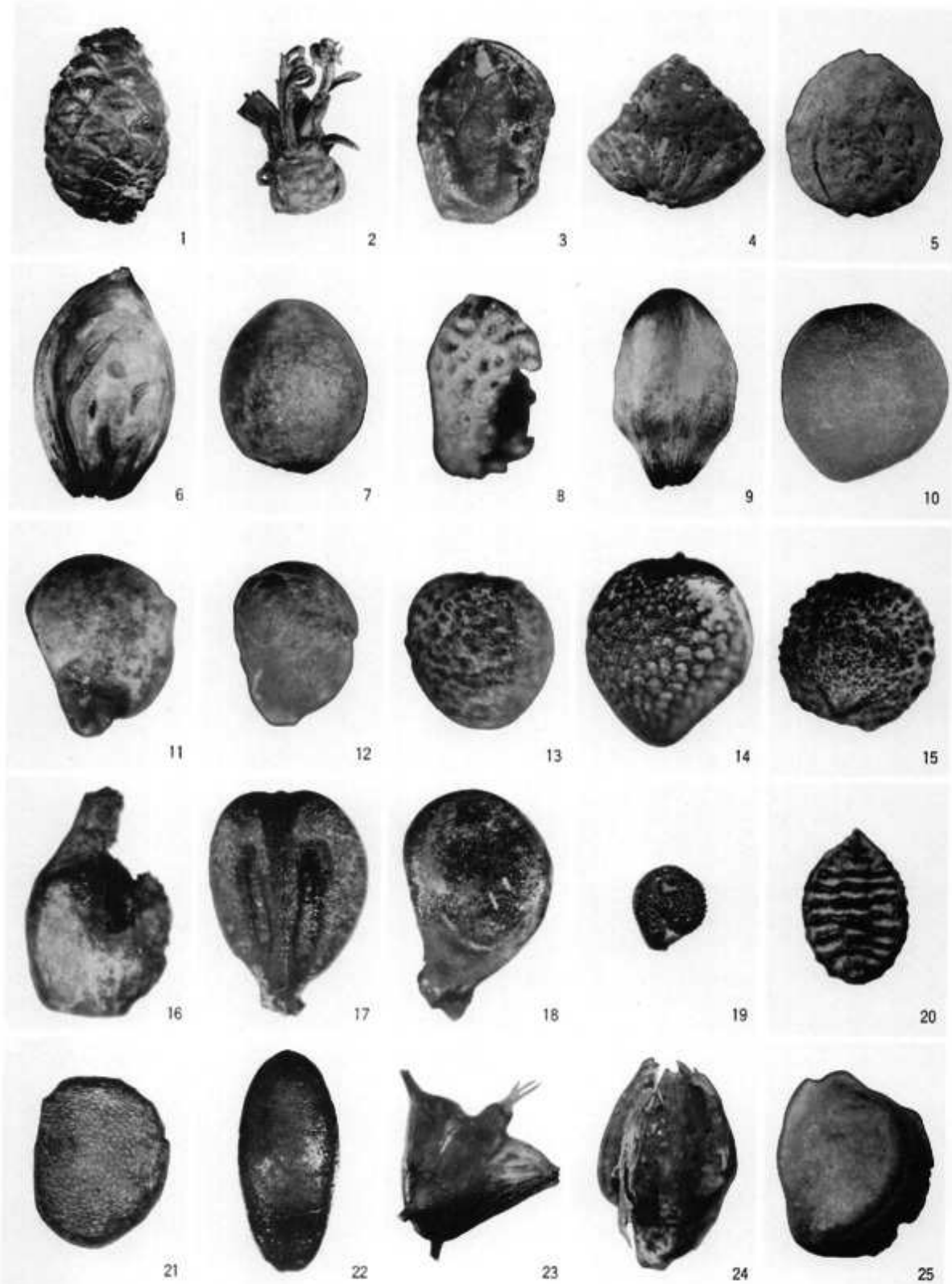


（側面）　（正面）25



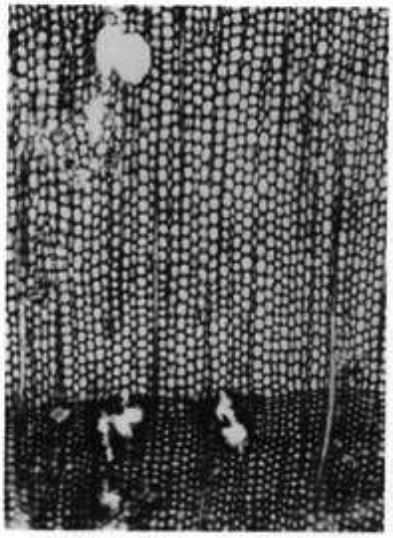
（背面）　（上面）　（正面）26

経石（25, 26）

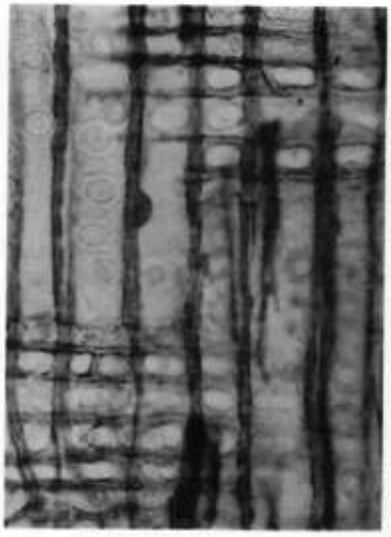


木本　1. マツ(1), 2. マツ葉(4.8), 3. ハンノキ(6), 4. ウメ(1.6), 5. スモモ(2.4), 6. モモ(1), 7. サクラ(3.6), 8. キイチゴ属(10), 9. センダン(1.6), 10. ムクノキ(30), 11. エノキ(5.4), 12. クワ属(8.4), 13. カジノキ(8.4), 14. イヌザンショウ(6), 15. アカメガシワ(6), 16. カエデ属(6), 17. ブドウ属(6), 18. カキノキ(3.6)

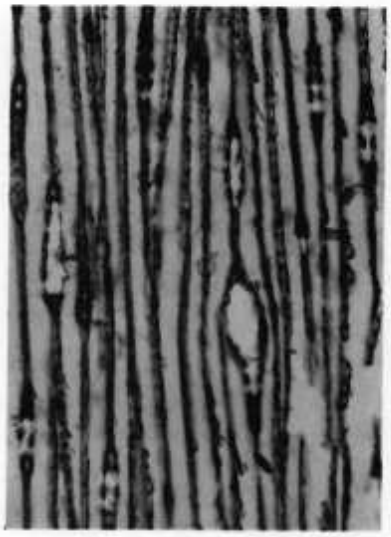
草本　19. スベリヒユ(12), 20. カタバミ(12), 21. ナス(7.5), 22. ウリ(3), 23. ヒメビシ(2), 24. ミクリ(6), 25. ヒルムミロ属(9)　　( )内は倍率



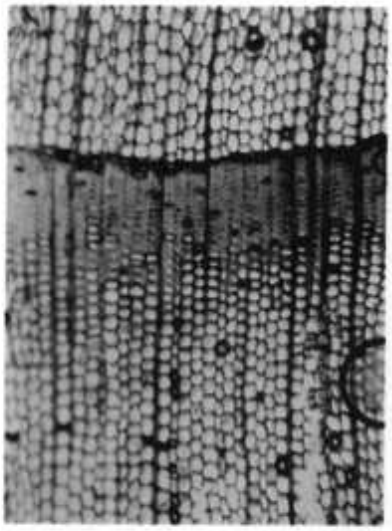
池埋土中の自然木　マツ属木口（×40）



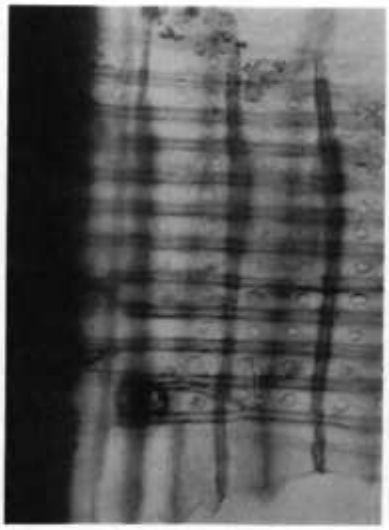
マツ属柾目（×200）



マツ属板目（×100）

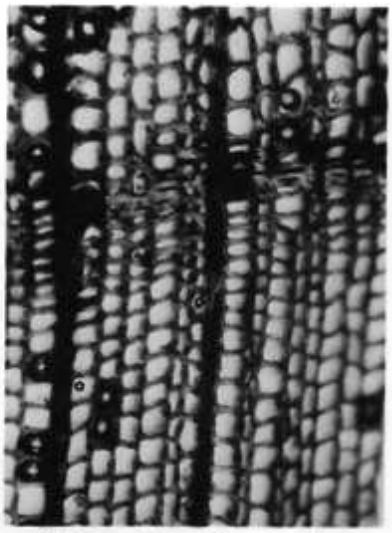


部材7　スギ木口（×40）

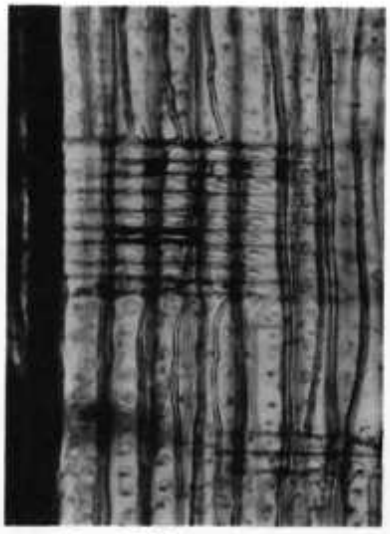


スギ柾目（×200）

スギ板目（×100）



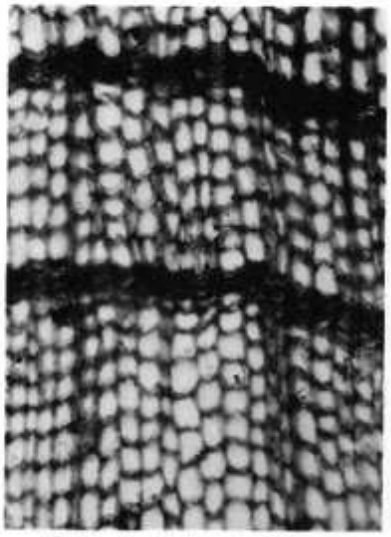
部材17　コウヤマキ木口（×100）



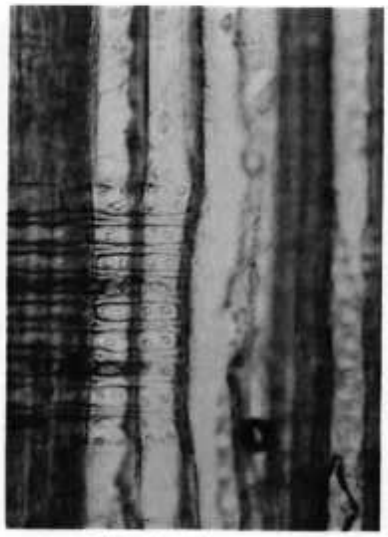
コウヤマキ柾目（×100）

コウヤマキ板目（×100）

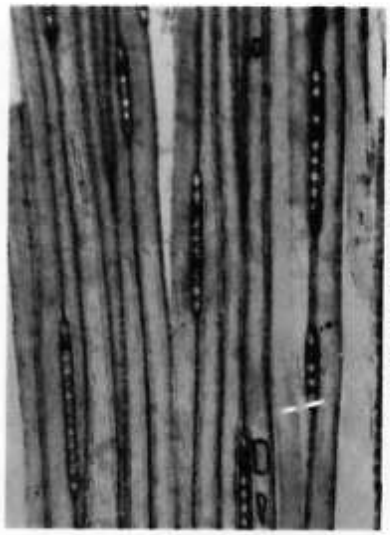
建築部材顕微鏡写真(1)



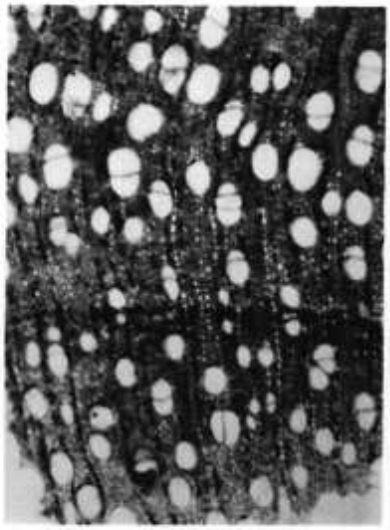
部材19　ヒノキ木口（×100）



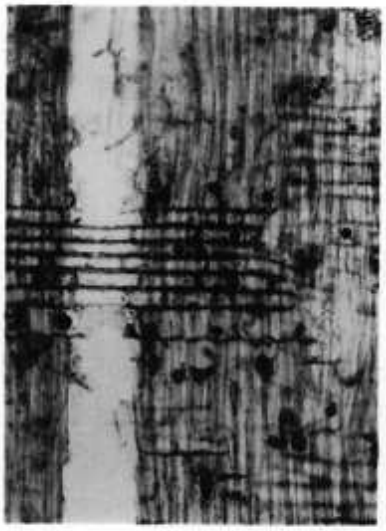
ヒノキ柾目（×200）



ヒノキ板目（×100）

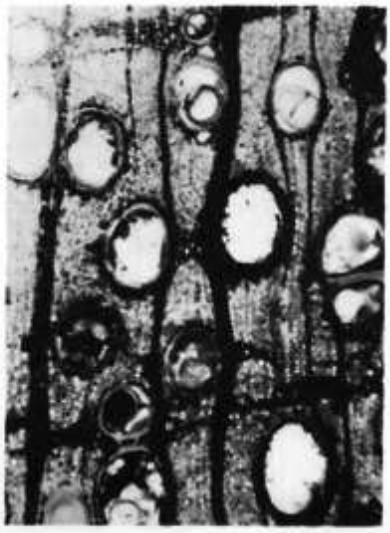


根株A　ヤナギ属木口（×40）



ヤナギ属柾目（×100）

ヤナギ属板目（×40）

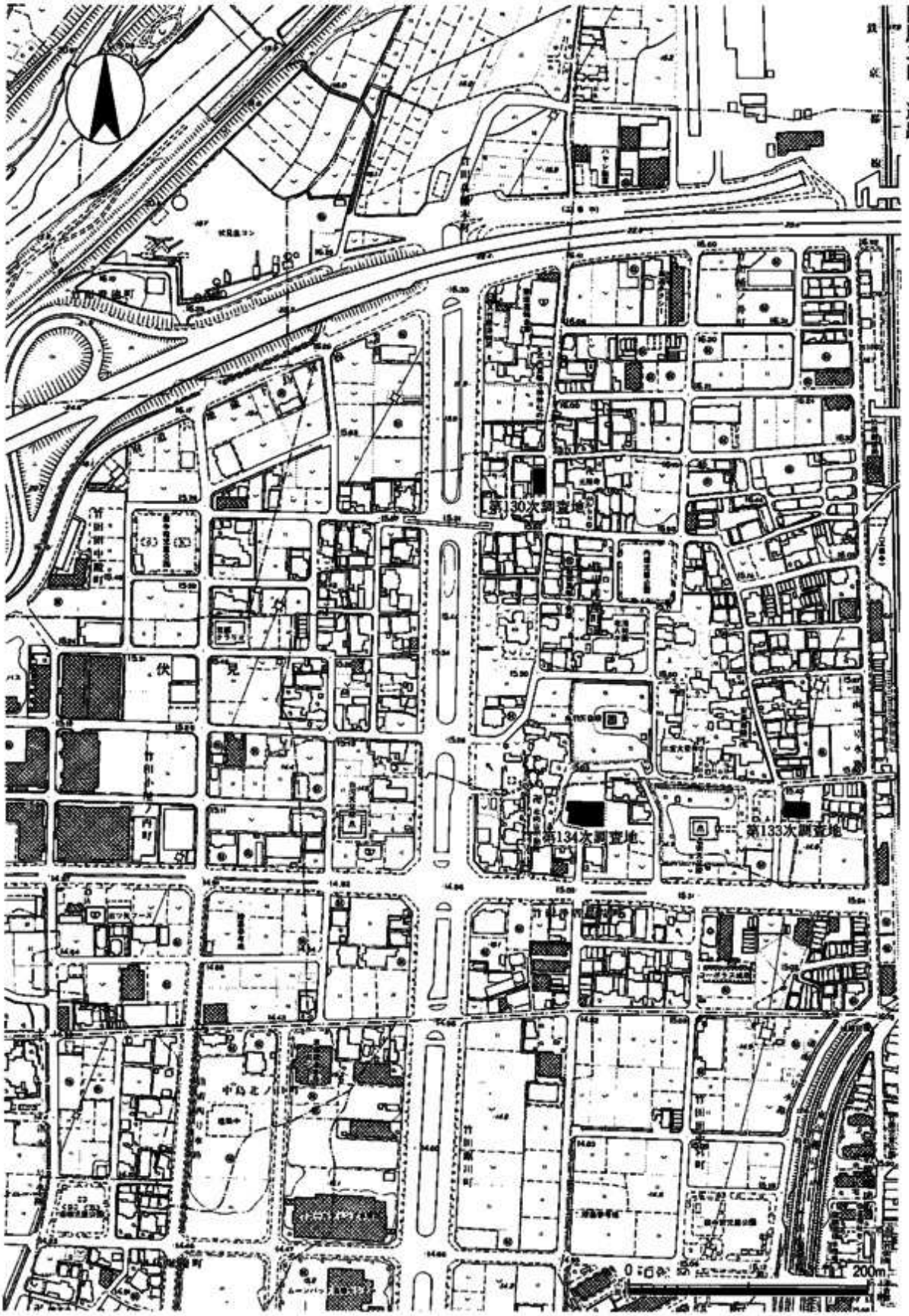


根株C　不明広葉樹木口（×40）

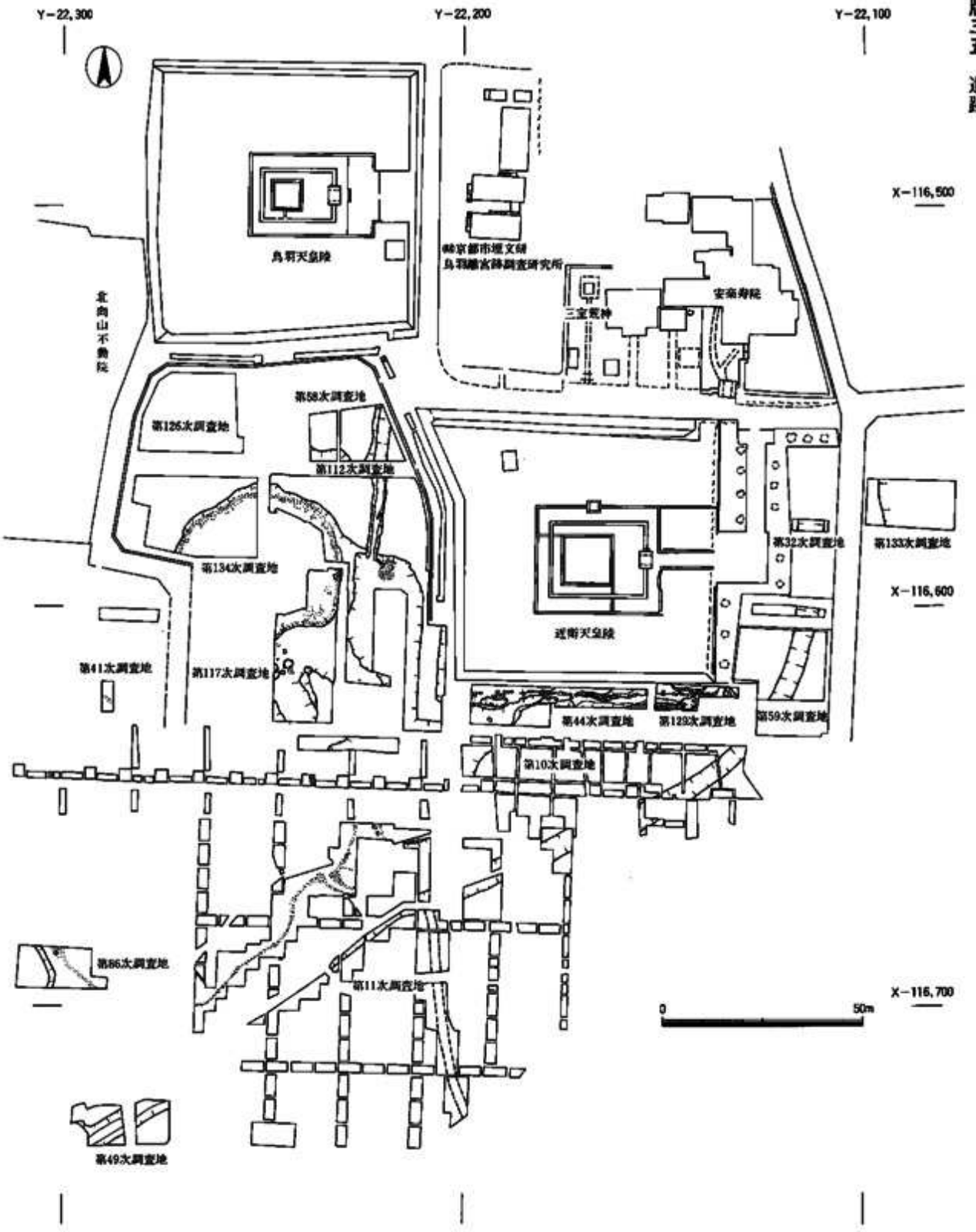
不明広葉樹柾目（×100）

不明広葉樹板目（×40）

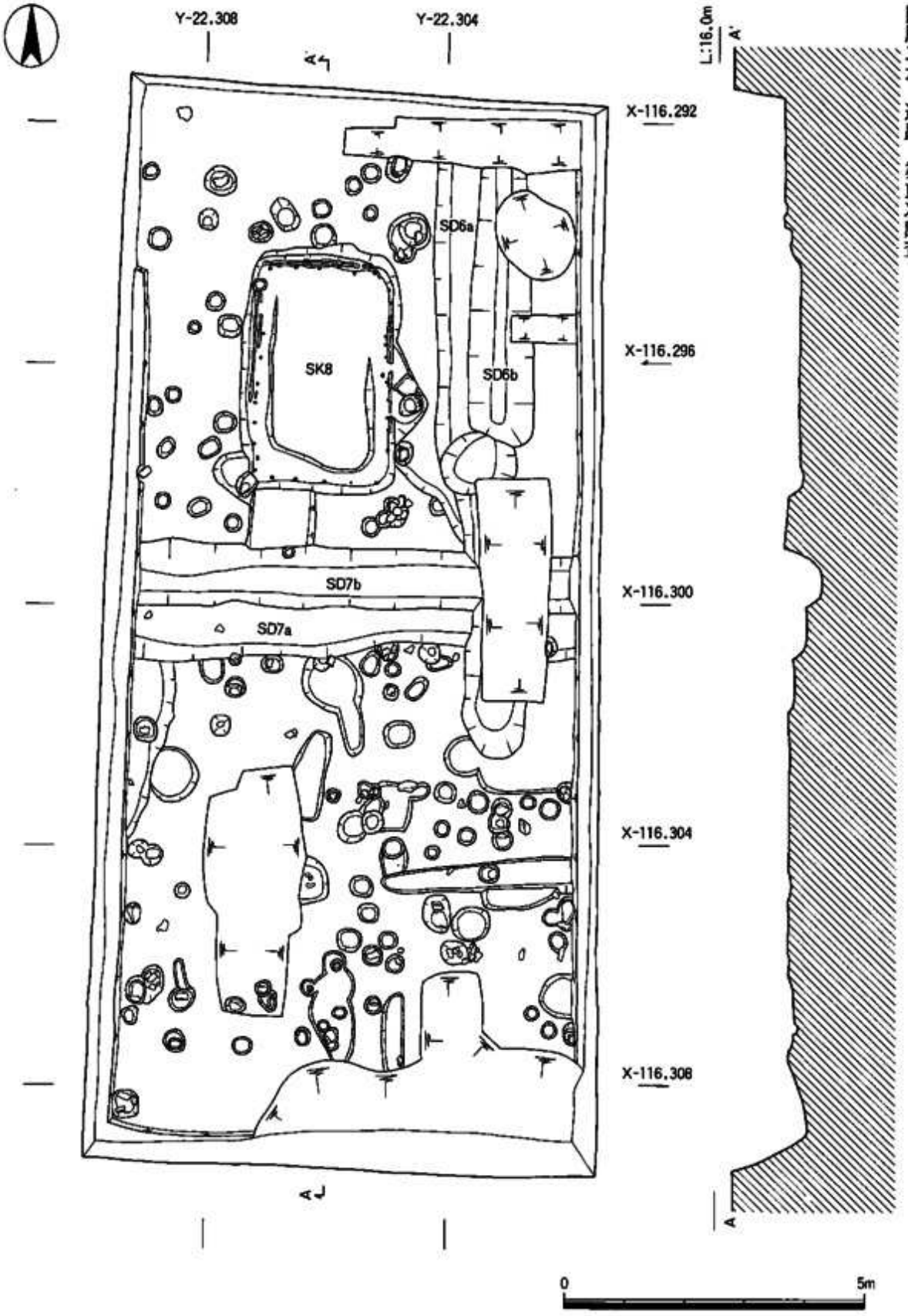
建築部材および根株顕微鏡写真(2)



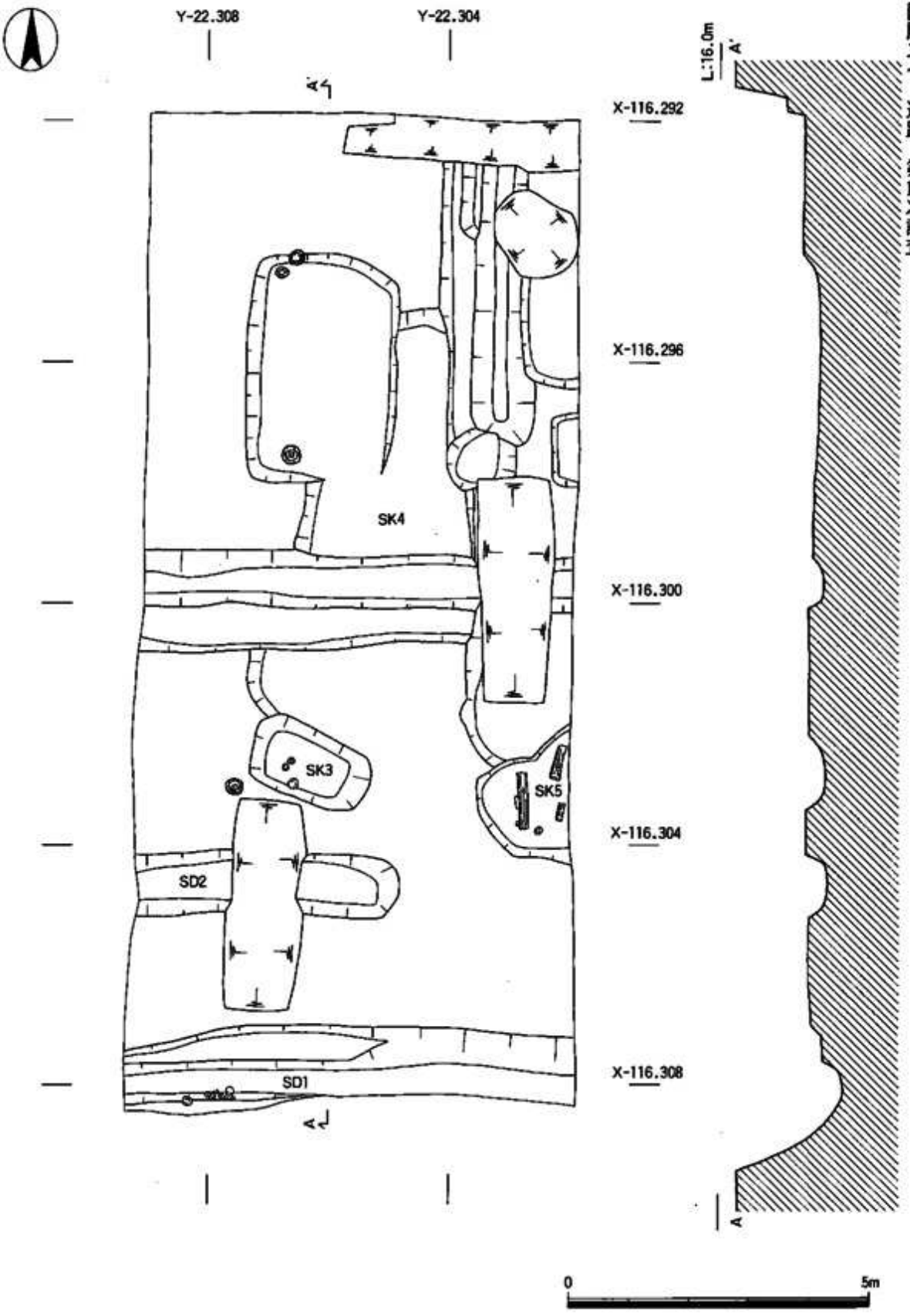
調査位置図


Y−22,300
Y−22,200
Y−22,100
X−116,500
X−116,600
X−116,700
鳥羽天皇陵
(財)京都市埋文研
鳥羽離宮跡調査研究所
三宝荒神
安楽寿院
金剛山不動院
第58次調査地
第126次調査地
第112次調査地
第134次調査地
第41次調査地
第117次調査地
近衛天皇陵
第32次調査地
第133次調査地
第44次調査地
第129次調査地
第59次調査地
第10次調査地
第86次調査地
第11次調査地
第49次調査地
0
50m

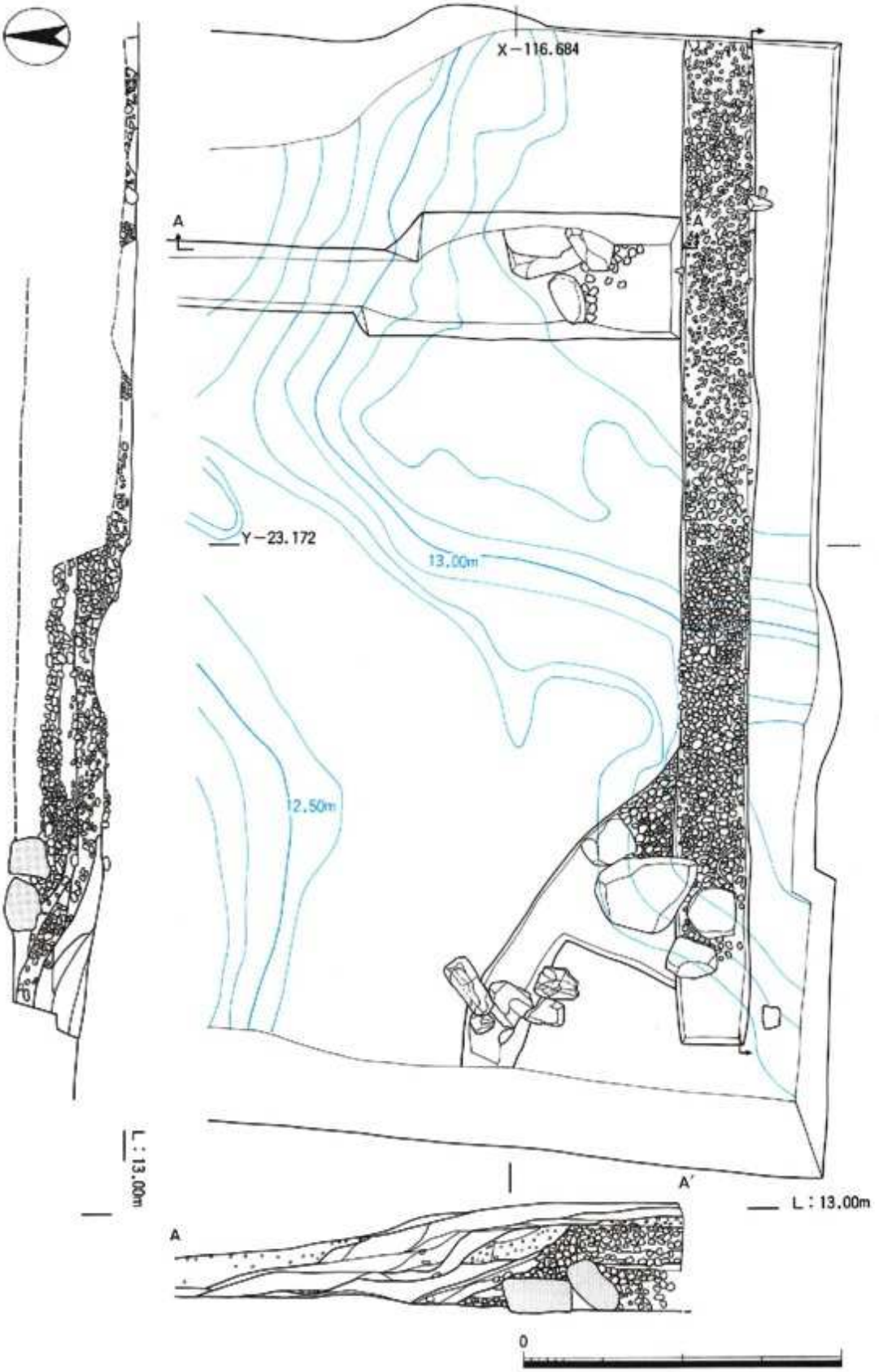
東殿地区調査位置図


Y-22.308
Y-22.304
L:16.0m
A'
A
X-116.292
X-116.296
X-116.300
X-116.304
X-116.308
SD6a
SD6b
SK8
SD7b
SD7a
0
5m

第２遺構面遺構実測図


Y-22.308
Y-22.304
X-116.292
X-116.296
X-116.300
X-116.304
X-116.308
SK4
SK3
SK5
SD2
SD1
L:16.0m
A'
A
0
5m

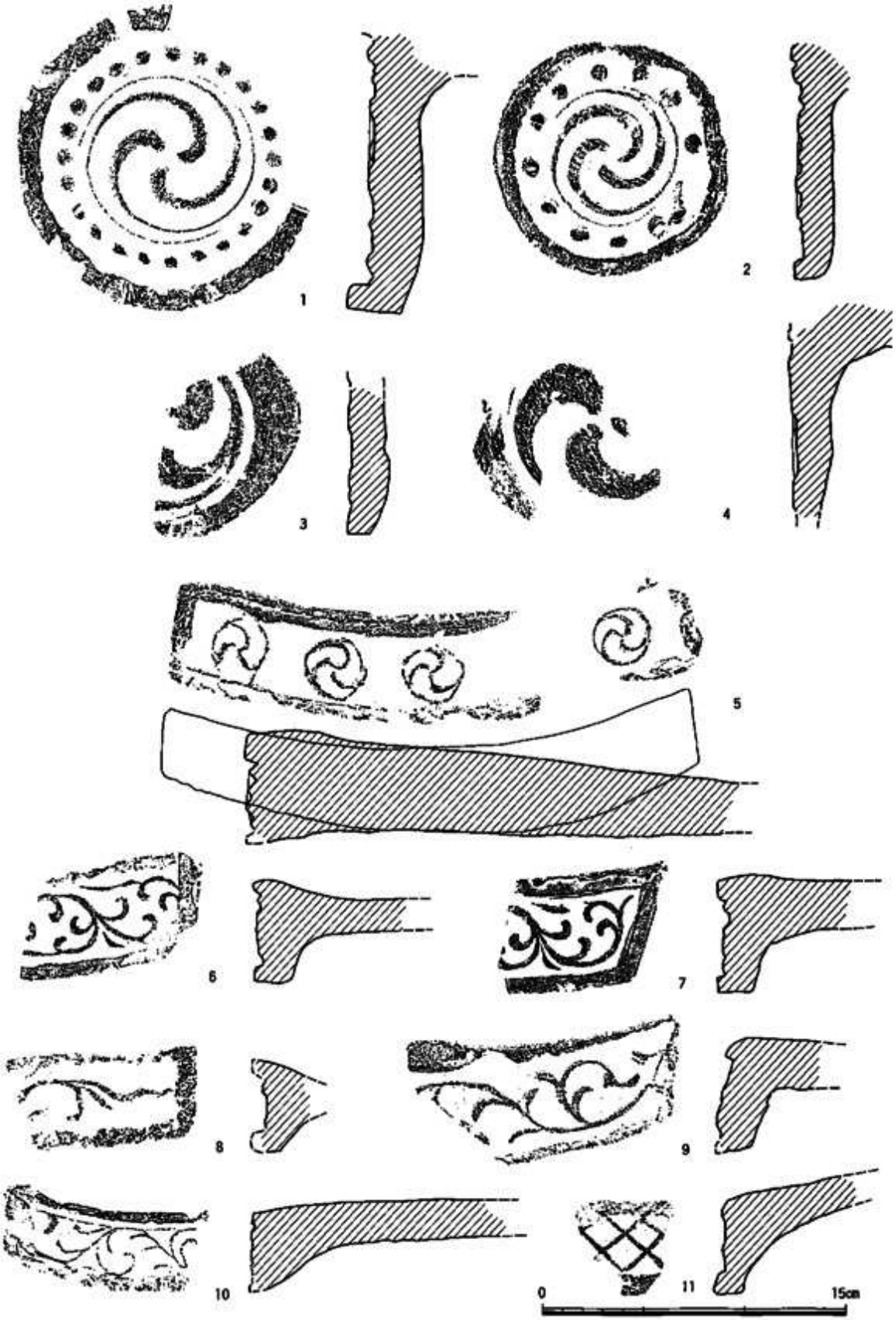
第３遺構面遺構実測図



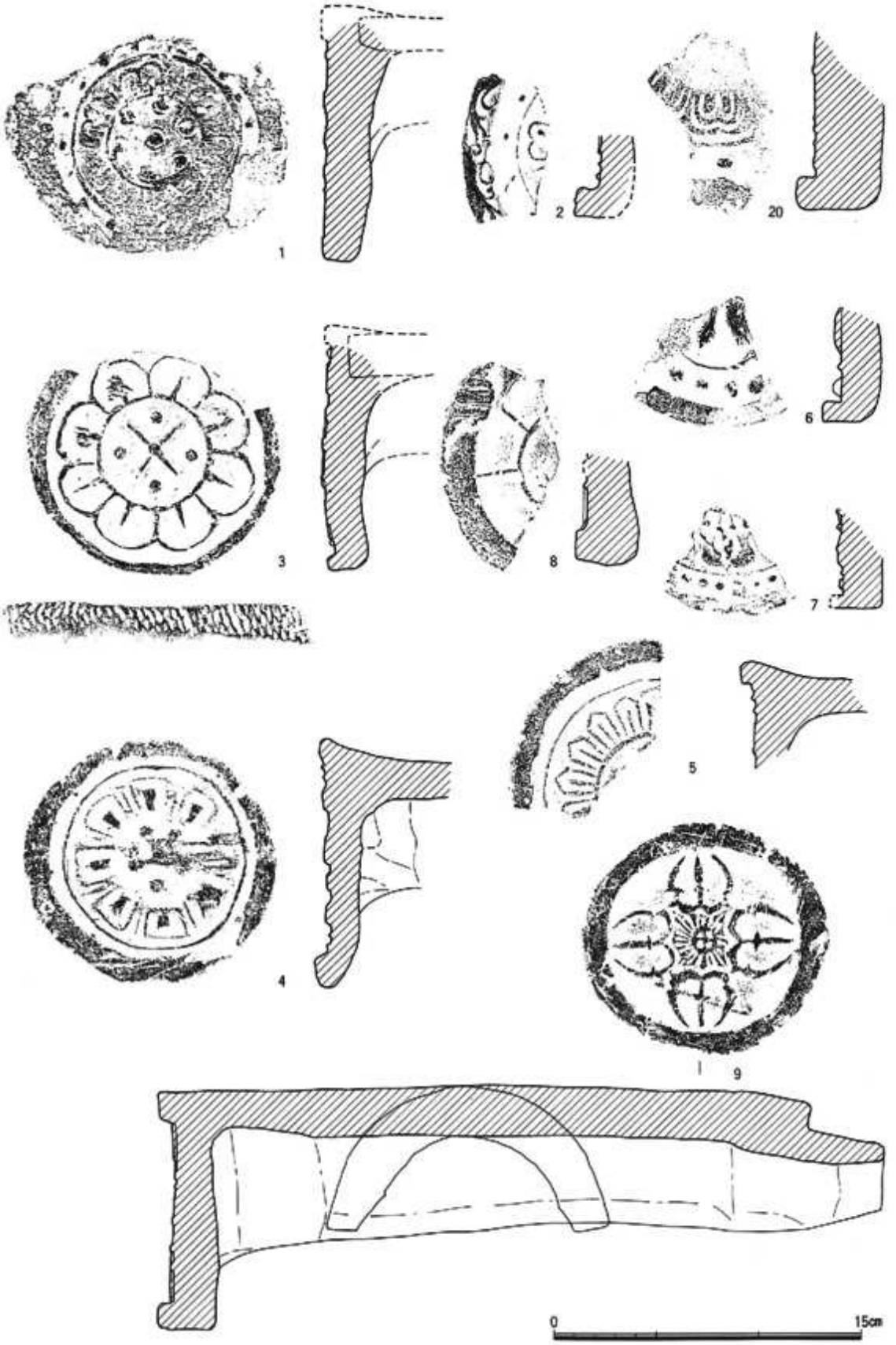
ＳＸ１平面・断面実測図

X-116.570
X-116.580
Y-22.260
Y-22.270
Y-22.280
13.0m
13.5m
14.0m
SK1
0
10m

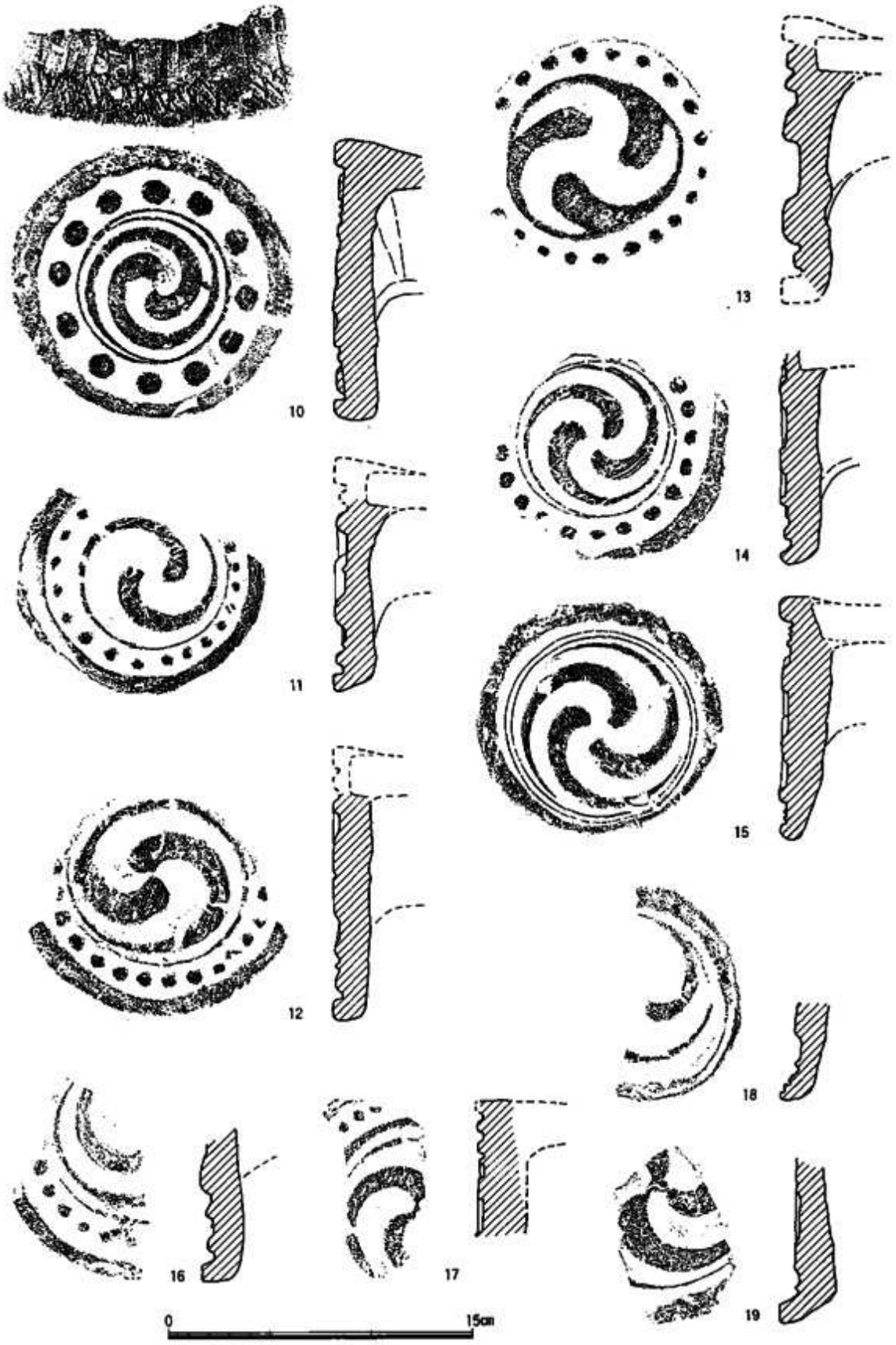
遺構実測図



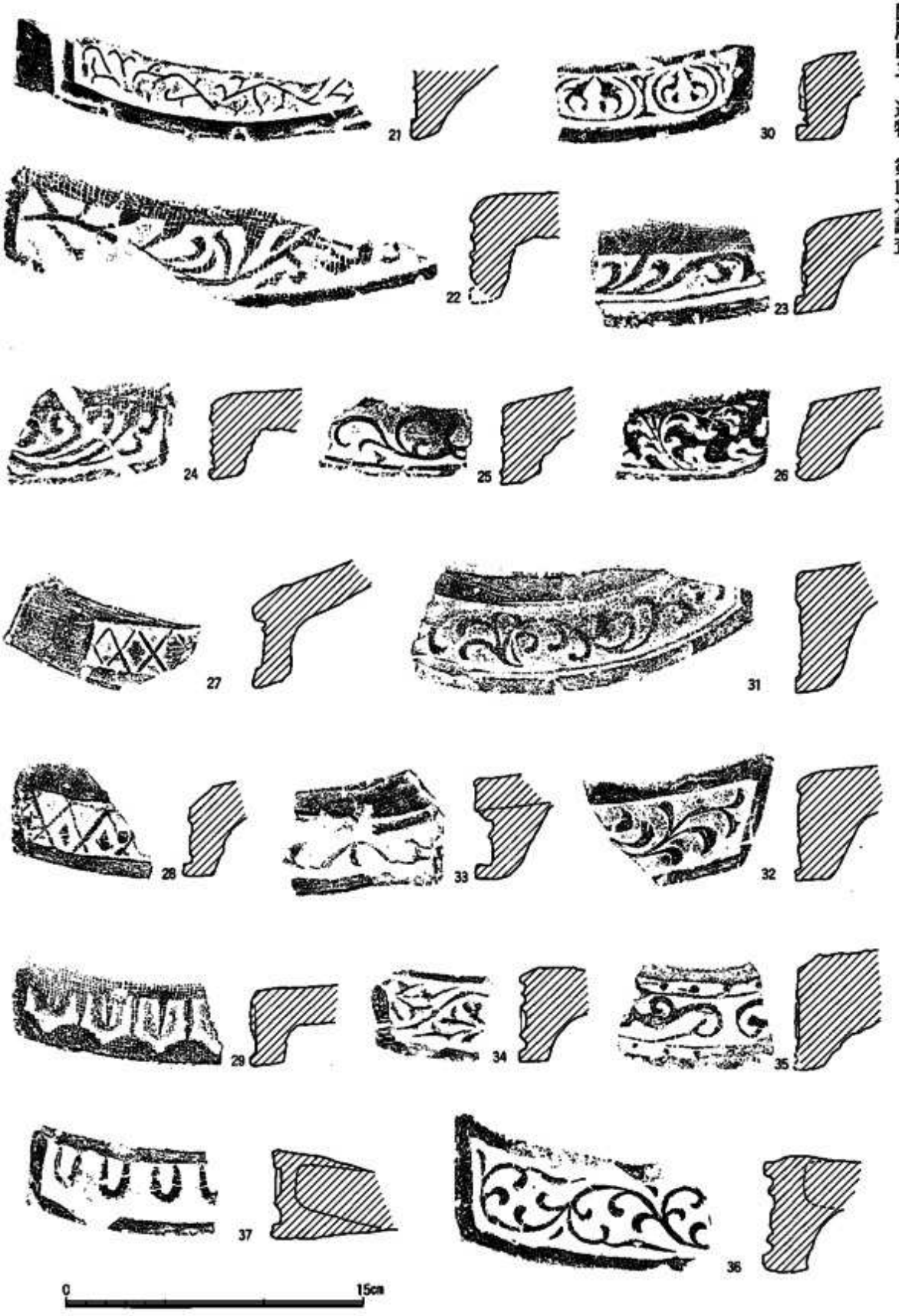
軒丸瓦・軒平瓦拓影実測図



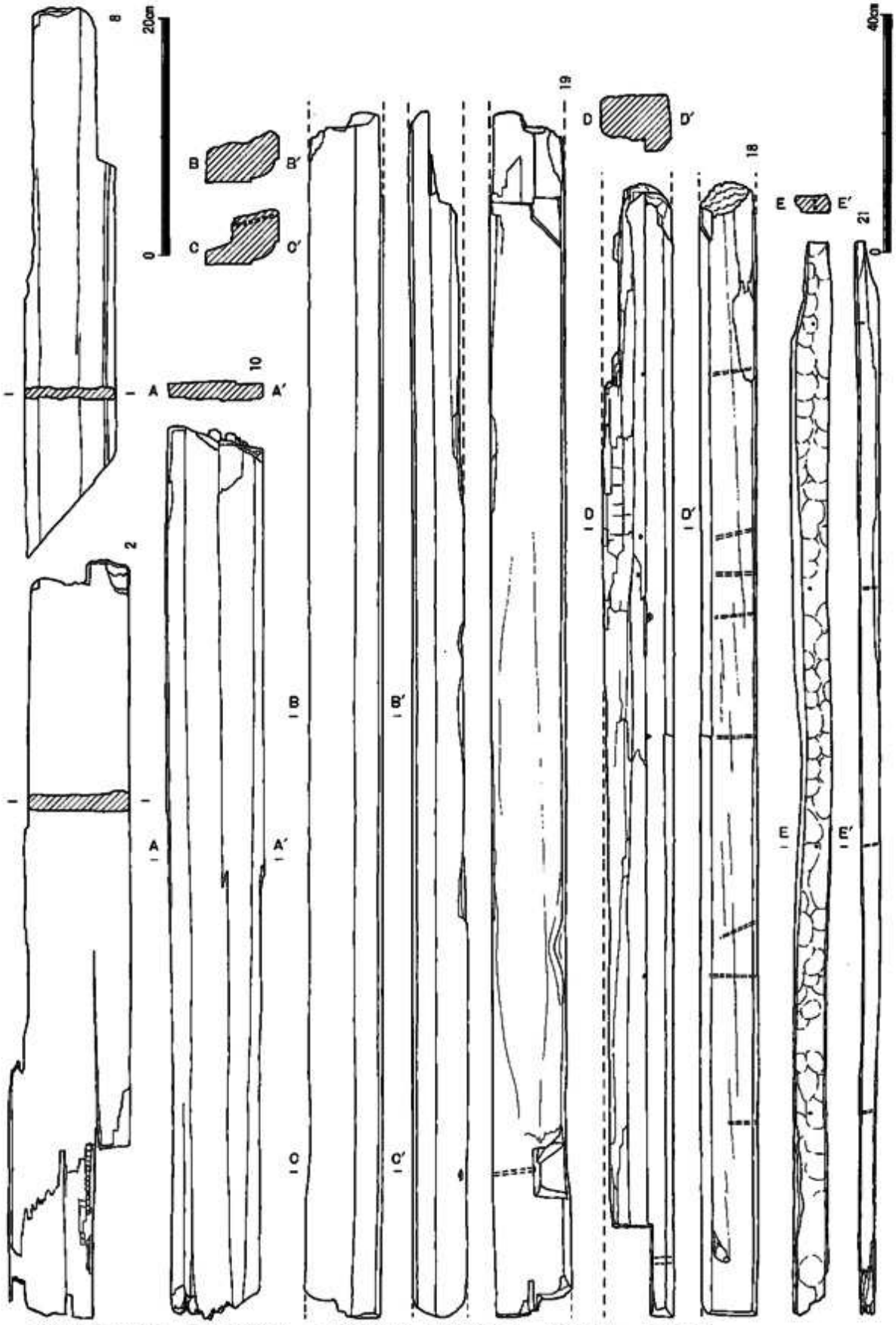
軒丸瓦拓影実測図(1)



軒丸瓦拓影実測図(2)

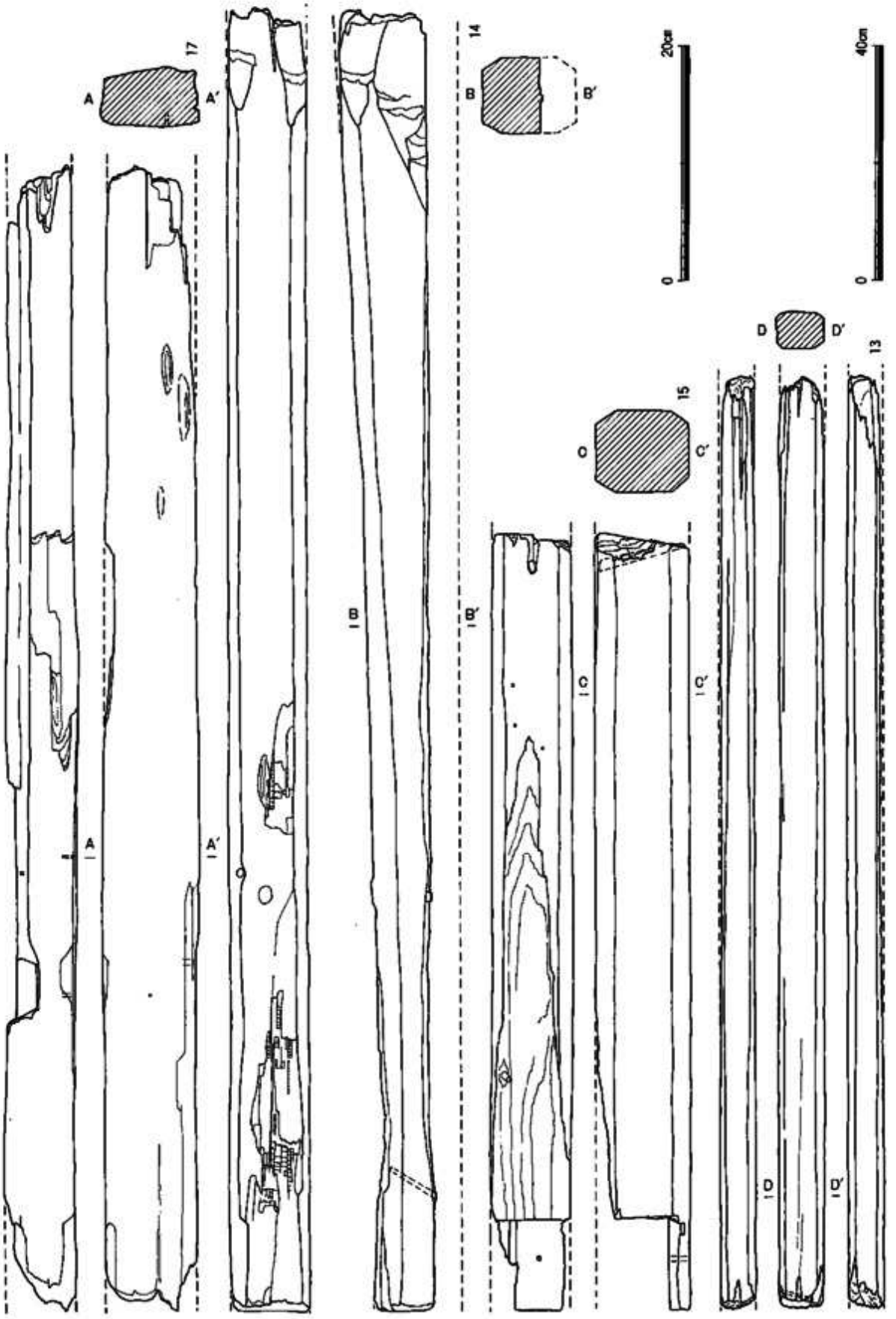


軒平瓦拓影実測図



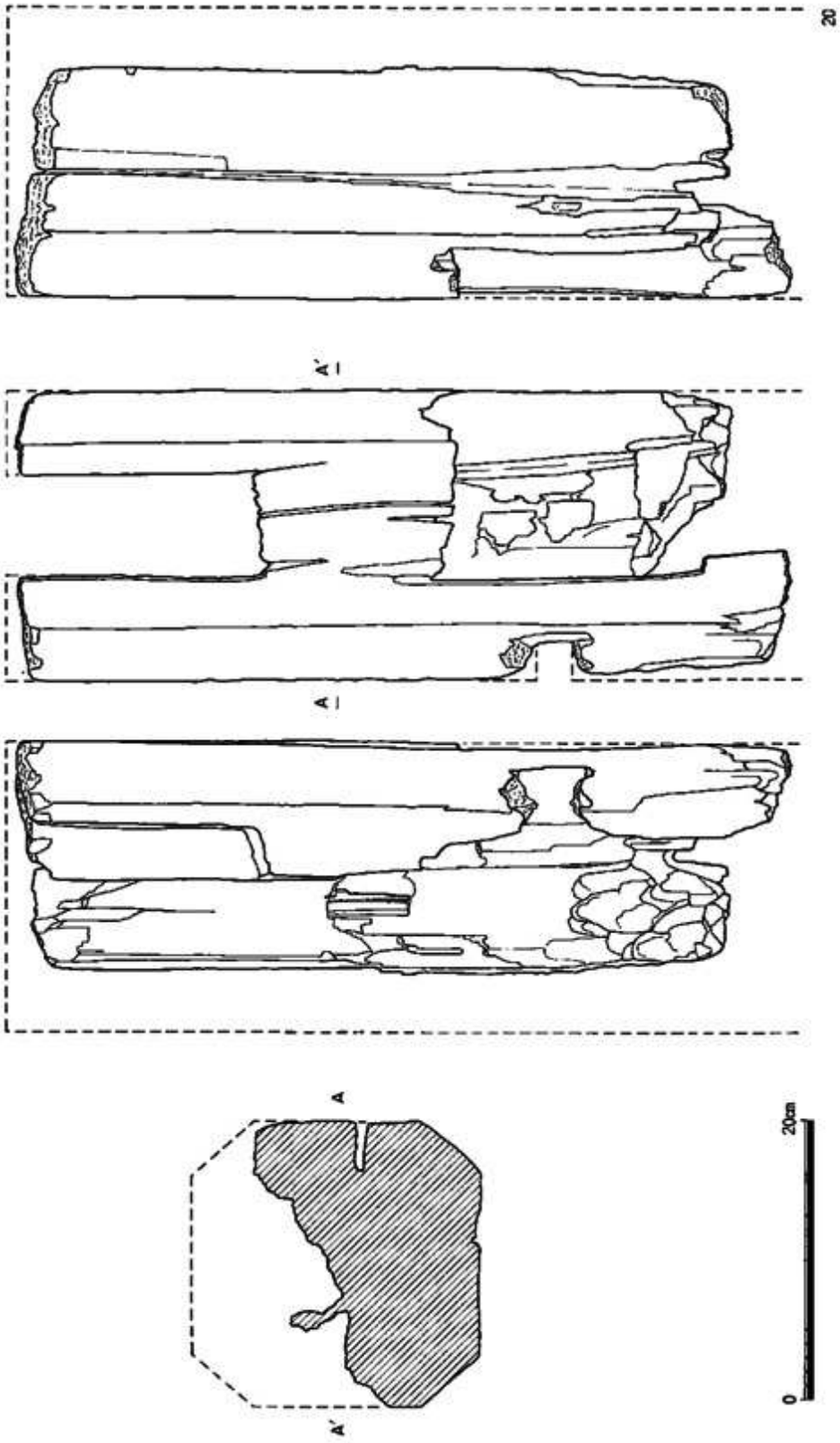
建築部材実測図　屋根板(2.8)・野地板(10)・回り縁(18)・幣軸(19)・床板(21)

(21のみ縮尺1/10，他は1/5)

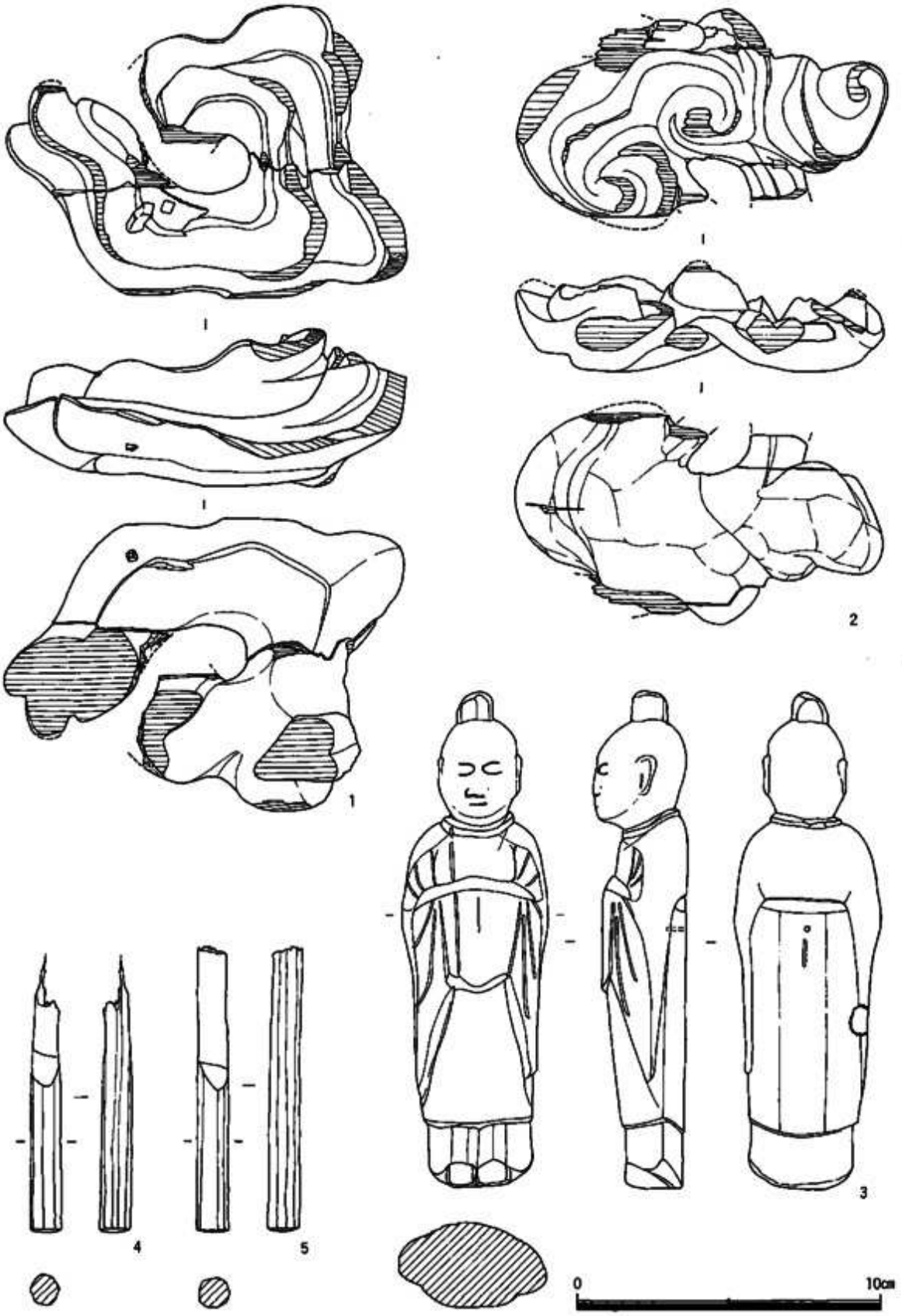


建築部材実測図　垂木(13～15.17)

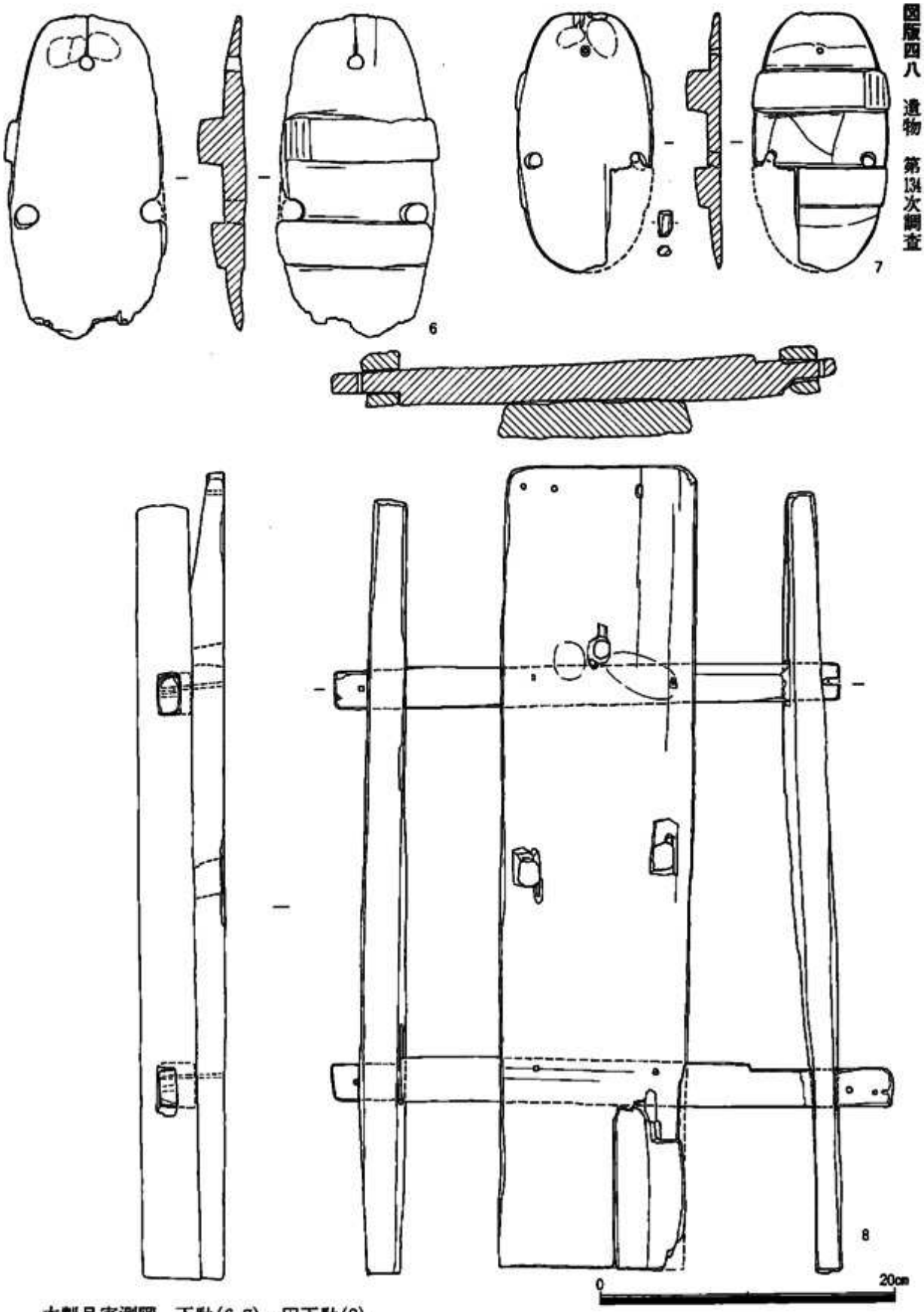
(13のみ縮尺1/10，他は1/5)



建築部材実測図　柱(20)



木製品実測図　雲形木製品(1.2)・人物像(3)・軸(4.5)



木製品実測図　下駄(6.7)・田下駄(8)

鳥羽離宮跡発掘調査概報

平成元年度

発行日　平成2年3月31日

発　行　京都市文化観光局

住　所　京都市左京区岡崎最勝寺町13　京都会館内

編　集　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入る元伊佐町256-1
TEL (075)415-0521

印　刷　真　陽　社